

四 勞農露國ノ内政ト對外關係 一九八

「チタ」方面ニ於ケル当局ハ未タ我經濟界減勢ノ信念ヲ持シ居ル情形ナルニ依リ同人等今回ノ浦潮行ハ此際幾分ナリトモ日本貨ノ流通範圍ヲ縮少シ出来得ヘクンハ之カ驅逐策ヲ講シ「チェルボンツイ」ノ流通ヲ確実ナラシメ尚所持ノ金塊及邦貨ハ従前ノ例ニ依リ米國金貨トナシテ貯藏シ若シ

一三四

クハ露國內ニ輸送スルモノニアラスヤト思考セラル
右御參考迄ニ報告申進候 敬具

本信写送付先 在哈爾賓總領事

事項五 日露國交回復交渉關係

1 後藤・ヨッフエ會談

一九九 一月四日 在ハルビン山内總領事ヨリ
内田外務大臣宛

チタ方面ノ經濟狀況實地視察及ビ通商協約交
渉下準備等ノ為メ島田副領事ノチタ行ヲ懇懇

セル勞農代表者ノ談話報告ノ件

機密第壹ノ一号 (一月十五日接受)

大正十二年一月四日

在哈爾賓

總領事 山内 四郎 (印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

「ボゴージン」島田會談ニ関シ報告ノ件

最近浦潮ニ赴カントシテ当地勞農代表「ボゴージン」方ニ
査証ヲ願出デタル邦人長谷川録三郎(元陸軍通訳)侮辱セ
ラレタル由申出ニ接シタルニ付島田副領事ハ先般負傷シタ
ル際「ボ」ヨリ受ケタル見舞ニ對スル答札並今回「ボ」ノ

五 日露國交回復交渉關係 一九九

付近(島田ノ宿舍ハ「ボ」ノ宿舍ヨリ約二丁ノ処ニアリ)
ニ移転シタル通知トヲ兼ネ十二月二十九日「ボ」ヲ往訪シ
タルニ右會談終了後彼ハ滿鉄社員大沢準外一名ノ歐露行ヲ
許可(十二月二十八日古沢滿鉄公所長ノ談ニヨレハ右ハ事
実ナリト)シタルガ他ニモ歐露行希望ノ日本人多キ由ヲ述
ヘ日露兩國々交モ現今ノ儘放置スルコトハ好マシカラズ目
下漁業ニ付浦潮ニテ交渉ヲ開始セントシ又林業代表者ハ知
多ニ赴ク等弗々実行ニ取掛リ居レルモ要スルニ日本側ヨリ
樺太問題ニ付何等カ申出ニ接セザル間ハ兩國談判ノ開始ハ
實現覺束ナシ自分一個ノ考ヲ云ヘバ本件ニ付「ヨッフエ」
ヲ度外視スルヲ得ズサレド同時ニ日本側ガ直接「ヨッフエ」
ニ對シ何等カ積極的態度ヲ執ルコトモ行懸上出来マジ就テ
ハ貴官(島田)ニシテ此際往復數ヶ月ノ期限ニテ知多ニ出
張セラレテハ如何彼地ニハ極東革命委員會アリテ極東ヲ支
配シ居レリ而シテ一方經濟狀況其他實地ヲ視察セラルルト
同時ニ他面兩國通商協約ニ関スル下準備ヲセラルルコトト
シテハ如何右ニ對スル中央政府ノ意見ハ知ラザルモ予ノ考

一三五

五 日露国交回復交渉関係 二〇〇

ニテハ貴官ノ知多行ニ対シテハ勿論便利ヲ供与シ得ヘシト
思考ス昨今米國ハ対勞農政府態度ヲ急変シ之ヲ承認セント
スルノ情勢ニアリ日本カ此際活動セザルハ了解ニ苦シム処
ナリト内話セリ

右ニ対シ島田ハ予ハ日本中央ノ意見ハ之ヲ明ニセザルモ日
露兩國民カ現状ノ儘永ク放置セラルベキモノニアラザルハ
私見トシテ勿論同感ナリ唯知多併合後各地ニ於ケル貴國官
憲ノ対日態度ハ乍遺憾無遠慮のニシテ通商協約成立シタリ
トテ果シテ之カ実現可能ナリヤヲ疑ハシムルモノ多々アリ
露國側ニシテ主義上親善関係ヲ欲セントセバ宜シク其態度
ヲ改ムヘキナリ御話ノ自分ノ知多出張ニ付テハ新聞紙上ニ
屢々伝ヘラレ居ルモ実ノ所我外務省ニ於テハ時期尚早ナリ
ト認メ居ル次第ニシテ之ガ実現ハ当分ノナカルベシト信ズ
仮リニ自分ニ於テ出張セントスルモ生命財産安全ノ保障通
信自由ナキヲ如何セント云ヘルニ「ボ」ハ勿論生命財産ノ
保障ハ之ヲ与フヘシ但シ暗号電信ノ使用ニ関シテハ元來勞
農側ハ相互主義ヲ希望スルガ故ニ日本政府ガ「アントノ
フ」ニ対シテ暗号電信ヲ許可セズ又日本ニアル旧來ノ露國
領事館ヲ相手トシ居ラルル間ハ仮令貴官ガ知多滞在中モ暗

二二六

号電信ヲ許可セザルベシコハ主義上ノ問題ナリ但シ貴官旅
行上ノ便宜ハ十分供与シ得ヘシ云々ト語レリ島田ハ右ニ対
シ何等「コンミット」スルコトナキ様努メ難談ニ移リタル
ニ「ボ」ハ要スルニ森林其他ノ利権ニ付日本當業者ト露國
官憲トノ間ニ仮令契約成立スルトスルモ兩國々交樹立シ露
國政府ヨリ右契約ニ対シ正式許可ナキ間ハ事業ニ着手セシ
メサルベキニ付國交問題ガ先決問題ナリト云ヒ尚在日本旧
露國領事館ノ証明書等ヲ日本官憲ニ於テ認メ居ルカ如キ実
情ハ甚タ露國側ノ遺憾トスル所ニシテ現ニ最近露人中右証
明書ヲ提出シタルモノアリタルニ付本官之ヲ没収シ置ケリ
ト云ヘリ

右御参考迄ニ報告申進候 敬具

二〇〇 一月九日 後藤新平ヨリ
松平欧米局長宛

ヨッフエニ対スル旅券交付取計方依頼ノ内閣

總理大臣秘書官宛口上書送付ノ件

口上

一 ヨッフエ日本觀光ノ希望アリシコトヲ察知シ彼入京ノ

事ヲ内許シ安全ニ退京シ得ル様取計フヘキコト前日首相
ノ内諾ヲ得タルニヨリ先方ヘ交渉ノ末彼來ルヘシト云フ
コトニナレリ勿論宣傳講演等ハ兼テ首相内話ノ通り禁シ
置ケリ

一 此方ヨリ今明日中一人差遣シ候ニ付北京公使館又ハ天
津領事館ニテ旅券交付方取計ハルル様外務省ヨリ紹介状
ヲ下付セラレタシ

十二年一月九日

新平(自署)

首相閣下

浅井秘書官ヘ手渡シ

註 右口上書ヲ封入シタル後藤子爵ヨリ松平欧米局長宛封筒ノ表
面ニ同子爵ニ依ル下記ノ書入アリ「別冊老部相添」

二〇一 一月十日 内田外務大臣ヨリ
在中国小幡公使宛(電報)

ヨッフエノ入國許可決定ニ関シ指示ノ件

第三号

在貴地「ヨッフエ」日本觀光ノ希望ヲ有シ日露協會会頭後
藤子ニ其意ヲ通シタル趣ニテ同子ヨリ加藤首相ニ内談ノ次

五 日露国交回復交渉関係 二〇一 二〇二

二〇二 一月十日 在ハルビン山内總領事ヨリ
内田外務大臣宛

日露交渉ノ再開問題ニ関シ勞農代表者ノ磯部

及比石原ニ対シ為シタル談話報告ノ件

機密第一六号 (一月二十三日接受)

大正十二年一月十日

在哈爾賓

二二七

五 日露国交回復交渉関係 二〇三

総領事 山内 四郎(印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

磯部、石原兩人ノ行動ニ関スル件

貴電第一九一(註)号冒頭磯部検一、石原友一郎カ労働代表側ニ出入シ日露會議ニ付論議スルハ何等誤解ヲ招クノ虞有ルニ付注意アリタキ旨御来示ノ次第モ有之候間當時島田副領事ヲシテ夫レトナク右兩人側ニ注意セシメ置候処兩人ハ「オザルニン」去リテ「ボゴージン」来任シタル後モ依然同所ニ出入シ種々意見ノ交換ヲ行ヒ居候右ニ対シ当方トシテ此上兎ヤ角注意スルモ如何カト思考シ其儘ニ致シ居ル内一月十日磯辺、石原兩人島田副領事ヲ来訪シ左ノ通り内話致候由ニ有之候

十日「ボゴージン」ト会見シタルニ同人ハ日露會議再開ニ付左ノ如キ考ヲ有スル由ヲ語レリ先般「ヨッフエ」ヨリ日本政府ニ提出セル樺太駐兵ニ関スル覚書中ノ利権提供ニ関スル部分ニ対シ日本側ヨリ何等回答ニ接セザリシタメ乍本意談判ハ其儘トナリ行詰リ居ル次第ノ処今日ニテモ日本側ヨリ右ニ対シ何分ノ回答ナクバ露国側ハ更ニ具体的案ヲ具シテ覚書ヲ送ルヘク斯クシテ談判ノ糸口ヲ開クコトヲ得

一三八

ヘシ将来ノ兩國談判ニ対スル準備ハ自分(「ボ」)ヲ経テ開始スルコトヲ得ヘシ何分ニモ「ヨッフエ」ヨリ与ヘタル前記覚書カ日本政府ニヨリテ無視セラレ居ル今日露国側トシテハ此上手段ノ採ルベキナシ云々

右石原ハ東支鉄道ニ対シ交付セラルヘキ借款ニシテ目下「マルクス」岡本(元東支鉄道南部線管理官)間ニ話合中ノモノニ付何等カ暗ニ奔走中ノ由ニ有之候
右何等御参考迄ニ報告申進候 敬具

註 大正十一年十一月八日内田外務大臣宛在ハルビン山内総領事宛電報第一九一号ニ付テハ日本外交文書大正十一年第一冊二九〇文書及二八八文書参照

二〇三 一月十一日 在中国小幡公使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

ヨッフエ滞日ノ条件遵守ヲ誓約セシムルノ要
アルベキニ付請訓ノ件

第三三三号 (一月十二日接受)

貴電第一三三三号ニ関シ

御来示ノ条件ハ從來ノ遣リ口等ニ顧ミ「ヨッフエ」ニ於テ守ルコト疑ハシキモ兎ニ角文書ヲ以テ誓言セシムル要アリ

大正十二年一月十三日

在哈爾濱

総領事 山内 四郎(印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

日露交渉開始問題ニ関スル露紙論調報告ノ件

当地発刊労働側機関紙「ツリビューナ」ハ一月十三日ノ社説ニ於テ「最早了解スベキ時ナリ」ト題シ大要左ノ通り論シ居レリ

川上公使ノ入露ト関連シ又々日露交渉再開説伝ハルニ至レリ最近知多ヨリ帰来セル邦人ハ旅行中好感ヲ得タル由ヲ伝ヘ日本漁業家代表ハ浦潮ニ来リ露国側ト交渉セントス是ト同時ニ日本新聞紙上ニ松平欧米局長ノ意見顯ハレタリ左レド露国領土ノ一部ヲ日本軍ガ占領シ居レル間ハ有利ナル通商関係ヲ持スルコト能ハザルナリ通商関係ノ開始スベキ途ハ樺太問題ヲ經由スルニアリ

日本ハ樺太ヨリ撤兵スルノ外総テ旧来ノ方針ヲ捨テザルベカラズ親善ナル政治関係ヲ樹立シ現露国政府ヲ承認シテ始メテ日露通商問題ヲ解決シ得ベキナリ是レ唯一解決ノ方法ナリ云々

ト思考スルニ付旅券査証願出ノ際ハ右様取計フコトトスベキモ不承諾ノ場合口頭ニテ申聞ケ置ノミニテ可ナリヤ尚ホ同人ノ随員等ニハ同様旅券査証差支ナキヤ折返シ御回電ヲ請フ

二〇四 一月十二日 内田外務大臣ヨリ
在中国小幡公使宛(電報)

ヨッフエノ滞日条件遵守ノ誓約問題ニ付回訓

ノ件

第一六号

貴電第三三三三号ニ関シ

本件ハ特ニ文書ヲ以テ誓約セシムルノ要ナカルヘク口頭御申聞ヲ以テ足レリト思考スルニ付右様御取計アリタク随員等ニ関シテハ往電第一三三三号末段申進ノ員数ニ限り旅券査証相成差支ナシ

二〇五 一月十三日 在ハルビン山内総領事ヨリ
内田外務大臣宛

日露交渉再開ニ関スル労働側機関紙ノ論調等

報告ノ件

公第二五号 (一月十九日接受)

五 日露国交回復交渉関係 二〇四 二〇五

二三九

五 日露国交回復交渉関係 二〇六

又一月十三日発刊ノ「ノーウオスチ・ジーズニ」紙ハ左記記事ヲ掲載シ居レリ

昨今日露交渉再開説頻ニ伝ハリ居レルガ右ニ付本社記者ガ労農代表「ボゴージン」ニ就キ問合セタルニ同代表ハ長春會議ニ於テ露国委員ノ主張タル樺太撤兵問題ニ関スル要求ガ日本側ニヨリテ実行セラレザル限り労農政府ハ日本トノ交渉ヲ絶対ニ開始セザルベシト語レリ云々

右報告申進候 敬具

二〇六 一月十三日

在ハルビン山内総領事ヨリ
内田外務大臣宛

日露交渉再開ニ関スル新聞論調報告ノ件

公第二八号

(一月二十四日接受)

大正十二年一月十三日

在哈爾濱

総領事 山内 四郎 (印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

日露交渉再開ニ関シ露紙論調報告ノ件

当地「ノーボスチ・ジーズニ」ハ一月十三日ノ社説欄ニ於テ大要左記ノ通記述スル所アリ

二四〇

最近日露関係ニ漸ク打開ノ道頭ハ来リ東京政府トノ協議可能ヲ近カラシメツツアリ川上公使ノ莫斯科訪問ハ右ノ事実ヲ表兆スル一証タラズンバアラズ此ノ訪問ノ目的ガ隣邦国間ノ協議復活ニアルハ何人モ疑ヒナキ所トス

過去日露會議ノ失敗ニ終レルコトハ相互ニ失望ヲ禁ジ得ザリシ処ニシテ政治的並經濟的關係ノ復活ヲ必要トスル自覺ハ双国共ニ旧ト異ナル処ナシ日露ノ外交ガ二度迄相会合シタル原因玆ニ在リトセバ当然新会商ノ行ハルベキ必然ニシテ且ツヨリ多キ効果ヲ齎ラサザル可ラス内田外相最近ノ声明ニヨレバ日本外務省ハ一意華盛頓條約ノ遂行ヲ念トシ海外ニ於ケル對日本政策ノ誤解一掃ニ努ムベシト

樺太ヨリノ撤兵ハ露国ノ希望ヲ充タシ且ツ又上記ノ趣旨ニ副フ最上策タランカ殊ニ「モスコ」政府ハ日本ニ樺太ノ租借權ヲ提供セント云ヘバ東京政府ニトリテハ此ノ一事ヲ敢行スル易々タルノミナラズ有利ナラント思考セララル利權提供ニ関シテハ啻ニ樺太ノミニ止ランヤ蓋シ国内ニ弘ク外国資本ノ吸收ヲ期スル以上露国ハ日本資本家ニ極東ノ富源開拓ノ道ヲ提供スルニ於テ吝ナラザルベシ惟フニ日本企業家ハ此ノ前代未開ノ宝庫ヲ有スル極東露領ニ於テ事業開始

資本投下ノ為メ恰好ノ天地ヲ見出スナルベシ

但シ叙上ノ道ニ達スベキ点ニ際シ真ノ平和關係ノ設定ヲ以テ唯一ノ条件トスベキコト敢テ言フ俟タズ侵略政策ガ獲ル所少ク互讓ノ精神ニ基ク和衷的協商議ガ却ツテ目的ヲ遂グルモノナリ

内田外相ガ真ニ其所言タル戰爭ノ教訓ヨリ生マレタル日本帝國外政ノ樞軸タラシメザル可ラストナス忍耐及和衷協同ノ主義ニ順応スヘキ意アリトセバ「モスコ」滞在中ノ其代表者ハ露国政府ト進ンデ協議ヲ進捗シ得ベシト信ゼラル云々

右及報告候 敬具

二〇七 一月十五日

内田外務大臣ヨリ
在中国小幡公使宛 (電報)

ヨッフエ本邦來訪ノ際ノ隨員從者ノ員數ニ関

シ指示ノ件

第二二号

貴電第三八号ニ関シ

御問合セノ員數ハ隨員從者ヲ合セ二名位ニ限ルノ意味ナリ (往電第一三号末段中意味不明ノ箇所アラバ再電スベシ)

五 日露国交回復交渉関係 二〇七 二〇八

二〇八 一月十六日

在天津吉田總領事ヨリ
内田外務大臣宛 (電報)

ヨッフエノ渡日工作ノ為メ來津セル藤田勇ノ

言動ニ関スル件

第四号

(一月十七日接受)

本官発在支公使宛電報第四号

社会主義者東京毎日新聞社長藤田勇ハ十五日奉天ヨリ來津予テ (十一日北京ヨリ來津) 当地滞在中ナリシ同主義者田口運藏偽名田中二郎ヲ伴ヒ同日北京ニ赴キタルガ同人ハ「ヨッフエ」ヲ密カニ日本へ同行スル用務ヲ帶ブル旨ヲ同社ノモノニ申シタル趣ナリ為念

外務大臣へ転電セリ

二〇九 一月十七日 在中國小幡公使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

ヨッフエノ来日交渉ニ関シ先方ハ生命財産ノ
書面ニ依ル保障ヲ求メシ為メ話合不調ニ了リ
シ事情報告ノ件

第五一号

(一月十八日接受)

貴電第二二二号ニ関シ後藤子爵ノ代表者藤田勇十五日朝着京
当館ト内々打合ノ上同夜「ヨッフエ」ト会谈シタルニ「ヨ
ッフエ」ハ露国使節タル面目上後藤子爵ヨリ招待ヲ受クル
形式トナサレタキ旨懇望シタルニ付藤田ハ直ニ右可能ナリ
ヤ後藤子爵ニ電報セル趣ナルガ之ヨリ先キ「ヨ」ハ日本方
面行ノ望薄キヲ感ジタルニヤ広東又ハ澳門方面ニ赴ク為已
ニ十六日ニ出発ノコトニ決定シ居タル為兎ニ角後藤子爵ヨ
リノ返事ハ上海ニテ待ツコトトシ従者四名同伴予定ノ通り
同日朝上海ニ向ヘリ然ルニ「ヨ」出発後藤田ハ更ニ打合ノ
為「ヨ」ノ留守ヲ預カル「ネフチャン」ニ面会セル処同人
ハ前記後藤子爵ノ招待ノ外当公使館ヨリ日本滞在中生命財
産ノ安全、通信及旅行並ニ出国ノ自由等ニ関シ書面ヲ以テ
保証セムコトヲ要求シ藤田ハ日本公使館ニ於テ旅券ニ査証

シ入国ヲ許可スル以上当人ニ於テ特ニ犯罪ヲ犯シ又ハ誓約
ニ反シ宣伝事業ニ従事セザル限り其自由ヲ束縛セラレザル
ハ勿論ナルベク夫等ノ点ニ付聊カモ懸念ノ要ナキヲ説明セ
ルモ同人ハ欧州ニ於ケル実例ヲ引用シテ飽迄文書ニ依ル保
証ヲ要求シ当方ノ誠意ニ信頼セザルガ如キ態度ヲ執リタル
為藤田ニ於テモ我慢シ切レズ一旦話ヲ打切り引揚ゲ直ニ出
発帰国ノコトニ決定セルモ折角本件ノ為態々北京迄来レル
コトニモアリ兎ニ角後藤子爵ヨリ何等返電アル迄当地ニ滞
在スルコトナレリ

二一〇 一月十八日 在中國小幡公使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

ヨッフエノ来日ニ関スル先方ノ要求ニ付報告
及ビ請訓ノ件

第五四号

(一月十九日接受)

往電第五一号ニ関シ
後藤子爵ヨリ「ヨッフエ」宛丁寧ナル正式招待ノ電報来リ
タル由ナル処先方ニテハ前電所報ノ生命財産ノ安全、通信
(暗号電報及「クーリエ」ノ往来ヲ含ム)旅行及出国ノ自
由、進ンテ税関通過等ノ際ニ於ケル外交官ノ特権等ニ関シ

日ガ外交的「ミッシェン」ヲ有スルニ非ザル關係上到底之
ヲ認ムル能ハズ將又藤田ハ後藤子爵ヲ通シテノ外当省ト何
等直接ノ關係ナシ

二一二 一月二十二日 在上海田中總領事代理ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

ヨッフエ一行ノ本邦滞在中ノ保障要求ノ取扱
ニ関シ請訓ノ件

第一四号 至急

(一月二十三日接受)

在支公使発閣下宛電報第五四号ニ関シ

本日「ヨッフエ」秘書及藤田、田口三名来館「ヨ」夫妻、
小児及秘書 Levin, Shwarsalon ノ五名並支那人「ボーイ」
一名本月二十七日当地出帆ノ「エムプレス・オブ・エシア」
号ニテ本邦ニ向ケ出発ノ予定ノ由ニテ旅券査証ヲ願出デタ
ルヲ以テ之ヲ与ヘ置ケリ(「ボーイ」ハ無旅券ナリ)又藤
田、田口モ同船スヘキ旨申居レリ尚同秘書ハ「ヨ」本邦ヘ
ノ旅行ニ関シ生命財産ノ安全、通信、旅行及出国ノ自由、
税関通過ノ際ニ於ケル外交官ノ特権等ニ関シ文書ノ保障ハ
要セザルモ(口頭?)ニテモ宜シキニ付小官ヨリ安心シ得
ル説明ヲ聴キ置キタシトノ申出アリ此点如何ニ取計フベキ

当公使館ヨリノ文書ニ依ル保障ヲ執拗ニ要求シ居レル趣ナ
ルガ藤田ノ意見ニテハ藤田ヨリ後藤子爵ノ代人トシテ当館
ニ対シ日露協会ガ「ヨ」ヲ招待スルニ付前記ノ諸点ニ対シ
保障ヲ与ヘラレタキ旨歎願書ヲ差出シ当館ニ於テ之ニ保障
ヲ与フル形式ト為サバ如何ナルモノナリヤト申出居ル処何
レニスルモ「ヨ」ノ旅行ニ対シ此ノ如キ保障ヲ文書ニテ与
フルコトハ到底不可能ノ事ト思考セラルルモ為念何分ノ儀
折返シ御回訓アリタク尚ホ後藤子爵ノ代人ト称スル藤田ト
貴省ノ關係本使心得ノ為併セテ御回電アリタシ

二一一 一月二十二日 内田外務大臣ヨリ
在中國小幡公使宛(電報)

ヨッフエノ本邦来訪ニ関スル待遇振ニ付回訓
ノ件

第三七号

貴電第五四号ニ関シ

入国ヲ許可スル以上本邦滞在中生命財産ノ安全ニ付出来得
ル限りノ保護ヲ与フベク出国ノ自由ナルハ当然ノ儀ナルガ
我方ニ於テ文書ニ依リ斯カル保障ヲ与フルヲ得ザルノミナ
ラズ通信及通関ニ関スル外交官ノ特権ハ「ヨッフエ」ノ来

ヤ前記公使電報ト関連シ至急何分ノ儀回電アリタシ
在支公使へ転電セリ

二二三 一月二十四日 在滿州里田中領事代理ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

樺太利権讓渡問題ソノ他ニ関スルカラハン外
務次官トノ会談ニ付川上公使ヨリ報告ノ件

第八号 (一月二十四日接受)

川上公使ヨリ左ノ通

本使一月二日任地発四日莫斯科着滞在一週間十一日同地発
二十三日当地ニ安着セリ莫斯科滞在中外務次官「カラハ
ン」氏(大臣不在)ト私的会談ヲ試ミルコト前後四回右会
談中先方内話ノ要点左ノ通

(一)樺太北半ノ売却ハ現在ノ事情上「サウエト」政府ニ於テ
到底不可能ナルモ日本軍隊撤退ヲ条件トシテ右領土内ニ
於ケル石油、石炭及森林ニ関スル利権ハ政府ト会社タル
トヲ問ハス長期租借条件(三十年乃至四十年)ニ依リ日
本ニ讓渡スルニ異議ナキコト

(二)尼港問題ハ兩國共同調査委員会ヲ組織シ双方ノ逆行爲
ヲ取調ベ之ニ依リテ生シタル損害ハ相殺ノ上残余ヲ賠償

シ以テ該問題ヲ解決スルコト

(三)前記樺太北半ニ於ケル利権ノ外沿海州及其ノ他ノ極東露
領ニ於ケル森林鉅山等ニ関スル利権ヲモ或ル条件ノ下ニ
讓渡シ得ルコト

(四)今後更ニ日露會議ヲ開ク場合ニハ本条約ヲ締結シ日本ハ
「サウエト」政府ヲ承認スルコト

(五)勘察加及其ノ他ニ於ケル漁業及滿州ニ於ケル鉄道等ノ諸
問題ニ関シテハ和衷協同ノ精神ヲ以テ之ヲ協定スルコト
(六)前記漁業ニ関シテハ速ニ「デクレット」ヲ発シ帝政時代
同様ノ方法ヲ以テ邦人ニ漁区ヲ貸下グル為本年漁期ニ間
ニ合フ様目下取急キ準備中ナルコト

尚其ノ他詳細ノ事項ニ関シテハ着京ノ上親シク閣下ニ報
告シ且之ニ関スル卑見ヲモ開陳スヘキ考ナリ

二二四 一月二十五日 内田外務大臣ヨリ
在上海田中總領事代理宛(電報)

ヨッフエ本邦滞在中ノ取扱及ビ待遇ニ関シロ

頭ヲ以テ申聞ケ方訓令ノ件

第一二号 至急

貴電第一四号ニ関シ

御請訓ノ義ニ関シ生命財産ノ安全ニ付テハ出来得ル限りノ
保護ヲ与フヘキモ来邦ノ時期ニ就テハ目下ノ処甚タ面白カ
ラズ旅行出国ハ何等法規ニ違反セザルハ勿論宣伝其他好マ
シカラザル行動ナキ限り自由タルベキモ外交官ノ特權ハ之
ヲ与フル能ハズ從テ暗号電報ノ発受及通関ノ自由ハ許可ス
ル能ハザル旨口頭ヲ以テ先方へ申聞ケラレタシ

二一五 一月二十五日 在ハルビン山内總領事ヨリ
内田外務大臣宛

日露交渉再開ニ関スル新聞論調報告ノ件

公第七八号 (二月二日接受)

大正十二年一月二十五日

在哈爾濱

總領事 山内 四郎(印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

第三次日露會議ニ関スル件

川上公使ノ入露説伝ハルヤ当地ニ於テハ第三次日露會議開
催説云為セラレタル処同公使来哈期確實トナリ右党側新聞
ハ川上公使莫斯科訪問ノ目的ハ徒爾ニ終リ急遽帰朝ノ途ニ
就キタリ而シテ一旦日露ノ關係ガ接近のトナリ第三次日露

五 日露国交回復交渉関係 二二五 二二六

會議開催ヲ前ニ共產党ガ樺太撤兵ヲ必須条件ノ前提トシ強
硬意見ヲ持セルハ西欧各国間ニ不和相次ギ歩調乱レ来リ此
結果自己ニ有利ナル展開ヲ見ルベシトノ予想ヲ抱キタルニ
基クモノニシテ川上氏ト並ンテ漁業問題ニ関シ浦潮ニ於テ
渡辺領事ガ協議ヲ進メ不結果ニ終レルモ莫斯科ノ差金ニヨ
ルト俄然日露會議開催説ヲ否認スル態度ニ出デタリ而シテ
想像的予断ヲ下ス通弊アル当地新聞ノ論調ハ明日又開催説
ヲ云為スルヤ計リ難クアナガチ留意ニ値セズト思考セラル
ルモ一月二十四日「ザリヤ」紙ノ報道ニ依レバ第三次日露
會商ハ漸ク機熟シタルモノノ如ク即チ信頼シ得ル筋ヨリ得
タル処ニヨレバ「アントノーフ」日露會議開催ニ関スル予
備交渉ヲ了ヘ會議ニ於テ討議セラルヘキ重要事項ニ就キ莫
斯科ニ報告スル処アリタリ會議地トシテ露国ハ知多説ヲ持
チ出シタルモ日本側ハ未ダ何分ノ回答ヲ發セズ恐ラク川上
公使ノ帰朝ハ會議ノ時期並ニ場所ヲ決定スル上ニ於テ重要
ノ役割ヲ演ズベシ云々ト伝ヘ居レリ

右御参考迄及報告候 敬具

二一六 一月二十六日 内田外務大臣ヨリ
在上海船津總領事宛(電報)

五 日露国交回復交渉関係 二一七 二一八 二一九

ヨッフエノ来日ハ此際面白カラザルモ尚来航

ノ模様アリヤ問合ノ件

第一三三 至急

「ヨッフエ」ノ来朝ハ少ク共此際ハ面白カラザル処往電第一二二号訓令ニヨル貴方申入ニ対スル先方ノ態度並右申入ニ拘ラス「ヨッフエ」ハ猶来航セムトスル模様アリヤ否ヤ折返シ回電アリタシ

二一七 一月二十六日 内田外務大臣ヨリ
在上海船津総領事宛(電報)

ヨッフエノ来日延期申入方訓令ノ件

第一四号 大至急

往電第一二二号ニ関シ「ヨッフエ」本邦渡来ノ趣新聞ニ表ハルルト共ニ一部ノモノハ甚シク反感ヲ懷キ殊ニ昨今政治季節ノ最高潮ニ達セントスル折柄警察ニ於テ出来得ル限りノ努力ハ為スベキモ万一ノ事アル場合ニハ更ニ日露間ニ面白カラザル結果ヲ来ス虞アルニヨリ往電第一三三号所載ノ如ク先方ニシテ尚来邦セントスル模様アルニ於テハ貴官ハ前記ノ事情ヲ篤ト先方ニ説明ノ上此際一先ツ来遊ヲ相当ノ時期迄延期セシムル様措置セラレタク尚其ノ結果電報アリタシ

領報告ノ件

大阪毎日新聞記者黒田乙吉ハ浦潮通過ノ為メ旅券ノ裏書ヲ求ムベク一月二十五日「ボゴージン」ヲ往訪セル際会谈ノ序ヲ以テ頃日来第三次日露協商可能説喧伝セラルル処之ニ対スル感想如何ト試問セル処「ボゴージン」ハ日露両国ノ隣接シ居リ何時モ交戦状態ニモ非ラスサリトテ親交関係モナキ状態ニアルコトハ双方ノ為ニ不利ナリ殊ニ何等カノ協定ヲ結ブコトハ日本ノ利益上必要ニシテ春頃迄ニハ何ントカ解決ノ曙光ヲ見出サザル可ラス然レトモ最近「ヨッフエ」ヨリ日本政府ニ対シ申入レタル公文ニ対シ回答發セラレザル限り公式ノ交渉ハ六ヶ敷カルベキモ自分トシテハ之カ交渉開始ニ就テハ何等カノ糸口発見セラルヘシト信ス但シ樺太ヨリ撤兵ノ前提条件トスベキハ勿論ニシテ日本カ侵略的野心ナキコトハ充分知悉セラレ其国情ヨリシテ経済的發展ノ希望ヲ有スルコトハ必要止ムヲ得ザルモノト認メ露国トシテハ撤兵セラルルナラバ樺太全体ニ涉リ「コンセツション」ヲ日本ニ提供スル用意スラアリト述ヘタルニ付黒田ハ語ヲ挾ミ管テ長春ニ於テ「ヤンソン」氏ハ油田開掘セラレ米人某ニ利権ヲ提供セリト明言セル事実ニ矛盾スルナキヤ

五 日露国交回復交渉関係 二二〇

二四六

二一八 一月二十七日

在上海船津総領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

ヨッフエハ予定ノ通り本邦ニ向ケ出發ノ件

第一七号(至急) (一月二十七日接受)

貴電第一三三号ニ関シ「ヨ」ハ兎ニ角予定ノ通一月二十七日出發スルコトニ決シ長崎(若シ健康許スニ於テハ神戸)ニ上陸スル趣ナリ本件ハ当地ニ於テモ経緯アリ追テ電報スヘク右不取敢
在支公使ヘ転電セリ

二一九 一月二十七日 在ハルビン山内総領事ヨリ
内田外務大臣宛

日露交渉再開問題ニ関スルボゴージンノ談話

要領報告ノ件

機密第四六号 (二月六日接受)

大正十二年一月二十七日

在哈爾濱

総領事 山内 四郎(印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

第三次日露協商説ニ関シ「ボゴージン」ノ談話要

ヲ問ヒ訊シタルニ「ボゴージン」ハ極東共和国時代米人某ニ樺太油田開掘ノ利権ヲ与ヘタルハ事実ニ相違ナキモ交渉談途中米人ハ勝手放題ノ要求ヲ敢テシタルタメ尻切レトンボノ形ニ終リ露国トシテハ此約束ヲ打チ切リトセリ總ジテ米人ノ持チ込ム交渉ハ悉ク掛ケ引的ニシテ熱意ト誠意ニ欠クルアルハ從來ノ例ニ徴シ明ニシテ露人ハ今ヤ一般ニ米人ノヒヤカシノ態度ニハ好想ヲ有セス樺太ニ関シテハ寧ろ真面目ニ妥協交渉ノ上日本ニ利権ヲ提供セントスル方ニ意見略一致シ居レリ云々ト語レル趣ニ有之候
右何等御参考迄及報告候 敬具

二二〇 一月二十七日 在上海船津総領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

ヨッフエニ渡日延期方申入レタルニ対シ鮑迄

予定通り出發スベシト主張シ居ル旨報告ノ件

第二二二号 至急 (一月二十八日接受)

「ヨ」ハ往電第一七号ノ如ク本二十七日出發ノ予定ナリシ処昨二十六日貴電第一二二号ノ次第「ヨ」ニ其ノ秘書官ヲ經テ之ヲ通シタルニ「ヨ」ハ日本政府ノ「ヨ」ノ入国ニ対スル態度一変セリトテ甚タシク感情ヲ害シタル模様ニテ其ノ

二四七

為全然渡日ヲ中止スベシト迄申出デ若シ此ノ儘放任スル時ハ今後「ヨ」トハ勿論延イテハ勞農政府ト本邦トノ關係ニモ永ク面白カラザル印象ヲ貽ス虞アルモノト認メラレタルヲ以テ田中ヨリ日本政府ガ特ニ態度ヲ変ジタルモノトハ認メラレザル旨ノ説明ヲ与ヘタル結果往電第一七号ノ如ク兎ニ角予定ノ通り渡日スル事ニ決シタリ然ルニ其後貴電第一三号及一四号御来訓ノ次第アリ之ニ内務省ヨリ木下署長宛電報（内務大臣ヨリ兵庫長崎両県知事ニ対シ「ヨ」ノ上陸ヲ禁止スル事ヲ命ゼリ）ヲ加味シ此際ハ渡日ヲ見合スルノ得策ナルヲ篤ト通ジ少クトモ更ニ数週間ヲ延期シ「ヨ」ヨリ後藤子爵ト交渉ヲ重ネ一方当館ヨリモ「ヨ」ノ立場ヲ日本政府ニ説明シ「ヨ」ノ入国ニ対シ相当ノ保護ヲ与ヘ得ル準備ノ出来得ル迄出発ヲ見合セスル方得策ナル旨説示セシニ「ヨ」ハ前日ノ態度ヲ一変シ斯克成リテハ既ニ万般準備ヲ整ヘタル際ニモアリ体面上最早ヤ日本行ノ予定ヲ変ズル能ハズ本邦着後ノ危険ハ意トセズ又万一入国ヲ禁止セラルルコト有ルトモ兎ニ角本日ノ「エンブレス・エシヤ」号ニテ出発ス可シト頑張り居レリ先方ニ於テハ余程駈引有ルヤニ認メラルルニ付愈同船ノ出帆ヲ見ザレバ果シテ出発スルヤ

否ヤ明カナラザルモ成行不取敢電報ス
在支公使へ転電セリ

二二一 一月三十日 在浦潮松村総領事ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

日露国交ノ正常化ノ為メ交渉再開ヲ望ム各方
面ノ状況ニ付報告ノ件

第四九号 （一月三十一日接受）

「ソヴィエト」露国ノ最近ニ於ケル対日態度ニ関シテハ川上公使其他ノ報告ニ依リ御知悉ノ儀ト存スル処当方面ニ於ケル当局側乃至一般輿論ノ傾向ヲ按ズルニ露国政府統一事業ノ障碍タル薩哈噠撤兵問題ヲ解決シテ日本トノ条約關係ヲ設定シ対内外政策上自己ノ地歩ヲ鞏固ナラシメン為何等カノ機会ヲ捉ヘテ第三会商ヲ開始セント窃ニ腐心シアルハ当地当局其他在野有力家（主トシテ共產党乃至同党共鳴者）ノ口吻態度ニ依リ明カニシテ現ニ当面ノ懸案タル漁業林業等利権問題等ニ関スル我方ノ私的交渉ニ対シテハ表面好意の態度ヲ示シナガラ去リトテ速ニ我方ノ要望ヲ容レズ是等ノ案件ヲ以テ日露会商促進ノ一利器タラシメントスルモノノ如キ感アラシム最近当地新聞ハ川上公使今次ノ露国訪問

ヲ以テ日露懸案ノ解決上重要意義ヲ有スルモノトシテ同公使ノ斉多ニ於ケル「ロスタ」通信記者トノ会見談哈爾濱ニ於ケル同新聞会見談乃至東方通信等ニ掲載シテ露国ノ現状判明セラレ兩國国交ノ設定近キニアル如ク報道シ中ニハ「アントノフ」ガ既ニ日露再開ノ交渉ヲ經莫斯科ニ報告シ會議地点ハ斉多ト決定セリトカ或ハ帝国政府ガ薩哈噠撤兵ノ通牒ヲ列強ニ発シタリナドノ電報ヲ掲ゲ憲政会ノ露国承認ニ関スル決議其他会商促進ニ関スル邦字新聞ノ社説等ヲ翻訳掲載スル等種々宣伝ニ努メツツアルガ薩哈噠撤兵ノ報ニ関シテハ共產党機関紙ハ是レ容易ニ信ヲ置キ難キ甘言ト見ルヘク統一ニ努力セル吾人ハ従来ノ經驗ニ鑑ミ慎重ナル考慮ヲ要スヘシト論シ「ヨッフエ」今回ノ日本行ノ報道ニ関シテハ当局者ノ一人ハ之レ外交病治療ノ為ナラント諷シ「カデット」機関ハ之レ刻下ニ於ケル政治上ノ一新局面ノ展開ニシテ東京市長ノ「ヨ」氏招待ガ内田外相ノ議會ニ於ケル對露關係ノ演説ト殆ンド同時ニ行ハレタルノ事実ハ兩國妥協ノ好機ノ熟セルヲ語ルモノタリ欧州ガ再び戦乱ノ巷ト化セントシ亜細亞殊ニ支那亦平穩ナラザルノ今日ハ日露ガ特ニ総テノ危険点ヲ除去シテ協調ヲ要スベキノ秋タリ薩

哈噠問題ガ兩國ノ扞格ヲ与フルモノトセバ他方兩國ハ滿州問題ニ於ケル重要關係並經濟上兩國ノ結合ニ依リ受クベキ大利益ニ顧慮セザルベカラズ最近日本ノ輿論ガ此ノ点ニ対シ有シ来レル知覚及極東問題ノ解決ニ露国ヲ度外視スベカラズトノ信念ハ東京政府ヲシテ露国ト鞏固ナル通商上及政治上ノ協定締結ニ導カシムルモノトシテ吾人ハ之ヲ歡迎ス日本ハ率先シテ「ソヴィエト」露国ヲ承認シ露国民ニ内政不干渉ノ証ヲ挙グルコトニ依リ自ラ兩國相互ノ友好有利ノ新紀元ヲ画スルモノナリト論ジ居レリ

二二二 一月三十日 平塚長崎県知事ヨリ
内田外務大臣他宛

ヨッフエ一行長崎立寄ノ模様ニ付報告ノ件

外高秘第三三四号 （二月三日接受）

大正十二年一月三十日

長崎県知事 平塚 広義

内務大臣 水野 鍊太郎殿

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

指定 庁府県長官殿

木下、大久保、加々美各事務官殿

勞農露国代表者渡来ノ件

在北京勞農露国代表

アドルフ・アブラモウィッチ・ヨッフエ
(Mr. Adolf Abramovich Yoffe)

令三十九年

夫人

令三十九年

男子

令 三年

右者渡来ニ関シテハ曩ニ警保局長ヨリ電照ノ次第モ有之注
意中ノ処昨二十九日午前七時香港ヨリ上海經由当港入港ノ
英汽船「エンプレス・オブ・エシヤ」号ニテ上海ヨリ横浜
行トシテ露国人秘書「セルギウス・シー・シュバサロン」
(Mr. Sergius C. Shvassalon) 令三十五年、同「イリア・
ケー・レヴィン」(Mr. Ilya K. Levin) 令三十一年、從僕
支那人「ウァング」(Mr. Wang) 令三十六年並ニ東京毎
日新聞社長藤田勇令三十七年、要視察人田口運蔵令三十一年、
同伴(藤田及田口ハ長崎上陸トシテ乗船)寄港シタル
ヲ以テ取調ブルニ其事項及在港中ノ行動等左記ノ通りニシ
テ別ニ容疑ノ点ナク同日午後五時三十分出港ノ同船ニテ神
戸ヘ向ケ出港シタリ(即時警保局長、警視總監、神奈川、

兵庫県(電報セリ)

尚藤田ハ即時上陸午前十一時二十五分長崎駅発列車ニテ神
戸經由スト称シ東上ノ途ニ就キ田口ハ予定ヲ変更シテ一行
ト行動ヲ共ニシ横浜迄ノ切符ヲ購ヒ其儘乗船出発シタルガ
右一行ハ横浜上陸ノ予定ナルモ天候險惡ノ場合ハ神戸ニテ
下船スベシト語リ居タリ
右及申(通)報候也

左記

一、渡来ノ目的其他ニ就テ
「ヨッフエ」ハ頃來神經痛兼「レウマチス」症ニ侵サレ歩
行頗ル困難ヲ懣ヘツツアルニ付テハ之カ適當ノ療養地ヲ物
色シ居タル処恰モ今回日露協會長現東京市長子爵後藤新平
氏ノ本邦來遊方招待狀(藤田勇携行)ニ接シタルヲ以テ之
ニ応シ客月十七日北京発同十八日上海着「パレスホテル」
ニ投宿本月二十七日同地解纜ノ同船ニテ渡来シタルモノナ
ルガ東京着ノ上ハ多分帝國「ホテル」ニ投宿邦医ノ診断ヲ
求メ熱海若クハ他ノ適當ナル温泉場ニ宿痾ヲ養ヒ滞日約三
週間ニシテ上海ニ赴ク予定ナリト云フ
渡日ノ目的ニ関シテハ政治的意味ナシトテ堅ク口ヲ緘シテ

何事モ語ラズ只後藤子爵ノ厚意ニ感シ療養ノ為渡来シタル
ニ過ギズ然レドモ幸ニ日本官憲ノ諒解ヲ得バ會議ノ下準備
ヲ為スコトハ聊カモ差支フル所ナシ寧ロ之ヲ希望スル処ナ
リ日本到着ニ際シテノ感想ノ如キモ只今到着シタルノミニ
テ何等語ルベキ材料ヲ有セズ政治問題等ニ関シテハ此際差
控ヘタキモ予ノ渡日カ兩國親善ノ一助トナラムコトヲ衷心
熱望ス「セミヨノフ」モ当地滞在中ノ由ナルガ彼トハ全然
面識ナク只政敵トシテ見ルニ過ギズ云々ト語リシノミ

「ヨッフエ」夫妻ハ客年七月二十六日在「モスコ」勞農
政府発給、本年一月二十二日在上海日本領事ノ査証ヲ經タ
ル旅券及外交官旅券ヲ、秘書二名ハ普通旅券ヲ所持シ居レ
リ

一、在港中ノ行動

午前十一時三十分長崎水上署汽艇ニテ上陸二台ノ貸自動車
ニ分乘市内ヲ巡覽市外茂木町ニ至リシガ途中竹林ノ間ヲ過
ギ初メテ竹ヲ見タリト云ヒ同所ノ風光幽邃ナルヲ賞シ歸來
再ビ市内見物ヲナシ今魚町江崎鼈甲店ニテ婦人髪飾其他數
点(代価百三十円)ヲ買取り午後二時半西山町料亭富貴樓
ニ入り日本料理ニテ昼食ヲ喫シタルガ「鋤焼」ニ頗ル満足

ノ意ヲ述べ秘書「シュバサロン」ハ日本酒ハ頗ル美味ナリ
トテ數盃ヲ賞味シ同亭ヲ出デ同ジク自動車ニテ波止場ニ至
リ再ヒ水上署汽艇ニテ午後四時三十分帰船シタリ
市内觀光ノ際ハ身辺保護ノ名義ノ下ニ私服巡查三名(内一
名露語通訳)ヲ同乗視察取締ニ従事セシメタルカ同人ハ之
ニ對シ頗ル満足ノ意ヲ表シ居タリ

一、新聞記者トノ會見

新聞記者ト會見ヲナスヤトノ問ニ對シ強テ面会ヲ求メラル
レバ謝絶セザルモ進ンデ當方ヨリ會見ヲ希望セズト述べタ
ルガ同船ノ入港ト共ニ長崎日日、長崎新聞、東洋日ノ出、
大阪毎日、大阪朝日、福岡日日、九州日日等ノ各新聞記者
「ヨッフエ」ノ船室(第十一号室)ニ殺到シ面会ヲ求メテ
止マズ漸ク午前十一時ニ至リ「五分間」ヲ限リテ同船「ソ
ーシャル・ホール」ニ於テ會見(當県外事課露語通訳ヲ介
シテ)ヲ遂ゲタルモ其ノ會談ノ内容ハ第一項記載事項ノ大
要ニ過ギザリキ

一、要注意露国人ノ會見

長崎市常盤町四、本県編入要注意露国人「アレキサンダ
ー・ナバルコフ」ハ莫斯科派ノ任命ニ係ル義勇艦隊当地支

店副支配人ナルガ上海居住同派極東総支配人「エレデル」ヨリノ電命ニ接シタリトテ午前十時三十分同船ニ「ヨッフエ」ヲ訪ヒ市内見物ノ際ハ同人モ自動車ニ同乗專ラ其ノ案内等ニ努メタリ而シテ車中ニ於テ「ヨッフエ」ヨリ義勇艦隊ノ現況ニ付キ質問アリシガ「ナバルコフ」ハ莫斯科派ガ訴訟ニ於テモ勝訴トナリシコト及自己ガ目下其副支配人タルコトヲ述ベタル外何等重要問題ニ触レザリキ「ナバルコフ」ハ「ヨッフエ」ニ対シ重要事ニ関シ陳述ヲ希望シ「ヨッフエ」亦何等カ考フル所アリシナランモ前記外事課露語通訳ノ同車セルガ為之ヲ憚リテ何等談ズル処ナカリシモノト思料サル

一、藤田勇、田口運蔵が交々語りシ処左ノ如シ
「ヨッフエ」氏渡来ノ目的ハ既ニ同氏声明ノ通り後藤子爵ノ勧誘ニ依リ病氣療養ノ為メニシテ何等政治問題ニ関スルモノニアラズ尤モ同氏ハ極東方面ニ於ケル全權ヲ委任サレ居リテ本国政府ニ訓令ヲ仰グノ必要ナク隨時隨所ニ自己ノ意見ヲ以テ勞農露国ノ意思トシテ行動シ得ベキヲ以テ若シ滯日中日本側ニ於テ会議開催ノ意アラバ何時ニテモ之ニ応スルコトヲ得ルナリ

サレンコトヲ熱望スルモノナリ

一、新聞記者中大阪毎日記者布施勝治（一月二十八日午後五時十五分着列車ニテ来崎同二十九日午後四時上阪）及大阪朝日記者富士勝丸（一月二十八日午後五時十五分着列車ニテ来崎、同月三十日午前十一時二十五分上阪）ハ一般新聞記者ト会見前「ヨッフエ」ノ船室内ニ於テ数分間会談ヲ為シタリ

二二三 一月三十一日 在ハルビン山内総領事ヨリ
内田外務大臣宛

チタ及び労農代表タルオザルニンノモスクワ
帰任並ニソ連ノ極東政策面ニ於ケル変化ニ関
スル観測ニ付報告ノ件

機密第五八号

（二月九日接受）

大正十二年一月三十一日

在哈爾濱

総領事 山内 四郎（印）

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

オザルニンノ莫斯科着後ニ於ケル勞農政府ノヨツ

フェ一派ニ対スル態度ニ関シ報告ノ件

五 日露国交回復交渉関係 二二三

長春會議ニ於テハ同氏ハ尠カラズ対日感情ヲ害シ居レリ又吾タトシテモ日本政府ノ処置ニ就テハ焦燥ノ感ナキヲ得ズ一例ヲ挙げレバ今回ノ「ヨ」氏渡日ニ関シテモ差支ナシト云フアリ又渡日不可能ト云フアリ從テ同氏ノ行動決定上ニ於テモ六、七回ノ変更ヲ見ルノ余儀ナキニ至リ同氏モ渡来ヲ断念シ居タル程ニテ吾等門外漢ヨリ觀ル時ハ政府当局ノ態度鮮明ヲ欠キ方針常ニ一定セザルヤノ憾アリ「ヨ」氏モ此点ニ就テハ深く遺憾トナシ居レリ長春會議ノ際ノ如キモ然リ本省ノ電報ニ接スルヤ其文意略察知セラルルモ更ニ之ヲ電照シテ確メタル後ニアラザレバ何事モ為ス能ハズ如斯ハ只同會議ノ際ノミに限ラズ日本ノ在外交官ノ為スコト皆同一ナリ之レ日本外交官ハ寧ロ事務官トシテ事務ヲ処理スルノミノモノナレバ斯カル面倒ナル又効果ナキ事ヲ繰返スニ過ギザルナリ然レドモ今回ノ「ヨ」氏渡日ノ為露国人ノ対日感情頗ル融和シタリト思料ス後藤子爵ノ招待状ハ莫斯科其他ノ新聞ニ掲載サレ日本政治家ノ意図斯クノ如キモノアリトシテ一般ニ氣受ケ頗ル良好ナリト云フ兎ニ角同氏ハ日露親善ノ主唱者ニシテ今回ノ渡日ノ如キモ其ノ目的ノ一助タラシメンカ為メニ外ナラズ吾人モ同氏ノ希望ノ実現

「オザルニン」ハ東支鉄道付屬地ニ於ケル初代ノ知多政府代表並勞農代表トシテ有ラユル方面即對支那文武官憲、東支鐵道庁側各国領事並内外国個人トノ折合モ良ク隨テ支那側ハ「オザルニン」ノ離任ニ際シ盛大ナル送別ノ宴ヲ催シタル事実アリ又「オ」ノ出発ニ際シテハ多数ノ見送者アリタル等一般ノ氣受良好ナリシハ事實ニ有之候

知多代表ト称スルヨリモ「オザルニン」ノ名遙ニ普遍的ニ使用セラレ部下「ガidezリストロム」始メ事務員一同ノ氣受モ亦良好ナリシコトモ事實ニ有之候

在当地勞農代表ノ任務中最モ重要ナルハ勿論對東支鐵道問題ニ有之而シテ「オザルニン」ガ本件ニ極力勢力ヲ集中スルト共ニ對支那官憲、東支鐵道庁ノ兩關係ニ對シ慎重ノ注意ヲ払ヒ假令勞農側ノ希望ヲ實現セントスルニハ努力スルモ之カ実行ニ當リ其ノ実行方法ニ多大ノ注意ヲ加ヘ居タルコトハ一般ノ認ムル処ニ有之候

斯クテ「オザルニン」ハ右ノ方針ヲ以テ執務シ最後ニ態々北京「ヨッフエ」方ニ赴キ親シク陳情スル所アリタルモ遂ニ「ヨッフエ」ノ容ルル所トナラズ茲ニ兩者ノ意見確執シ並ニ「オザルニン」ハ不不満々トシテ当地ノ職ヲ去リ莫斯

科外務省ニ帰り親シク中央幹部ニ対シ極東ノ現状ヲ伝ヘ以テ幾分「ヨッフエ」ノ遣リ方ニ対シ對抗策ヲ講ゼント内々画策シ居タルコトハ想像ニ難カラズ「ヨッフエ」ハ之ヲ眞レタルガ故ニ「オザルニン」ノ莫斯科ニ直行スルヲ快トセス種々口実ヲ設ケテ「オ」ヲ知多ニ留メントセシコトモ亦事實ナルガ如ク而シテ右ハ結局「オザルニン」ノ切ナル希望ニヨリ莫斯科行ノコトトナリタルモノノ如クニ有之候

「オザルニン」当地出發前島田副領事ニ内話シタル所ニ徵スルモ莫斯科ハ当時「ヨッフエ」ノ報告意見ノ外何等權威アル報告ヲ有シ居ラズ随テ万事「ヨッフエ」ノ意見ニ従フノ外ナキ有様ナリシハ事實ニ有之然ルニ「オザルニン」ガ客年末日莫斯科ニ着シ逐次極東ノ実情ヲ報告スルト共ニ「ヨッフエ」「ボゴージン」一派ノ威力次第ニ落ち来リタルモノノ如クニ有之候

元ヨリ「ヨッフエ」「ボゴージン」一派ハ一般ノ氣受良好ナラザル人物ナルガ「ヨッフエ」ハ対支対日両交渉共更ニ進捗セズ「ボゴージン」ハ当地ニ於テモ「オザルニン」ニ比シ人氣遙ニ惡シカリシ矢先ニ「セレブリヤコフ」一行当地通過ノ際「ボゴージン」ノ訪問ヲ受ケザリシ事實アリタル

ノ件

一月五日「ソヴィエト」政府外務部ニ次官「カラハン」ヲ往訪シ本官ノ露国通過ハ「ポリシェヴィーキ」ガ政權掌握以來既ニ五カ年ニ垂ントスルニ拘ラズ日本人ノ入国ヲ拒絶セラレ居ル為メ日本人中新シキ露国ニ関シ正確ナル觀念ヲ有スル者殆ント絶無ナリト云フモ必ズシモ過言ニアラザルニ依リ仮令ヘ表面的ナリトモ露国ノ事情ヲ親シク觀察シ之ヲ日本ノ朝野ニ紹介シ以テ他日両国善隣關係復興ノ一助ト為シタキ目的ニ外ナラズト述ヘ更ニ大連長春ノ両會議ガ不幸ニモ何等ノ効果ヲ収メザリシハ極メテ遺憾ノ次第ナルヲ以テ今後同様ノ會議ガ更ニ開催セラルル場合ニハ是非円満ナル解決ヲ希望スル故此機會ニ於テ全然私的ニ隔意ナキ懇談ヲ為シタル語リタル処同氏モ大ニ本官通過ノ目的並ニ意見ニ賛同シ相互ニ胸襟ヲ開キ腹藏ナキ意見ノ交換ヲ為スヘキコトヲ快諾シ改メテ面晤スヘキコトヲ約シタルニ付翌六日同氏ノ自邸ニ於テ会谈セリ

劈頭本官ハ同氏ニ対シ日露善隣關係復興問題ニ関シテハ本官ガ露国通過ヲ決意セル当初ヨリ種々考慮セルトコロナルガ露国ニトリ屈辱トナルコトナク將又日本ノ名譽並ニ權威

為メ昨今ニ至リ「ヨッフエ」「ボゴージン」ノ転任説伝ハルニ至リ当地露文新聞中ニハ今回ノ「ヨッフエ」渡日ハ単ニ名譽アル休職ニ過ギズト称スルモノサハアルニ至リ候

近來莫斯科ハ極東露領ノ地方官憲ニ比シ遙ニ右党化シ居レル際「オザルニン」ノ莫斯科行ハ益々莫斯科政府ヲシテ穩和的ナラシメタルノ傾向アリ其ノ際「ウイレニスキー」「セレブリヤコフ」「クシナリヨフ」「レピョーヒン」等ノ浦潮行ヲ見浦潮地方ヲ占領シテ鼻息荒カリシ軍国者流ハ次第ニ其ノ勢力ヲ失墜シ去ルノ形勢ニアルモノノ如クニ有之候

「オザルニン」ノ日露交渉ニ対スル態度モ穩和ナリシニ付同人カ莫斯科外務省ニ在ルコトハ密ニ露国ノ対支關係ニ於テノミナラス対日關係ニ於テモ幾分好影響ヲ与フヘキモノト觀察セラレ候

右御參考迄報告申進候 敬具

二二四 二月一日 在ボーランド川上公使(帰朝中)ヨリ
内田外務大臣宛

日露国交正常化ニ関シモスクワニ於テ数次ニ
亙リカラハント会谈シタルニ付其ノ要領報告

ヲ毀損セズシテ之カ円満ナル解決ヲ遂クルニハ漁業問題並ニ滿州ニ関スル事項ハ暫ク措クモ最モ日本ノ輿論ヲ激昂セシメタル尼港問題ハ第一ニ之ヲ解決セザル可ラス元来一島ヨリ成ル樺太ヲ兩國ニテ領有スルコトハ將來爭議ノ因トナルノミナラズ歴史ニ徵スルモ同島ノ統治ハ日本カ露国ニ先テル史実モアルコト故此際「ソヴィエト」政府ニ於テ差支ナクンバ相当代価ヲ以テ樺太北半ヲ日本ニ売却スルヲ得バ之レ唯一最善ノ解決方法ナルヘシト私考ス而シテ若シ「ソヴィエト」政府ニ於テ売却タニ為サバ自然ニ港問題ハ勿論樺太島占領問題モ解決セラルルコトトナリ日本政府並ニ輿論モ多分之ヲ容認スル処ナルヘシト思料スル旨述ヘタルトコロ同氏ハ既ニ長春會議ノ際「ヨッフエ」氏ヨリモ述べタル通り樺太撤兵問題ハ尼港問題ト連繫ナキニ付別個ニ論スル意向ナリト語リタルニ付本官ハ直チニ尼港事件ノ処置方法ニ関スル先方ノ意向ヲ質シタル処日本側ハ尼港事件ニ対スル赤軍ノ殘虐行為ノミヲ非難スルモ日本軍モ亦西比利亞各所ニ於テ同様ノ殘虐行為ヲ逞フシタル事迹少カラズ露国側ニ於テ必要アラバ何時ニテモ具體的ニ事實ヲ指摘シ得ルニ依リ相互ノ殘虐行為ハ兩國共同調査委員ヲ設ケ事實ノ調

査後損害ヲ相殺賠償スルコト可ナルヘシ而シテ樺太北半売却ノ義ハ以前ヨリ竊ニ聞知シ居リ「ヨッフエ」モ日本人土ヨリ屢々意向ヲ探ラシタル由報告セル結果政府ニ於テ夙ニ熟議ヲ遂ケ其方針トシテ軍事ノ必要上之ガ売却ハ全然問題ニセザルコトニ決定セリ又史実上ハ如何ナル關係アリトスルモ露国ハ多年全島ヲ領有シ只日露戦争ノ結果既ニ其ノ一半ヲ割譲セルヲ以テ今更ニ残余ノ一半ヲ売却スルハ到底輿論ノ承認セザル処ナリ然レトモ露領ノ部分ニ於ケル利権譲渡ニ関シテハ日本ノ要求ニ応ズルモ大ナル異議ナカルベシト思考スト答ヘタリ依テ本官ハ樺太占領ノ意義ハ尼港事件ニ関連セルコト云フ迄モナク該占領ハ同事件解決ニ至ル迄ノ保障ニ過ギザルモノニ付単ニ利権ノ譲渡ニ応ズト云フガ如キ事柄ニテハ恐ラク日本政府ノ意ヲ満足セシメ難カルヘシト私考スル旨述ヘ次ニ本官ハ東清鉄道問題ニ関シ露国ガ果シテ總テノ利権ヲ支那ニ還付スル意向ナリヤト質問セル処最初ハ其意向ナリシモ支那側ガ其際露国ノ要求ニ対シ曖昧不徹底ニシテ確答ヲ与ヘザリシニ付現在ハ最早還付ノ意思ナキノミナラズ同鉄道ニ対シテハ従前莫大ノ勞費ヲ投ゼル關係上之ガ取返シニ努メ居ル旨語レルニ付本官ハ之ニ対

日露ガ會議ヲ開キ条約ヲ締結スル場合ハ露国ノ現在ヨリシテ曩ニ締結シタル英露条約ノ如キ予備ノ条約ハ到底締結シ難シト述ヘ露国ハ日本ト善隣關係ノ復興ヲ忌避スルモノニ非ズ從テ何時ニテモ日本ガ會議再会ヲ希望スルニ於テハ其ノ要求ニ応ジ得ル準備ヲ整ヘ置ケリト語レリ

統テ一月七日波蘭公使ハ本使ヲ主賓トシ外務次官「カラハン」氏及駐露外交官一同ヲ晚餐ニ招キ本官ヲ紹介セリ其際本使ハ「カラハン」氏ト内話中過日會談ノ内容ニ関シ其後色々考慮ヲ加ヘタルモ本官ガ日本ヘ齎スヘキ土産トシテハ余リニ輕少ナルヲ感ジタルニ付日本ガ喜ブベキ程度ノモノヲ案出シ置キ吳ルル様笑談のニ申込ミタル処同氏ハ非常ニ困難ナルモ更ニ考慮スルニ吝ナラザルベシ云々ト答ヘタリ又一月十一日本官ハ告別旁々最後ニ先方ノ意向ヲ確ムル目的ニテ「カラハン」氏ト其自邸ニ會見シタル処其際同氏ハ曩ニ本官カ申述べタル事項ニ付人民委員會議（大臣會議）ニ於テ協議シタル結果日本ノ土地狹隘人口過剰ニ基ク自然ノ膨脹ハ充分ニ之ヲ認ムルモ樺太売却ノ義ハ過日陳述シタル通如何トシテモ要求ニ応ジ難ク尤モ同島ニ於ケル石油石炭及森林ノ利権譲渡ニ関シテハ日本政府又ハ会社ニ対シ三

シ豐富ナル北滿貨物ハ東支南滿兩鐵道ガ全力ヲ傾注シ之ガ搬出ニ努ムルモ猶余裕アル程ナレドモ哈爾濱以南ノ日露鐵道ハ軌道ニ広狹アリ其不便不利云フベカラザルモノアリ將來兩鐵道ハ北滿開發ノ為彼我胸襟ヲ開キテ其輸送搬出ノ方法ニ関シ協議スルコト最モ必要ナリト思考ス加之既ニ帝政時代及「ケレンスキー」政府倒壊前ニ於テ長春ト第二松花江間ノ鐵道譲渡ハ日露ノ問題ト為リタルニ鑑ミ長春哈爾濱間ハ其鐵道管理ノ彼我何レニ属ストモ貨物輸送上軌道ノ統一ハ極メテ重要ナルベシト語レル処本問題ノ如キハ勿論總テ滿州並ニ漁業ニ関スル問題ハ第二解決事項ト思惟スルニ付後日如何様ニモ協議ヲ遂ケ得ルコト可能ナリト答弁セリ又漁業問題ニ関シテハ同氏ハ彼我兩國ニ現在何等國際的關係存セザルモ日本ニ対シ好意ヲ表シ近々新ニ「デクレット」ヲ発シ帝政時代同様ノ方法ニテ日本人ニ貸下グル意向ニテ本年漁期ニ間ニ合フ様目下取急ギ準備中ナル旨語リ尚在浦潮日本總領事モ國際關係ナキニ付此際他ノ領事ト共ニ撤退ヲ要求スヘキ筈ナルモ同地ハ日本人モ多數殘留シ居リ且ツ日本政府ハ早晚露国ト善隣關係ヲ復興スル意向ナルヘシト推察シ暫ク駐在ヲ認メ居ル次第ナリト付言シ更ニ今後

四十年ノ長期契約ニ由リ有利ニ租借ヲ許スコト差支ナシト述ベタリ尚同氏ハ本官ノ質問ニ対シ沿海、黑竜、後貝加爾州ノ利権ニ対シテモ礦山森林等ノ「コンセッション」ヲ或ル条件ノ下ニ譲渡シ得ルコト多分差支ナカルヘク其例証トシテ「エストン」露國間條約ニ於テ「エストニヤ」カ森林少キ為メ同國ニ対シ其隣接地方ニ於ケル一定ノ地域ヲ画シ森林伐採權ヲ許シタルコトヲ語レリ

尚漁業及滿州問題ニ関シテハ前述ノ如キ意味ノ言ヲ繰返シ漁業ノ如キハ従前ヨリモ寧ロ有利ニ漁区ヲ貸下ゲ得ルコト必ズシモ困難ナラザルベシ云々ト述ヘタリ

右ニ対シ本官ハ如上ノ利権譲渡漁業問題並ニ滿州問題ニ関スル將來ノ言質ノミニテハ日本政府ハ恐ラク満足セザルヘシ且露国ヲ正式ニ承認スルコトハ極メテ難問題タルコトヲ注意シ置ケリ

最後ニ同氏ハ純然タル私見ナリトテ尼港及樺太ノ問題ハ未決ノ儘暫ク差措キ單ニ國際關係ヲ復興セシムヘキ外交文書ヲ交換シ之ニ依リ東京莫斯科ニ相互ニ使節ヲ派遣シ適當ナル調査及觀察ヲ遂ゲタル上前記事事件並ニ其他ノ懸案ヲ徐ロニ解決スルモ一法ニシテ曾テ羅馬尼ニ對シ同様ノ提議ヲ

為シタルモ同国ハ露国カ横領セリト称スル金ノ返還ヲ条件トセル為不幸ニシテ其效果ヲ収メザリシモ日本ニ対シテハ何等斯カル障害トナルヘキ条件ナキ故此義ハ日本政府ニ於テモ異議ナカルベキカト語レリ本官ハ既ニ母国ヲ去リテ以来二ヶ年日本ノ事情ヲ知悉セズ此際前記諸問題ニ関シ此上何等ノ私見ヲ述べ難シ然レドモ日本側ニ於テ或ハ露国トノ交渉問題ニ関シ他ニ解決ノ方法ヲ案出シ居ルヤモ計リ難キニ付若シ万一我方ヨリ何等提議スル場合ハ如何ニシテ非公式ニ通信シ得ベキヤト問ヒタル処同氏ハ何時ナリトモ在北京露国公使又ハ代理公使ニ通知セラレタシト答ヘ尚今後条約ヲ締結ス場合ニハ露国ノ現状トシテハ本条約ニ非ズンバ締結シ難シト再ヒ陳述セリ

要之前述談話ノ要領ハ一月二十四日満州里発拙電ノ通ニシテ若シ日本ニ於テ会議再会ヲ希望スル場合ニハ露国ハ何時ニテモ直ニ之ニ応ズベキ意向ヲ有セリ

二二五 二月二日 赤池警視總監ヨリ
松平外務省欧米局長宛

ヨッフエノ手荷物検査ニ関スル藤田勇ノ談話

報告ノ件

リ於茲「ヨッフエ」ハ後藤子爵ハ政府ト馴合ヒノ上後藤子ノ代理タル森ガ「ヨッフエ」一行ヲ無意味ニ市内ヲ巡覽セシメ其ノ虚ニ乗ジスカル非常識ナルコトヲ実行セシメタルモノニシテ国際信誼ニ戻リ実ニ言語道断ナリト憤怒シ即時帰国スヘシト敦囑居レリ而シテ右事実ニ対シ後藤子爵ハ秘書森孝三ノ失態ヨリ生シタルヲ以テ非常ニ困惑シ憤慨シ居レリ

初メ総理大臣及内務大臣ハ後藤子爵ニ対シ「ヨッフエ」来朝ヲ承認シナカラ後ニ至リ之ヲ否認シ一方警察官憲ヲ以テ「ヨッフエ」ノ身辺危険ナリトカ尼港事件ノ遺族カ「ヨッフエ」ヲ恨ミ危害ヲ加フルナド威嚇スルハ真ニ不都合ナリ尚ホ赤化防止団長米山弁護士ガ後藤子爵ヲ訪問シ其他国粹会及民労会ノ「ヨッフエ」ニ対スル行動ニハ其背後ニ何物カ潜メルニ相違ナシ暗ニ政府ガ使喚シ居ル如キ口吻ヲ洩セリ之ハ後藤子爵モ余(藤田)モ確信シ居ル処ニシテ予ハ近ク一切ノ経過ヲ叙シタル陳述書ヲ公開シ輿論ニ訴ヘ是非曲直ヲ決スル積リナリ云々

二二六 二月四日 後藤新平ヨリ
加藤内閣総理大臣宛

大正十二年二月二日

勞農代表ヨッフエ手荷物検査ニ関スル件

昨日入京シタル勞農代表「ヨッフエ」ガ横浜港上陸ニ際シ横浜税関ニ於テ同人ノ手荷物ヲ検査シタリトテ東京毎日新聞社長藤田勇ハ憤慨シテ左ノ如ク語レリ

一、「ヨッフエ」渡来ニ関シ上海領事館ニ於テハ初メ之ヲ許可シナガラ二回目ニ反對シ三回目ニハ尼港ニ於テ慘殺セラレタル遺族ハ「ヨッフエ」ヲ極端ニ恨ミ居レルヲ以テ危害ヲ加ヘラルル恐れアリトノ本国政府ノ電報ヲ示シ極力反對シタリ然ルニ「ヨッフエ」ハ死ヲ賭シテ渡日スルコトトナルヤ領事館ニ於テハ態度ヲ一變シ外交官ニ準ズル保障ヲ為シ且ツ手荷物等ノ検査ヲ為サザル覺書迄交付シ長崎神戸ノ兩警察署長ハ懇篤ニ待遇セラレタルニ拘ラズ独リ横浜ニ於テ最モ乱暴ナル検査ヲ為シタルハ実ニ不都合ナリ殊ニ検査ハ後藤子ノ代理タル森孝三ノ案内ニテ横浜市内巡覽中ノ不在ニ乗ジ所屬不明官吏四名ハ從僕王松亭ノ拒絶スルニ不拘「ヨッフエ」所持ノ手荷物ヲ検査シ私信ヲ開披シ原状ヲ留メサル迄ニ乱暴ノ限リヲ尽セ

日ソ交渉進展ノ為メヨッフエニ暗号使用及ビ

特使通信許可方懸憑ノ件

拝啓

益々御清康奉賀候目下議會中ニテ格別御多端ノ折ナレハ可成貴意ヲ煩シ候事ヲ避ケ度精神ニテ各官憲ト交渉シテ当初ノ目的ヲ相達シ度努力致候得共内務警察ノ行動ヨリ問題ヲ生シ首相ノ御主旨ニ反スル障礙ヲ見ルニ到リ一応其初ニ歸リ御賢断ヲ請ヒ度左ニ開陳ヲ試ミ候

当初首相閣下ト小生ト意見投合シテ今回ノ挙ニ着手セシ際第一ハ絶対ニ小生限りニ彼等ト所見ノ交換ニ止ムヘキカ第二ニ其経過ニ於テハ外務側ニ通牒スヘキモノアラバ之ヲ当局ニ報ズベキカ第三ニハ其際モ聞流シニスルカ外務当局者ト非公式接觸ニ迄進ムベキカ

右三問題ヲ閣下ニ提出ノ時閣下ハ松平局長ニ会談セシムルモ可ナリトノ開示ヲ得タリ此開示ニハ非公式交渉ニ進行スル迄ノ御決意ト確信シタリ乃チヨッフエノ個人ノ意見ニ止メズ彼ノ政府トノ暗号通信ノ欠クベカラザルハ言ヲ待タザル事ハ御同感ニ可有之ト存候然ルニ一月二十四日ニ到リ浅井秘書官ヲ以テ御内示有之彼ノ来遊ヲ拒絶セラレ度意味ヲ

五 日露国交回復交渉関係 二二七

以テ宣伝ヲ恐ルルヨリ来遊断念ノ手段トシテ「ガランチー」ニ制限ヲ加ヘントセラレタル訓電ヲ発セラレタリトノ事並ニ若シソレニテモ来遊ノ際ハ寛大ニ取扱フベシトノ御内意拝承敬諾致候

然ルニ上海ニ於ケル日本領事館ノ手違等ヨリ上陸後横浜ノ出来事等国家ノ体面上不本意ノ件ハ暫ク別問題トシテモ将来帝國ト露國トノ交渉ニ及ボス影響不少二十三ヶ国ノ条約ヲ締結セシ彼ヲシテ帝國ニ好感ヲ有セシメ候上此際帝國ト露國ノ情誼ニ資センガ為ニハ暗号並ニ特使検閲ノ許可ヲ与ヘラルル方得策ト奉存候暗号並特使通信ノ許可ハ必ズシモ宣伝ヲ増大セシメ我民衆ノ昂奮煽動ヲ来スコトニ關係スルモノニアラザルハ知者ヲ俟タズシテ知ルヘキ処ナルヲ以テ御賢慮ノ上俗論ヲ排シテ許可ヲ断行セラレンコトヲ進言致シ候是将来帝國外交ノ影響少カラザルガ為ニ御座候右マテ草々不尽

大正十二年二月四日

新平

加藤首相閣下

下執事

日露会商再開説ヲ伝フルト共ニ益々露國側ノ為メ有利ナル宣伝ヲ行ヒ漸次露國側ノ要求ヲ強大ナラシムルノ必要ヲ説キ居レリ即チ日本新聞紙議會ニ於ケル議員ノ言、商工界ノ運動等ガ盛ナルニ至レバ至ル程益々露國側ニ於テ鼻息荒クナリツツアルノ傾向ニ有ルハ特ニ注意ニ値ス
当地右党人士ハ久シク「ヨッフエ」ノ日本行ヲ信ゼザリシガ愈々之カ実現ヲ聞クト共ニ稍失望ノ態ニテ右党側露紙ハ「ルスキー・ゴロース」ヲ始メトシ佻令「ヨッフエ」ノ渡日実現スルモ勞農政府ヲ相手トスル日露会商ハ到底容易ニ行ハレザルベシトノ宣伝ヲ行フニ努メ頻リニ反對宣伝ヲ為シ居レリ其ノ手段ニ至リテハ随分憐ムベキモノアリ大ニ諒トスヘキ点モアリサレド当地ノ如キ左右兩党自由ニ活動シ得ル土地柄トシテハ不得已所ナリ

主ナル露國実業家ハ何レモ日露會議ノ再開ヲ切望シ元来哈爾賓ハ西伯利奧地市場ヲ相手トスル物資ノ集散地点ナレバ西伯利ヲ開カザル限り商況ノ回復ヲ見ルコト能ハズ其ノ意味ニ於テ通商協定ノ成立ヲ渴望シテ止マズトハ彼等ノ島田副領事ニ対スル内話ナリ

翻テ本邦人ハ昨今ノ不景氣ニ堪ヘ兼ネ通商協定サヘ成立セ

五 日露国交回復交渉関係 二二八

二二七 二月七日 在ハルビン山内総領事ヨリ
ヨッフエノ渡日ニ対スルハルビン地方ノ反響
報告ノ件

公第一三六号

(二月十九日接受)

大正十二年二月七日

在哈爾賓

総領事 山内 四郎(印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

「ヨッフエ」ノ日本渡航ニ対スル反響ニ関シ報告

ノ件

「ヨッフエ」ノ渡日実現ノ報当地ニ伝ハルヤ各露字新聞紙ハ一斉ニ右果シテ事実ナルヤ否ヤ当館島田副領事方ニ問合セ来リ続イテ或ハ社説ニ或ハ記事ニ日露会商ノ再開近キ由ヲ報道シ同時ニ左党側新聞即「ツリビユーナ」「ノーウォースチ・ジーズニ」等ハ横浜「アントーノフ」發電「ロスタ」ヲ以テ埋メラレ頓ニ活氣ヲ呈シ来レリ殊ニ「ヨッフエ」ノ日本行ト川上公使ノ帰朝トヲ連鎖セシメテ何等カ意味アルモノノ如ク報道シ居レリサレド大体ニ於テ右兩紙ノ論調ハ

バ何等カ又新展開ヲ見ルナラント期待シ是亦何レモ協定ノ成立ヲ熱望シ居レリ随テ「ヨッフエ」ノ本邦渡航ニ対シテハ多大ノ期待ヲ為シ居レルハ事実ナリ尤モ一部ニハ實際知多辺ニテ実業ニ従事シタル経験ニ顧ミ将来佻令通商協定成立スルトモ到底露國內地ニ於テ本邦人カ商業ニ従事スルハ多大ノ困難アリト語り居ル者モアリ
右御參考迄ニ報告申進候 敬具

二二八 二月八日 在ハルビン山内総領事ヨリ
内田外務大臣宛

日露交渉再開問題ニ関スル勞農側機關紙主筆
ノ觀測報告ノ件

機密第六八号

(二月十九日接受)

大正十二年二月八日

在哈爾賓

總領事 山内 四郎(印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

「ツリビユーナ」主筆「ドンブロフスキー」ノ談

話ニ関シ報告ノ件

当地發刊勞農側機關紙「ツリビユーナ」主筆「イワン・イ

ワーノウイチ・ドムプロフスキー」同紙記者「クリツキ」ト共ニ一月七日島田副領事ヲ来訪シタル際日露交渉ニ関シ最近日本新聞論調ハ著シク高熱シ居レル処右ニ対シ日本政府ノ態度如何ト質問セルニ付島田ハ貴衆両議院會議議事録ヲ提示シ右ニ示シアル加藤首相並内田外相ノ言明ノ外何等語ルコトヲ得ザルヲ遺憾トスト答ヘ何等「コミット」スルコトヲ避ケ居タルニ「ドムプロフスキー」主筆ハ実ハ自分一己トシテハ日露交渉ノ将来ニ関シ左ノ通觀察シ居レリト内話致候

労働露国ハ「ゼノア」海牙両會議ニ於テハ相当ノ効果ヲ收メ得タルガ「ローザンヌ」會議ニ於テハ予期ノ如キ結果ヲ得ルコト能ハズシテ了レリサレド労働政府ハ其ノ基礎次第ニ確立シ来リタルニ顧ミ将来日露交渉開始ノ場合ニ於テハ先以テ承認問題ヲ先決問題トスベキハ明白ノコトタリ承認ナクンバ到底完全ナル国交關係ヲ樹立シ得ベカラズ承認間ノ協約ニ基クニ非ズンバ決シテ商工業ニ対スル完全ナル保護保障有リ得ベカラズ故ニ日本ノ商工業界ハ必ズ保障ヲ得ンガ為メ日本側ガ露国現政府ヲ承認スヘキコトヲ要求スルナルベシ之ニ反シテ日本ニ於ケル軍閥ハ飽迄労働露国

松村總領事出発前「ベリスキー」訪問ノ際極ク懇談のニ日露ノ關係ヲ談シ先方最近ノ我ニ対スル行動ガ往々國際ノ通義ヲ無視シ且排圧的傾向アル為メ強ク日本人ノ感情ヲ損シ居ルハ思フニ感情ト名譽心ニ強キ日本国民ノ特性ヲ解セザルニ依ルナランカ之ハ彼我ノ親交上甚ダ好マシカラザルノミナラズ却テ彼等ノ意圖ト反対ノ結果ヲ招来スベキニ依リ此ノ点当局者ハ十分留意アリ然ル可シト談示シタル処「ベ」ハ貴論之ヲ諒トス実ハ自分モ曩ノ軍艦用品課税問題等ニ関シテ当地当局トシテ極力中央ニ対シ対日感情上面白カラザル旨電報シタルモ中央カ傾聴セザルハ遺憾トスルモ一方中央ニ於テハ最近対日態度ガ良好ニ向ヒツアルヤヲ思ハシムルモノハ本日中央ヨリ貴總領事館待遇ニ関シ爾今英米領事館同様非公式ナガラ職務執行ヲ承認スヘキ旨ノ電訓ニ接セリ本件ハ何レ不日公表ノ筈ナルモ右ニ依レハ地方的行違アルニ拘ラズ大局上外交惡化トモ思ハレズ云々ト弁シ居タリ右ハ最近頻ニ当地方ニ謳ハレアル「ヨッフエ」ノ来訪ト日露会商促進ニ利用セントノ策略ナランカト察セララルモ満更「ベ」ノ虚構説トモ思ハレザルニ依リ不取敢

政府ノ承認ニハ反対スベク而シテ現今ノ日本ヲ以テシテ勢ヒ軍閥ノ勢力下ニアルベキニヨリ結局日本政府トシテハ承認ノ手段ニ出ヅルコト万々無之カルベシ果シテ然ラバ将来仮ニ東京又ハ浦潮ニ於テ日露交渉開始セララルトモ「ローザンヌ」乃至長春ノ先例ト均シク何等期待スル結果ヲ得ルコトナク長日月交渉ノ結果物別レトナルヤ必セリ予ハ信ズ日露間ニハ将来尚二回以上ノ會議アリ得ベシト加之若シ東京ニ於テ談判開始セラレンカ労働側ノ為ニハ頗ル有利ナル結果ヲ齎スベシ蓋シ労働側ハ東京ニ於テ自国ニ有利ナル擁護の宣伝ヲ廣ク行ヒ得ベケレバナリ云々

右「ドムプロフスキー」ハ言語弁明頗ルキビキビシタル人物ナルガ日本ノ政党政派ニ関シテモ詳細ナル研究ヲ為シ居レル模様有之候

右御参考迄報告申進候 敬具

二二九 二月九日 在浦潮渡辺總領事代理ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

在浦潮總領事館ノ職務執行非公式承認ニ関スル情報報告ノ件

第六五号 (二月九日接受)

二二〇 二月十六日 後藤新平ヨリ
内田外務大臣宛

現下ノ日露關係ニ関シ意見具申ノ件

拝啓愈々御多祥之段慶賀至極ニ存候
陳者現下ノ日露關係ニ就キテ默視スルニ忍ビザルモノ有之且事ハ極メテ重大問題ニ有之是非共拝眉ノ上意見ノ交換ヲナシ度キ所存ニ候処数日来風邪ニ冒サレ発熱臥床中ニ有之候間不文ヲ顧ミズ別紙ノ通り小生微意ノ存スル所ヲ縷述シ貴覽ニ供シ候条何分ノ御回答ニ接シ度ク此段得貴意候 敬具

大正十二年二月十六日

子爵 後藤 新平

外務大臣

伯爵 内田 康哉殿

侍史

(別紙)

二月十六日後藤新平ヨリ内田外務大臣宛電書

日露国交正常化ヲ要望ノ件

覚書

日露ノ關係ハ世人ノ今日想像セルヨリモヨリ以上重大ナル關係ニアリト雖モ世人ニ其ノ理解ナキガ為メニ如何ニ行詰

リヲ生ゼルカヲモ顧慮セザルガ如ク単ニ現状ノ推移ニ委シテ足レリト做スカノ觀ナキ能ハズ斯ク世人ガ現下ノ難関ニ逢着セルヲ感知セザルハ要スルニ兩國間ニ於ケル關係ノ真相ヲ捕捉シ得ザルガ為メノ其利害關係ヲ量知シ得サルカ為メノミ決シテ外交当局ヲ信任スルガ為ニ非ズ彼ノ長春會議ニ於ケル結果ハ世論ハ勿論之ヲ我が失敗ニ歸シタリト做セドモ外務当局ニ於テハ之ヲ失敗ナリト信ゼザルガ如シ若シ其ノ失敗ヲ自認シテ而モ表面失敗ナラズト強弁スルモノトスレバ国家民人ニ對シテ不忠不信ノ責ヲ免カレザルベキナリ

現下国内ノ政情ヲ見ルニ今ヤ枢密院關係ノ問題アリ世論喧囂ヲ極ム然リト雖モ是要スルニ国政ノ根本ニ触ルル筋道ノ爭議ニシテ素ヨリ重大問題タルニ相違無キモ其ノ如何ニ推移ストモ吾人ノ實際生活ニ直接ニ行詰リヲ生ズル程ノ当面ノ難問題ニハアラズ只今日ニ於テ其ノ準拠スベキ本源ヲ正シ置カズンバ後來不測ノ禍根ヲ生ズベキヲ以テ此点ヨリ見テ一日モ等閑ニ付スベカラズト言フニ在リ

然ルニ日露關係ニ至ッテハ我が国民ノ實際生活上速カニ局面転回ヲ要スベキ緊急ノ諸問題横ハリ今ニシテ何等カノ方

収ヲ要セザルナリ

然ルニ日露ノ外交關係ハ隣邦支那ヨリモ後レヲ取り露支ノ關係ハ其接近寧ロ遙カニ我ノ上ニ出ツ例ヘバ東清鐵道ノ如キ露支間ニ如何ニ進捗シ彼我ノ間ニ如何ノ状ヲカ呈セル俗ニ言フ証文ノ出シ遅レノ觀ナキニ非ザレドモ我外務省ハ平然タリ

当局者ハ半ニ議會ノ問題トサヘナラズンバ以テ安ンジテ可ナリトスルヤ若然ラストセバ果シテ何等カノ手段ヲ尽シタルコトアリヤ

如此日露交渉ハ退嬰ニ退嬰ヲ重ネ如何ナル方法ヲ以テスルモ今ヤ進路ヲ開展シ能ハザルマデニ行詰マレリ凡ソ現下ノ日露關係程不利不安ノ秋アラザルベク結局戦端ヲ開ケバ以テ局面ノ打開ヲ見ルベシト云フ途サヘモ今ハ絶タルニ非ズヤカクテ因循姑息曠日弥久ノ情態ニアルガ而カモ之ヲ露國ニ就テ見ルニ彼ニ於テ彼我ノ間ニ障壁ヲ高クセルコトアリヤ又通商修交ヲ悉ク峻拒セリヤト云フニ列國トノ關係ニ徴シテ其ノ然ラザルヲ見ルベク殊ニ叙上ノ支那關係ヲ以テ推スモ容易ニ明瞭ナル解答ヲ得ベキナリ而ルニ我帝國独り自ラ彼ト交通ヲ絶チ自ラ不利ヲ招カントス是上陛下ノ慮ニ非

策ニ出テズンバ遂ニ收拾スベカラザルノ難関ニ遭遇スベシ吾人ノ觀ヲ以テ行詰レリトナスモノ枚挙ニ遑ナシト雖モ茲ニ一例ヲ挙グレバ漁業問題はナリ

日露關係ノ事業トシテ重要ナル位置ヲ占ムルモノハ漁業ニシテ一ヶ年三千万円乃至四千万円ノ漁獲アリ之ニ從事スル者約一万六千人ヲ算ス而モ之ニ三千万金ノ問題ニ非ラズ我帝國国民ノ食糧問題ナリ而シテ是更ニ他ノ凡テノ經濟關係ノ鍵トナルベキモノニシテ而シテ或期間内ニ一定ノ行動ヲ取ラザルベカラザル事柄ニ屬ス我當局者ハ之ヲ冷眼視シテ顧ミザルノ觀アリト雖モ彼等從業者ニ取ッテハ重大ナル利害關係ヲ有スルモノナルハ固ヨリ言ヲ俟タザル所ニシテ到底外務當局ノ儉安苟且的説明ニ倚賴シテ晏如タルヲ許サザルナリ借問ス當局者ハ此間ノ真ノ消息ニ通曉セリヤ既ニ知悉セリトスレバ当然何等カノ措置ヲ講ズベキニ非ズヤ此一事既ニ然リ況ンヤ山林鉅山其他凡ユル日露關係ノ諸事業何レモ將來ノ發展上局面打開ノ急務ナル重大問題ニシテ又殆ンド行詰レルモノノミナリ而カモ日露ノ關係ハ之ヲ他邦ニ比シ最モ密接ナル状態ニ在リ決シテ各國人ノ後ニ追隨シテ提携ヲ図ルガ如キ關係ニアルヲ容認スベキニ非ザルヤ歟

ラズ下国民ノ希望ニ非ラザルナリ

予ハ此難関ヲ突破シテ此処ニ一大新天地ヲ開クノ方途ニ出デザルベカラザルニ想到セリ乃チ「ヨッフエ」氏ノ來遊ヲ請ヒタル所以ハ露支間接近以上ニ日本國民ヲ彼ニ了解セシメントシタル次第ナリ此挙ニ就イテ世間予ヲ批議スル者ナキニ非ズト雖モ之カ為メニ日露兩國ノ國際關係ニ何等ノ弊害ヲ生ズルノ虞アリトナスカ余ハ決シテ之有ラザルヲ確信スルモノナリ余一個人ニ對スル批難攻撃ニ至ッテハ苟モ國家ノ為ニ犠牲ヲ甘受スルモノ國家民衆ノ福祉ニ貢獻スルコトアラバ敢テ辭スル所ニ非ザルナリ初メ余ハ彼ガ病ヲ養フニ地ナキヲ聞キ彼ヲシテ静養ノ地ヲ得シメ我國家ノ洪大ナル度量ヲ示シ同時ニ療養中我が日本其者ヲ真ニ諒解スルニ至ラバ彼我ノ幸慶何者カ之ニ如カムト感ジ以テ此挙ニ出デタルナリ然ルニ彼若シ日本ノ現在ノ方針態度ヲ以テ直チニ我國民ノ夫レナリト信ズルコトアラバ是我國民ノ真相ヲ誤解セルモノト云フベク此誤解延ヒテ彼我兩國民間ノ不利ヲ招来スベキモ「ヨ」氏ニ於テハ是内外務當局ノ偏見ノミ日本國民ノ真意ニ非ザルヲ諒トスベキナリ

彼若シ病養滯留中真ニ我國トノ了解ヲ得タリトセンカ我國

人ハ露国領土内ニ安全ナル生活ノ天地ヲ得彼此相提携ノ下ニ兩國共同ノ文化的經濟的事業ヲ大成スルニ至ルベキハ期シテ俟ツベキナリ是伊藤公以来吾人ノ繼承スル所ノ世界ノ平和的文化事業實現ノ一タルヲ信ズ

試ミニ左ノ諸問題ニ就キテ我國ノ對露關係ニ何等ノ行詰リヲ来セルニ非ザル所以ヲ明快ニ答弁アランコトヲ望ム是等ニ對シテ明解決ヲ与ヘラルレバ独リ余輩ノ幸ノミニ留マラズ我國民全体ノ幸福トスル所ナリ

一、東清鐵道ノ件ハ露支兩國ニテ解決シ他ノ容喙ヲ許サザルコトナレルガ之ヲ承知シ居ラレルヤ又外務省ニ於テハ是當然ナリト思惟セラルルヤ若然ラズト思惟ストセバ其ノ対策ハ如何

一、露支兩國間ト日露兩國間トノ交際關係ニ於テ如何等差アリヤ之ヲ承知シ居ラレルヤ

一、大隈内閣當時露國ノ總勘定ノ債權ハ巨億ノ金額ニ上レリ之ハ如何ニ処置セラルベキ考ナリヤ

一、滿州鐵道關係ニ於テ東支鐵道付屬ノ河川其他ノ交通ニ就キ得タル權利ハ放擲セントスル考ナリヤ又ハ何等カノ処置ニ出デントスルヤ

シ得テ彼ニ代フルニ他人ヲ以テスルノ確信アリトナサバ猶可ナリトスルモ然ラズシテ輕率妄言スルハ慎ムベキコトニ非ズヤ然ルニ我外交官ニハ斯ル妄動ヲ意トセザルモノアルヲ以テ國際上常ニ不利ノ地ニ在ルヲ免カレザルニ非ザルカ現ニ浦港革命委員長タル「ビレスキー」ノ許ヨリ沿海漁業組合副長ト協議ノ結果ヲ「モスクワ」政府ニ申達シタルニ其權限ハ「ヨッフエ」氏ニアルガ故ニ「モスクワ」政府ハ之ヲ「ヨッフエ」氏ニ廻付シ来リ現在「ヨッフエ」氏ノ手ニアリトサヘ言ハレ居レリ此事實ニシテ謬リナリトスレバ幸ナレドモ其ノ謬リナリト云フ証拋果シテ外務省ノ手ニ有スルヤ否ヤ

一、又更ニ進ンデ問ヒ糺シ度キ一事ハ外務省ハ前記年額三千余万円ノ漁業ニ従事セル一万数千人ノ従業ト失業トノ岐ルル所ニシテ帝國將來ノ日露共同生存上重大ナル關係ニアル漁業ノ時期ガ目前ニ切迫セルヲ單ニ傍觀スルノ意ナリヤ但シハ默認ノ態度ニ出デ何等ノ免許無クシテ彼等ヲシテ来ルベキ期節ニ漁業ニ從フノ自由ニ任スノ意ナリヤ將又帝國政府ハ其出漁ヲ禁ゼントスルカ容易ニ何時ニテモ禁ジ得ラルルトナサヤ若シ之ガ為彼ノ警備艦隊ノ掃

一、外務省ニ於テハ「ヨッフエ」氏ハ猶太人ニシテ人格劣等ナルヲ以テ到底國際的談判ノ衝ニ当ルベキ人格ニ非ズトナシ現ニ外務次官ノ如キハ「チチュリン」若クハ「カラハン」ナラバ後藤子爵ノ来遊ヲ促カスニ足ルモ彼ガ如キ劣等ノ人物ニ對スルハ賛意ヲ示シ難シト公言セル旨或確カナル筋筋ヨリ伝聞セリ又伝フル所ニ由レバ松平局長モ到底「ヨッフエ」氏トハ談判シ難キニヨリ寧ロ他ノ露人ニ換フレバ可ナラント言ハレタリト聞ク

元來外務省ハ露國ノ政情ニ精通シ居リ又我外務省隨意ニ談判ノ衝ニ當ルベキ相手方ヲ變更セシムルダケノ力ヲ有セリト自信シ居ラルルヤ若シ然ラズシテ如此言ヲ發スルハ國家ノ為外交官トシテ不当ノ言ナリ國家ノ害ナリ陛下ニ忠ナルモノニ非ザルナリ露國ノ政情ニ通ゼル者ハ曰ク彼「ヨッフエ」ハ已ニ二十三個ノ勞農政府ノ契約ヲ締結セル人ニシテ東洋ノ全權委員タリ而シテ勞農政府中央全權者タリ然ルニ我國ニ來遊スルニ當リ特ニ何等敬意ヲ表ハサザルノミカ陰ニ隠レテハ外交官ノ誹謗ヲ逞シクス如上ノ輕率ナル言動ノ其害國家ニ及ボスモノアルベキヲ意トセザルヤ若シ露國政府ニ依頼シテ彼ト折衝スルヲ中止

蕩ヲ招クコトノ虞ナシト保障シ得ルカ或ハ如斯ハ實ニ関知スル所ニ非ズ是レ自業自得ナリト觀過スベキ積ナリヤ此衝突ニシテ免カレズトセバ更ニ困難ナル問題ヲ惹起シ日露ノ關係ハ紛糾シテ今日ヨリモ兩國間更ニ高キ障壁ヲ築クニ至ラザルヤ若シ斯ル狀態ニ陥ルモノニ非ズト倣サバ其ノ点ニ就キ明瞭ナル弁明ヲ冀望スルモノナリ

其他山林鉞山及通商貿易ニ関シテ緊急ノ問題渺カラザルガ外務省ノ所見ハ如何又以上ノ諸問題ニシテ毫モ行詰リヲ見ズ窮スル所ナシトシ或ハ對案アリトナサバ謹デ之ヲ聽カン

前項縷述スル所ハ「ヨッフエ」氏ノ來遊問題ヨリ此ノ問題ヲ生ミタルニハ非ズ予ハ日露關係ノ行詰リノ極ヲ察シ彼ニシテ來遊セバ何等カ局面打開ノ道ヲ講ズルノ便宜ヲ生ズルニアラザルカトノ予想ハ其ノ來遊ヲ促カセルノ動機ニシテ初ヨリ之ハ副産物タルヲ覺悟シタル上ノコトニ屬シ固ヨリ主眼ニアラザレハ果シテ其効果アリヤ否ヤハ深ク問フ所ニアラザリシナリ然ルニ彼一度我國土ヲ踏ムヤ只一局部ノ意見ヨリシテ警察官ノ取締峻嚴ヲ極メ毫モ我外交上ノ雅量ヲ示スニ至ラズ其間諸多ノ問題統出シテ

外務内務両省ノ態度殆ンド諒解ニ苦シムモノアリ例之ハ彼ニ對シテ暗号電信ヲ禁ゼシカ如キハ果シテ何等ノ効果アリトナスヤ「プロバカンダ」ニ暗号電信ノ必要アリト見做スガ如キ取締法ハ実ニ一笑ニ付スベキモノナリ余ハ外務当局ノ前日来ノ行動ハ其本意ニ非ザルガ如ク推測セシヲ以テ余ハ国家ノ為メニ発言スルヲ忍ビ今日迄其ノ成ス所ニ委シ来リタルガ最近ノ行詰リヲ見ルニ及ンデハ君國ノ為メニ是非共一言スルヲ禁ゼザルヲ得ザルニ至レリ

余ハ叙上ノ諸問題ニ就キテ隔意ナキ意見ノ交換ヲ冀望スルモノナリ(以上)

二二二 二月十六日 在米國佐分利臨時代理大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

日露交渉再開問題ニ關スル華府新聞記事報告
ノ件

第一〇二号 (二月十七日接受)

(前略)

三、十三日莫斯科發「タイムス」ノDuranty通信ハ日本軍ガ西伯利本土ニ在リタル頃ハ日本ノ地歩頗ル有利ニ見

エタルモ今ヤ形勢逆転シテ露ハ露領ヲ占領スル者トハ交渉シ難シトノ言訳ヲ固守シ居ルニ引換ヘ日本ガ商業上ノ必要ニ迫ラレ對露国交渉ヲ切望スルニ至レリ其ノ証拠トシテ「ヨッフエ」ノ一度渡日スルヤ日本ノ自由派ト軍閥トノ間ニ對露問題ニ就キ衝突起リタル而已ナラズ樺太拋棄論者ニシテ次ギノ首相タル可キ後藤子ハ「ヨッフエ」渡日ノ責任者ナルニ一方川上公使ノ樺太撤退尼港賠償及通商協定締結ノ申入レハ「ソヴィエト」ノ敵シク拒絶スル処トナリ同公使ノ入露ハ莫斯科ニ何等波紋ヲ生ゼザリシナリ

二二三 二月二十日 在中國小幡公使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

ヨッフエノ性格ニ關スル情報報告及ビ意見提
示ノ件

付記 三月十五日在本邦独國大使ノ松平欧米局長ニ對スル私談 ヨッフエ人物評ノ件

第一三九号 (二月二十日接受)

「ヨッフエ」ハ其性格偏狹苛酷ニシテ容易ニ人ト相容レズ部下ニ對シテモ人望薄キノミナラズ(往電第一六号参照)在支數ヶ月ニシテ何等纏リタル事功ヲ挙げズ為ニ莫斯科政

府ノ信用薄ラギ早晚極東代表者タルノ地位ヲ他ニ讓ラザル

ベカラズトノ風説ハ本使モ予テ聞及ベル処哈爾賓發閣下宛機密第三〇号ニ照ラスモ同人罷免ノ運命モ略々事實ナルガ如ク又最近吉田参事官ガGraveヨリ聞ク所ニ依レバ本國政府ハ同人ヲ罷免スベシトノ噂アル趣(委細郵報)ナルガ右ハ他ノ方面ヨリモ同様ノ報道アルニ付早晚事實トシテ顯ハルベシト推察セラル之ヲ要スルニ同人ノ性格ガ謠詐百出甚ダ信用ヲ置キ難キコトハ当方面ニ於テ同人ト接触スルモノノ通説ナルニ顧ミ本國政府ノ信用薄ラゲル今日「ヨッフエ」ヲ余リニ重要視シ日露通商開始等ノ問題ニ付彼ヲ利用セムトスルモ或ハ所期ノ効果ヲ挙げ得ザルベク政治上ノ諸案件ニ付彼ニ對シ何等「コミット」スルコトハ或ハ却テ將來開カルベキ日露會議ノ障碍トナルノ虞アルヤモ計ラレズト考ヘラル心付ノ儘前記ノ次第御参考迄(奉天中継二月二十日前一〇、五〇)

(付記)

三月十五日在本邦独國大使ノ松平欧米局長ニ對スル私談
ヨッフエ人物評ニ關スル件

三月十五日独逸大使「ゾルフ」氏カ松平欧米局長ニ對シテ
五 日露国交回復交渉關係 二二三

為シタル「ヨッフエ」ニ關スル私談要領

「ヨッフエ」ハ頗ル伶俐ナルヲ以テ既ニ日本ニ關スルコトハ充分研究セルモノト思考ス彼ハ甚タ危險ナル人物ナルヲ以テ充分注意スル必要アリ勞農政府ハ今日新經濟政策ヲ標榜シテ穩健ナル政策ニ傾キツツアルカ如シト雖モ之レ共產主義実行ノ結果露國ノ經濟組織破壊セラレ人心動揺シ叛乱勃發セントセシヲ以テ一時此ノ政策ニヨリ危急ヲ緩和セントシタルモノニシテ若シ右ノ目的ヲ達セバ更ニ本来ノ政策ヲ遂行セントスルモノト思ハル第三「インターナシヨナル」大会ノ席上ニ於ケル「トロツキー」一派ノ演説中ニハ有産(ブルジュア)階級ヲ倒スモノハ結局銃火ナリト叫ビ彼等ハ決シテ世界の革命達成ノ初志ヲ翻セルモノトハ信ゼラレズ尤モ露國ヲ今日ノ如キ狀態ニ置クコトハ世界ノ經濟狀態ヲ改善スル障害トナルヲ以テ之ヲ國際關係ノ内ニ立タシムルコトハ大局上必要ナルノミナラズ日本トシテモ此ノ際速ニ露國トノ關係ヲ良好ニシ一面「ヨッフエ」ノ行動ハ勿論勞農政府ノ態度ニ充分警戒スルコト必要ナルベシ自分ノ考ニテハ危險思想ノ防止ニハ警察力ヲ以テスルコトハ充分ノ効果ナキニ付國民ヲシテ其ノ危險ヲ自覺セシムル様方法ヲ

五 日露国交回復交渉関係 二二三

講ズルノ外ナシ自分カ客年帰国セルハ「ラッパロ」条約ニ反対ノ運動ヲ起サンガ為ニシテ帰国後外務省ニ於テ露国方面ヲ担任シ居ル「マルツァン」男等ト右ニ関シ充分意見ノ交換ヲナシ置キタリ

露国ハ独逸ト接近セントシテ種々提議シ来ルモ独逸ハ之ニ応ゼザル方針ヲトリ居レリ世上伝ヘラルル露独軍事同盟説ハ事実無根ナリ

尚松平局長ヨリ「クラシン」「カラハン」等ニ面識アリヤト尋ネタルニ対シ「ゾルフ」氏ハ「チチエリン」トハ会见シタルコトアルモ「クラシン」「カラハン」トハ面識ナシ然シ自分ノ承知スル限り「クラシン」ハ労働政府ノ人物中ノ穩健者ニシテ「ヨッフエ」トハ全然人格ヲ異ニス「チチエリン」トハ長時間會談シタルコトアルモ甚タ狡猾ナル所アル人物ナリトノ印象ヲ得タリト述ヘタリ

二二三 二月二十日

在ハルビン山内総領事ヨリ

内田外務大臣宛

ヨッフエニ依ル樺太利権ノ対日提供説ニ関スル露紙論調報告ノ件

公第一七八号

(三月一日接受)

二七〇

大正十二年二月二十日

在哈爾賓

総領事 山内 四郎(印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

「ヨッフエ」ノ日本、樺太富源租借説ニ関シ露紙

論調報告ノ件

二月十九日「カベール」新聞ハ「樺太問題ヲ以テスル駈引」トノ題下ニ「ヨッフエ」ノ行動ヲ論シテ曰ク「ヨ」ハ東京ニ於テ外交関係ヲ結び付クル試ミトシテ樺太問題ニ触レ東京政府ニ非公式申込ノ形ニ於テ東京政府カ誠実ニ労働「ロシヤ」ト經濟関係条約ヲ取極メントノ意アラバ「ロシア」政権ハ樺太富源ノ租借開拓ニ付日本ニ絶対優先権ヲ与フルコトトシテ差支エナシト述ヘタリ之ノ提議ハ後藤子ニモ伝ヘラレ又秘密裡ニナサレタルモノナルガ噂ハ忽チ商工界ニモ波及センタメ後藤子ハ政治的生涯ニ自己ノ与党トナス有力資本家ヲ自邸ニ召集シ「ヨッフエ」ノ提議ニ関シ懇談会ヲ開キタルガ結局「ヨッフエ」ヨリ其ノ言明ヲ確認スルニ足ル文書ハ取り置ク必要アリト帰着シタリ

「ソヴィエト」政府ガ樺太富源開拓ニ付日本資本家ニ特殊

権ヲ与ヘントスル用意アルコトハ日露協商ノ鞏固ナル基礎タルベシト觀測シツツアルノミナラズ「ソヴィエト」政府ヲ承認スベシトノ動機迄ヲ造リ出シタリ

但シ為政家ハ樺太撤兵ニ先チ「ソヴィエト」政府ハ進ンデ日本ニ公式ニ有利ナル提議ヲナシ得ベシトハ信ジ居ラズ「ヨッフエ」ノ私的提議ノ如キ目下ノ処オビキ手段ト目サレツツアリ云々

右御参考迄及報告候 敬具

二三四 二月二十二日

井出海軍次官ヨリ

田中外務次官宛

日露国交正常化ヲ望ム海軍省側意見提出ノ件

付屬書

国防上對露方針速決ノ喫緊ニ関スル海軍省意見

官房機密第二一三三号

(二月二十二日接受)

大正十二年二月二十二日

海軍次官 井出 謙治(印)

外務次官 田中 都吉殿

国防上對露方針速決ヲ喫緊トスル件

對露方針策定ニ関シテハ充分ニ御考慮中ノコトト確信致シ居リ候処右速決ニ関スル海軍省ノ意見別冊ノ通ニ有之候条

五 日露国交回復交渉関係 二三四

御承知ノ上時機ヲ失セズ必要ナル措置ヲ講ゼラルル様致シ度

右申進ス

(付屬書)

国防上對露方針速決ノ喫緊ニ関スル海軍省意見

日露関係ノ親善ハ我國ノ經濟上並国防上喫緊トスル所ナルヲ以テ之ヲ我外交方針ノ一タラシメンコトハ朝野識者ノ齊シク翹望スル所ナリ然ルニ「シベリヤ」撤兵ノ遅延ハ徒ニ露国民ヲシテ帝國ニ對シ反感ヲ抱懷セシメタルノミナラス今尚保障占領ノ目的ヲ以テスル北樺太駐兵ノ繼續ハ愈々對日感情ヲ惡化セシメツツアルハ誠ニ以テ國家ノ遺憾事ニシテ速ニ之ヲ改善セサルヘカラス惟フニ今日ハ我ニ於テ國家百年ノ長計ノ為ニ露國ニ接近ヲ試ムヘキ秋ニシテ此目的ヲ達スルカ為ニハ我ハ露國ニ對シ大ナル襟度ヲ持シ大局ノ為ニ小我ヲ捨ツルノ覚悟ナカルヘカラス唯此心ヲ以テ臨ムモ尚事ノ成敗逆睹スルヲ得スト雖モ今日之ヲ試ムルハ後日ニ於テスルヨリモ一層成算多カルヘシ

抑露國側ノ主張ハ極メテ明白ニシテ彼ハ第三次日露會議開催ノ為ニ三個ノ要求ヲナシツツアリ乃チ(一)先ツ以テ期日ヲ

二七一

確定シ樺太ヨリ撤兵スルコト(二)労働政府ヲ承認シタル上政治的並通商の協約ヲ結フコト(三)會議ニ於テハ日露兩國ハ全然對等ノ位置ニ立チ断シテ日本カ露國ヲ劣等国扱セサルコト之ナリ而シテ右ハ「ヨッフエ」氏カ最近東京ニ於テ外字新聞記者ニ對シテ為セル言明(二月六日東京「アドヴァタイザー」参照)ヲ待ツ迄モナク長春會議ノ經過ヲ知ル者ノ夙ニ知了セル処ニシテ露國內情ノ改善スルニ伴ヒ此主張ノ必スヤ益々強固トナルニ至ルヘキハ想像ニ難カラス

從來ノ片々の情報ニ依リ按スルニ北樺太ノ買収ハ多ク見込ナキカ如キモ(露國ハ北樺太ノ売却ヲ欲セサルカ如ク曾テ「チチュリン」カ語リタリトノ情報アリタリ又労働政府ハ外政上漸次帝國主義的色彩ヲ帶ヒツツアルハ其ノ東支鐵道ニ對スル態度但シハ「ロザン」會議ニ於テ海峽閉鎖ヲ主張セルニ徴シテモ察スヘキナリ)其利權ニ至ッテハ必スシモ然ラサル如シ(從來北樺太ノ採油利權ハ之ヲ日本ニ讓与シテ差支ナシトノ情報屢々アリタリ但シ今日ニ於テハ外國ニ對シ余リニ利權ヲ割讓セサランコトヲ望ミツツアルノ報アルハ注意ニ値ス)若シ此ノ推察ニシテ略ホ誤ナシトセハ日本政府カ保障占領ノ解決トシテ採択シ得ヘキ途ハ要スルニ

モ望ミツツアルハ疑ナキ事實ナルヲ以テ帝國政府ニ於テ通商條約ニヨリ労働政府ヲ事實上ノ政府ト認ムルニ於テハ茲ニ解決ノ途自ラ存スヘシト認ム

日露提携親善ノ為ニハ帝國政府トシテハ労働承認ノ止ムヲ得サル場合ヲ覺悟セサルヘカラス「カンヌ」決議ニ加ハリアル關係上日本ハ容易ニ单独ニテ法律上ノ労働政府承認ヲ行ヒ難キモノアルヘシト雖モ翻テ考フルニ「カンヌ」決議ノ如キモノヲ以テ労働政府承認ノ條件トナスニ於テハ仏國ノ如キハ到底近キ將來之カ承認ヲ行フノ機會ナカルヘキヲ以テ労働政府承認問題ニ關スル限り帝國カ仏國等トドモ迄モ道連ヲナスカ如キハ決シテ賢明ノ策ニアラス況ンヤ露國特ニ西比利亞方面ノ情勢ハ「カンヌ」決議當時ト著シク事態ヲ異ニセルノミナラス米國ノ現政府ハ労働承認ニ絶對反對ナルカ如キモ英國ノ態度ニ至リテハ仏米ト大ニ趣ヲ異ニスルノ概アルニ於テオヤ

北樺太問題ハ「シンクレヤ」等ノ如キ第三者ノ混入ニ依リ事態愈紛糾シ之カ解決愈々困難ヲ加ヘントスルノ情勢ニシテ之レ恰モ山東問題ノ経路ヲ辿ルモノト云フヘク最モ戒心ヲ要ス夫レ山東問題ニシテ日支間ノ問題タルニ止マラハ未

樺太撤兵ノ交換トシテ北樺太ノ利權ヲ獲得シ且露領沿岸ノ漁業權及林業權ヲ確固ニスル程度ノモノニ過キサルヘシト認ム然モ此目的ヲ達スルニ當リ露國側カ常ニ日本カ或ル紛議解決ノ為ニ担保トシテ露國ノ領土ヲ占領シタルハ甚シク露國ヲ侮辱シタルモノナリト稱シツツアルニ鑑ミ彼ノ面目ヲ重ンスルノ態度ニ出テ縱令事実上ハ樺太撤兵ヲ決スルト同時ニ利權解決ヲナサントスルニ在リト雖モ敢テ後者ヲ撤兵ノ條件トナスナク全然別個ノ問題トシテ労働政府ヲシテ北樺太全体ノ採油採炭權並ニ極東沿海ニ於ケル漁業權及林業權ヲ認メシムルノ手段ヲ採リ以テ撤兵ト利權ノ同時解決ヲ図リ尚又最近喧伝セラルル「シンクレヤ」契約ニ至リテハ之ヲ労働政府ト同会社間ノ問題タルニ止マラシメ労働政府限リニテ之ヲ消滅セシムルヲ要ス此等ノ商議ニ當リテハ必然承認問題ヲ生スヘク此点ニ關シ労働政府ハ姑息ナル妥協ヲ排シ「ラッパロ」條約ヲ以テ先例ト為サント為シツツアルカ如シト雖モ一面彼ハ日本カ「カンヌ」決議ニ加ハレアル關係上日本カ列國トノ協調ヲ破リ单独承認ヲ行ヒ難キヲ熟知シ而モ彼ハ独逸ト提携シ次テ日本トノ提携ヲ望ミ如是シテ自國ノ立場ヲ強固ナラシメントシ日本トノ通商開始ヲ

解決ノ儘ニ曠日弥久スルモ何等懸念スルニ足ラサリシト雖モ米國其他諸國トノ利害關係トナルニ至リ頗ル難題トナルヲ免レサリキ北樺太問題モ日露間ノ問題タルニ止マラハ正當政府出現迄之カ占領ヲ繼續スルモ敢テ大問題ニアラサルヘシト雖モ米國及英國ノ利害問題トナルニ至テハ頗ル厄介ニシテ「ジャパンアドヴァタイザー」紙ノ如キハ之ヲ山東問題ト同一視シ機會アル毎ニ撤兵ヲ慫慂シツツアリ米國ノ輿論モ亦同様ノ方面ニ動キツツアリ華府會議ノ時ニ「ヒュース」氏ハ日本カ樺太ノ占領ニヨリ發生スル權利及要求ハ現在及將來ニ亘リ之ヲ正當ト認ムル能ハス又之カ為現存スル所ノ條約上ノ諸權利及露國ノ政治的又ハ領土の保全ヲ毀損スルカ如キ日本ノ行動ヲ容認シ難シト声明シアリ随テ米國政府ヨリ見レハ「シンクレヤ」ノ得タル權利ハ政府特ニ之ヲ支持セストスルモ当然ノ事ニ属スヘク日本政府カ主張スル所ノ保障占領中ハ露國カ其主權ヲ行使スルヲ許サストノ見解トハ相容レサルモノナリ仮ニ保障占領中「シンクレヤ」契約ノ履行ヲ防キ得ヘシト雖モ占領停止ト共ニ之ヲ防キ得ヘカラサルハ勿論ナリ況ンヤ露國ハ今ヤ米國ノ如キ第三國ノ力ヲ藉リテ日本ノ保障占領ヲ無意味ナラシメ又對日

問題ヲ有利ニ解決セント試ミツツアルニ於テオヤ然モ之レ露国トシテ当然ノコトニ属ス

帝国ニ在リテハ北樺太ノ採油権ヲ獲得スルコトハ我国防上極メテ必要ナリ翻テ米国ノ挙措ヲ考フルニ米政府カ我国ノ産出物ニ付テ統計の調査ヲナスコト已ニ多年米海軍カ日本ニ対スル平時戦略トシテ北樺太油田ノ日本海軍ノ手ニ入ルヲ妨碍スルコトハ当然アリ得ヘキコトト思ハサルヘカラス米国ニ於テ数年前日本ノ一商社カ墨国「マグダレナ」湾ニ貯炭所ヲ入手シタルノ噂アルヤ上院ニ於テ「ロッヂ」氏ハ彼ノ「ロッヂ」決議案ヲ提出シタル事例ニ鑑ミテモ這次「シンクレヤ」契約ニハ樺太東岸ノ築港ニ迄言及スル所アルヲ以テ国防ノ責任者タル海軍当局トシテハ之ヲ不問ニ付スル能ハサルハ素ヨリ其所ナリ

漁業問題又浦塩ニ於テ解決容易ナラス遅クモ三月末頃迄ニ結着ヲ見サルニ於テハ或ハ今年又々自由出漁トナリ更ニ進ンテ無謀ナル密猟ヲ敢テシ或ハ自衛ト称シテ密ニ武器ヲ携行スルモノ続出シ随所ニ大輝丸ニ類スル事件ノ誘発モ絶無ナラサルヘク延テ露国漁業監視船トノ衝突トナリ遂ニ我ハ武力ヲ以テ露国ノ主権内ニ於テ漁業家ヲ保護セサルヘカラ

二三五 二月二十七日

在スウェーデン国畑公使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

ソビエトロシアノ対極東政策ニ関スル秘密通

牒要旨報告ノ件

第三八号

(二月二十八日接受)

当館ノ入手シタル莫斯科政府ヨリ在外同国某代表者ニ宛テタル「極東ニ於ケル露国政府ノ方針」ト題スル秘密通牒亨中日本ニ関係ノ重要事項大要左ノ通り(右通牒ニハ日付ナキモ「ヨッフエ」ノ渡日前頃ノモノヤト思ハル)

日本ヲシテ北部樺太ノ撤兵ヲ行ハシメ且南部樺太ノ軍事的施設ヲ撤廃セシメンカ為メニハ米国外務当局及露国ニ於テ利権ヲ擁護セル米領事ヲシテ運動セシムルヲ要ス極東ニ於ケル露国ノ地位ヲ鞏固ニセンカ為メ日本トノ条約締結ニ極力努力スヘシ但シ右条約ハ露国カ欧州諸国ト締結セルト同種類タルヘキモ日本ヲシテ北部樺太撤兵及日本軍占領ノ為メ露国ノ蒙リタル損害賠償ノ二要件ヲ承認セシムルヲ要ス若シ日本ニシテ右条件ヲ拒絶スル場合ニハ朝鮮支那ニ革命ヲ誘致シ以テ日本ヲ孤立セシメントスル「ラデク」及片山案ヲ実行スルコト極東露領ノ主権者ハ露国ナルヲ以テ日

サルカ如キ破目ニ陥リ将来日露親善上一大禍根ヲ醸成スルノ虞アリ

林業問題モ亦進退兩難ノ情況ニ在ルコト漁業問題ト異ラス幸ニ企業家ノ退嬰ハ漸ク事ナキヲ得ルモ政府ニシテ果シテ漁業者ニ対シ自由出漁ヲ承認スルニ於テハ林業者ニ対シテモ亦必スヤ保護上相当ノ考慮ヲ払ハサルヘカラサルニ立至ルヘキハ避ケ難キ所ナルヘシ

此ノ如ク論シ来レハ対露問題ノ解決遷延ハ益々両国ノ事態ヲ紛糾セシムルノ虞アリ是レ日露親善ノ大局上最モ悲ムヘキノミナラス今日ニ於テ何等カ画策スル所ナク徒ニ曠日弥久センカ樺太駐兵モ又何等ノ得ル処ナクシテ撤兵断行ノ余儀ナキニ陥ルノ日蓋シ遠カラサルヲ慮ル明日ヲ待ツモ事態ノ改善セラルル見込ナキコトハ万人ノ齊シク認ムル処ナルヲ以テ我当局ハ速ニ我对露方針ノ大綱ヲ定ムルト共ニ之カ実行上ノ大障碍タル誤解ヲ一掃スル目的ヲ以テ一方「ヨッフエ」氏ノ来朝ヲ機トシ之カ利用ニ努ムルト共ニ他方適当ナル朝野ノ人物ヲ欧露ニ派遣シ依テ以テ速ニ日露両国間ノ紛糾ヲ解決スルニ努ムルコト賢明ニシテ且喫緊ノ策ナリト認ム

本及米国ノ資本主義帝国主義ノ侵入ヲ防止スヘシ齊多政府カ締結セル「コンセンション」ニ関スル協定ハ此ノ際全部之ヲ調査シ露国ノ利益ニ反スルモノハ之ヲ廃棄スルコト

英仏独ヘ郵送セリ

二三六 三月七日

ヨハンナモリ
日露協会会頭後藤新平宛

現下ノ日露関係ニ関スル見解呈示ノ件

Atami, March 7th, 1923.

Dear Viscount Goto,

Inssofar as I can judge by the Japanese papers that I am in a position to read, and by these I mean, consequently, mostly the English written ones, there exists a large misunderstanding on the part of the Japanese Government and the Japanese public at large in their conception of the Russian Far Eastern policy.

I agreed perfectly with you when you gave out as a motive of your courteous invitation to me to come to Japan for recuperating also the hope that my stay in this country could help to clear the misunderstandings

that exist between Russia and Japan.

Most grateful as I am to you for your kind attention and hospitality shown to me, I would not care to let an opportunity pass by of clearing up misunderstandings where such exist, as it seems to me. It can be perfectly clearly surmised from reports having appeared in the above-mentioned papers that the Japanese Government, or rather the Ministry of Foreign Affairs, believe there exist several different points of view among ruling circles in Russia on questions of foreign policy in general and with regard to Japan, in particular.

Mr. Kawakami, Japanese Minister Plenipotentiary and Envoy Extraordinary to Warsaw, declared, in an interview, that though Mr. Yoffé's influence and importance in Russia were very great, yet he could surmise from conversations with Russian statesmen that the policy of Mr. Yoffé at Changchun did not meet with approval.

At the same time, one of the Japanese papers openly

does not in the least correspond to the real situation as it stands.

Since, on principle, the Workers and Peasants' Government does not recognise secret diplomacy, there can never in general be any currents in the foreign policy of Soviet Russia, and this policy must always and wholly represent the true interests of the majority of the people, i.e. the toiling masses, of Russia. Russian diplomacy is *people's* diplomacy, and there are not, nor can there be, any dissensions among us within the group engaged in diplomatic work.

Mr. Krassin is People's Commissary of Foreign Trade, and, as such, does not take part in diplomatic work specially, being in charge of matters of foreign trade. True, Mr. Karakhan is Member of the Collegium of the People's Commissariat of Foreign Affairs and one of the Assistant "Remplacants" of Mr. Chicherin, however, he has never held any special position of his own, nor has he ever had too much influence on Russian

declares that the question of Russo-Japanese relations and of the so-called third Russo-Japanese Conference is one of *personality*, or, in other words, that this question depends on what persons the Japanese Government will have to deal with; and there are many Japanese papers which report the view of the Ministry of Foreign Affairs purporting to say as if in Russia, in her foreign policy, there were also with regard to Japan a certain current, headed by Messrs. Krassin and Karakhan, which is supposed to be much more prone to compromise than the one which I represent. A few hints contained in the papers seem also to convey the impression that there is a belief that it is possible to conclude solely a trade agreement precisely with this more compromising current, and this—regardless of the question of the Japanese occupation of Northern Saghalien.

May I be allowed, esteemed Viscount Goto, in the interest of the elucidation of truth, to assure you categorically that all this is pure misunderstanding and

foreign policy, in any special direction for these two reasons: first, owing, as already stated above, to the fact there exist no dissensions whatsoever by us within our diplomatic milieux, and then, secondly, because by us as, also, anywhere else, Plenipotentiary Envoys represent all the Republic and not alone the People's Commissariat of Foreign Affairs.

While I was conducting negotiations at Changchun in the name of the RSFSR, I was in the closest contact with my Government and communicated with the latter on every serious question. Each serious question was discussed by all the Government as a whole, and so was too the opinion of the Delegation on such question, and the voice of the Department concerned in a given question always carried special weight.

As the negotiations were all through a matter of public knowledge in Russia, the broad masses too had the possibility of expressing their views on the questions under discussion at Changchun, and I may safely ad-

vance that, perhaps, there never had yet existed such solidarity between the Delegates the Government and the peoples, as at the time of the Changchun Conference. Not only is there no dissatisfaction being felt in Russia with my Changchun policy, but, on the contrary, "my" policy at Changchun was and still is nothing but the policy of my people and my Government.

All the peoples of Russia and the whole of her Government were altogether indignant at the conquering notes in which the Japanese Delegation conducted negotiations at Changchun, and all shared this point of view that until the evacuation of Northern Saghalien by the Japanese no negotiations were at all possible with Japan. On the other hand, the Russian Delegation at Changchun had, in the name of their people and Government, declared quite unambiguously their willingness to meet half-way Japanese economic interests in Saghalien too, doing it in some other way, without acts of violence on the part of Japan.

It would be out of place here to dwell more in detail on all the phases of the Changchun Conference and the causes of its disruption: I promised to write you another letter on this matter, and, though the state of my health be a big obstacle thereto, I will yet write this letter.

At the present time, however, I may call your attention to the fact that even after the failure of the Changchun Conference, the friendly attitude of Russia towards Japan has not at all been changed. After the occupation of the Maritime and the Amur provinces by the Red troops, the Japanese consuls were left everywhere on their posts, although up till now there are no Russian consuls yet in Japan, and despite the fact that in this matter the international law upholds very strictly the point of view of reciprocity. Nor was the attitude of the Russian authorities to the Japanese residents on the spots also after the rupture of the negotiations such as would correspond to relations that should set in

between hostile States, this attitude, on the contrary, being then and still remaining extremely friendly. I may likewise remark that yet on the 11th of November 1922, acting in the name and upon the instruction of my Government, I handed to the Japanese Government, through the Japanese Minister to Peking, a Note of protest against the continued occupation of Saghalien, in which Note it was once again and more definitely yet pointed out that Russia was willing to grant concessions to Japan in Northern Saghalien. However, no answer was forthcoming to this Note, and, on the contrary, the Japanese Government continued its strongly hostile policy vis-à-vis Russia, ignoring her altogether and being, apparently, foremostly anxious lest anyone would take Japan under for being willing to recognise Russia and show her even some primitive courteousness. Just the reverse: when the well-known and quite inadmissible act of piracy of Japanese ships against Russian had taken place—when many peaceful Russian

citizens were slaughtered and their property was seized, and when, again in the name and on the instruction of my own Government, I sent, through Mr. Oyata, a Note to the Japanese Government, this Note was first very courteously accepted, just as the first one had been, in the Japanese Legation at Peking, and then, after a few days it was brought back to the Russian Plenipotentiary Mission by a Secretary of the Japanese Legation, who declared that the latter had no right to receive it, and that the only way of having this Note sent to the Legation was by mail. When, however, this course was followed, a few days later the same Secretary of the Japanese Legation brought the Note to the Russian Mission again, declaring he had made a mistake, and that the Note could not be accepted either by mail. Although this Note might very well have been refused immediately, seeing that when it had come by post it was quite clear that the mail came from the Russian Mission, and it was more than easy to guess what the

parcel contained.

This wavering and ambiguous policy was continued further.

When your kind invitation to me was received to come to Japan for recuperation, and Mr. Fujita, who was sent by you, announced that the Japanese Government accepted all those conditions which had been set by me during preliminary conversations, namely that the Government guaranteed diplomatic immunity for myself and my party, the freedom of moving in Japan, the immunity of correspondence and the right to use secret code and have couriers—my staff, who, after the incident with the piracy Note, had been directed by me to discontinue all relations with the Japanese Legation at Peking, requested Messrs. Fujita and Taguchi to inquire whether the Japanese Government was actually granting to me all the above-enumerated guarantees. Both your representatives brought from the Legation an answer in the affirmative and left Peking to see me at

everything he himself had declared was still perfectly valid.

My answer was that I never demanded written declarations from official representatives of Governments, for in my relations with other Governments I am used to consider verbal statements as made by their representatives quite as valid as written ones, but, however, for more clearness' sake, I requested your representatives to lay down in writing all that had been declared to them, and also to my Secretary in their presence, by official representatives of the Japanese Government.

However, just before boarding the ship leaving for Japan, the Acting Consul General communicated to me a telegram received from the Japanese Ministry of Interior Affairs, stating that there had been discovered a plot against me, and that, therefore, the Government could not guarantee my personal safety.

Although I was rather astonished that the Japanese Government, which is so susceptible in the matter of

Shanghai, where I was preparing to go from for the South of China.

At Shanghai, the Acting Japanese Consul General confirmed to my Secretary, in the presence of your representatives, quite officially, that your Government actually gives all the above guarantees, while he enumerated each of these guarantees. Then I decided to accept your courtesy and come to Japan. However, some three or four days later, the Acting Consul General telephoned to my Secretary to the effect that his Government could not give the above-mentioned guarantees. I then informed your representatives that this being so, I would not go to Japan. They answered this was a misunderstanding, for the Acting Consul General had in view this fact alone that the guarantees in question could not be given in writing, but that in fact they remained in force; at the same time a letter was received from the Acting Consul General, saying the attitude of the Japanese Government had not changed and that

all international usus, could have admitted that the Home Office should address itself directly—although all relations with foreigners, as according to international usus, go always through the medium of the Foreign Office—, and though it made me absolutely astounded how a plot that had been *discovered* could yet be dangerous, however, being used to risking my own life, while in this telegram there was no refusal on the part of the Japanese Government of the guarantees that were granted to me and while, at the same time, I had already booked my tickets and my baggage was already on board the ship—there thus remained nothing for me to do but to be grateful to the Home Minister for his kind care for my person and go on board the ship. And so that was exactly what I did do.

It was at Yokohama that the first case of violation of guarantees given took place: in the absence of any one of my representatives, my baggage was opened with skeleton keys and examined carefully, while even pri-

vate letters were read.

It was only following upon your statement to me, dear Viscount Goto, to the effect that this event really took place by accident, and the promise that this case would be investigated, that I decided to stay in Japan and not to leave immediately. Next, however, the Government broke also the guarantee given for the cipher code, while changed three times its attitude regarding the couriers. Out of respect for you, I decided to give way in the secret code question, but I cannot compromise in the matter of couriers.

On the other hand, the Japanese Government has surrounded me with such a wall of spies that, instead of the freedom promised, I find myself as in prison; all my correspondence is evidently being perflustrated, as letters reach me with a delay of some four or five days, besides with roughly visible signs of their having been opened before they reached me, which signs cannot fail to fly in my face, as I have behind me an experience

never and nowhere have I had to face such unfriendliness, hostility and sheer lack of tact as are shown towards me by the Japanese Government. And, indeed, on the background of a most friendly attitude of nearly all the layers of Japanese public, on the background of those expressions of deep sympathy which I receive almost every day either in verbal or written form, such a conduct of the Japanese Government can have but one meaning. It is precisely for this reason, and not with a view to making a complaint that I have been writing to you all that has been laid down in the foregoing pages.

At Changchun the Japanese Delegation spoke to us in the language of conquerors to conquered, ignoring altogether Russian interests and setting forth only their own, and, owing to this, the Changchun parley was even more painful than the Brest-Litovsk negotiations, for while at the Brest Conference the Germans put their rapacious ultimatums, yet they clad them in a

of fifteen years of work under the Czarist regime, and, consequently, have been used to methods much more perfect technically of the Czar's secret police.

During one month that I have been staying in Japan, where I was invited to come to by the Lord Mayor of the capital of this country and one of her most prominent high officials, besides having received preliminarily so courteously guarantees from the Japanese Government, I have gathered the impression that not in any single country of the world could I have had so many and such disagreeable things as in Japan. During the five years' run of our power I have had the opportunity both officially and informally to visit various countries and had to do with different Governments or their representatives—as well those that recognise us both *de jure* and *de facto*, and those which do so only *de facto*, as those that do not recognise us at all. Now, I have also many a time had to do with representatives of countries with which we were in a state of war. Yet

fitting form of reciprocity.

When I come to think now of the conduct of the Japanese Government *vis-à-vis* Russia, it seems to me that the former still maintains its old Changchun attitude of completely ignoring Russia as a sovereign Great Power. Recent facts only confirm this.

When my Government sent a protest to the Japanese against the arbitrary stationing, contrary to international usus, of Japanese warships in Russian territorial waters, reports appeared in the newspapers to the effect that the Japanese Government meant to ignore this protest and simply leave it unanswered. When there was some appearance that the question of fisheries in Russian waters could not be settled before the beginning of the spring fishing campaign, it was semi-officially reported in the papers as if the Japanese Government intended to allow Japanese fishermen to fish in Russian territorial waters under the protection of Japanese warships.

Whatever the attitude towards the Japanese press,

but if the Government does not deny such *semi-official* reports, one may be induced to believe the latter are correct.

Now, all these facts and those mentioned above can be explained but in one way only: what the Japanese Government fears most is lest it be suspected of being willing to recognise the Soviet Government, and thus, in the attitude it assumes towards the latter, it overplays its hand and conducts such a policy as if, in general, Russia were not a sovereign State. The Japanese Government even forgets that there exists an immense difference as between last year and the current one, for if, last year, Japan could explain her behaving herself in Siberia arbitrarily and like at home by the fact she had agreements with local Governments, established by herself, this year—there already exist no more such Governments, there being but one single Government of Russia: i.e. the Moscow one—the only name that such acts as those of last year deserve as according to

the international law is simply "piracy", and nowhere and on the part of no man will they meet with any sympathy at all.

As regards mutual relations with Russia, these acts rouse in the Russian people only feelings of deepest offense and rancour—which makes impossible for tens of years to come any agreement between the two peoples.

When I first came to the Far East, I heard much of the utmost susceptibility of Oriental peoples and the extremely big importance they attach to "saving face".

I can understand this in the case of China, where foreigners actually behave themselves like at home. But I utterly fail, however, to understand this with Japan. Indeed, Japan is one of the greatest Powers in the world, and no one could possibly take it into his mind to treat her as a party which has not equal rights.

On the other hand, Russia is, to a large extent, also an Oriental, Asiatic State, and for many reasons it is precisely Russia that has full right anyhow, much

more than Japan to be susceptible in questions of her prestige. Not only is Japan recognised by all, but juridically she is allied with the greatest Powers. Russia was but yet quite recently an arena of a most arbitrary

conduct within her territory of Great Powers, interfering in her internal affairs under the pretext of supporting various black-hundred generals and admirals, and, if we do not count the smaller States, up to now Russia has been recognised *de jure* by Germany alone. On the other hand, Russia covers a territory larger than one seventh

part of the earth, and as for her natural riches, she is wealthier than perhaps any other country in the world; her population is over 150 millions, and her army is perhaps the strongest that exists. There are at the same time a great many White Guards outside of Russia who do their best to criticize and throw blame on the Russian Government for everything, whenever Russia takes up an uncompromising attitude towards other States, she comes in for blame for this same attitude, but if, on

the contrary, she is conciliating, then a hue and cry is raised and people go on saying that "with the Czarist Government no one would ever have even dared speak in such a way".

Evidently Soviet Russia has more right than anyone else to be susceptible about her prestige and more right too than anyone else to be concerned with "saving her face", that is she has more right than all other States to demand full equality of rights in her international relations.

It is clear, therefore, that until the Japanese Government will understand this, all agreement between Russia and Japan becomes extremely difficult, if at all possible.

In conditions of new Russian diplomacy, when all the negotiations are conducted openly in the face of all the people, each and any Russian peasant or worker takes part, so to say, himself or herself in the negotiations and is especially sensitive to any affront made

upon Russia by the other contracting party.

It must stare everyone in the face who is acquainted with the sentiments of the large popular masses in Russia what a difference there is between the attitude towards Japan after the Russo-Japanese war and the attitude to-day, following upon the Japanese intervention in Siberia. All the hardships of the war of 1904-05 and the heavy bloodshed in that war did not rouse such indignation among the Russian people as exists to-day, after the Japanese intervention of recent years, and which is still aggravated by the above-described attitude towards Russia on the part of the Japanese Government.

In the conscience of the Russian people—due, probably, to these very reasons—France and Japan are considered as the worst enemies, and any action, in itself perhaps not even meant to be hostile, on the part of the Governments of these States calls forth immediately among the Russian people some suspicion of new inimical actions against Russia. The same thing is

happening now, when newspapers are publishing reports about the Japanese Government planning to bring the White Guards from Gensan to Saghalien, and in Russia suspicion is being aroused generally that this means a new attempt at intervention against Russia from Saghalien.

Russia, on the other hand, does not in the least consider herself as a country beaten, while she esteems, on the contrary, that she came out as victor from the world capitalistic intervention against Russia.

The Russian people is proud thereof that, through its own efforts and sacrifice, there are no more foreign troops on Russian soil, and, therefore, takes especially painfully the occupation by the Japanese army of the Russian part of Saghalien. To let alone the fact that all the Russian people understands perfectly well the strategic and economic importance of Saghalien, its occupation makes the people lack the conscience of full pride of and full satisfaction at the unification of all the

Russian territories under the Russian Red Flag.

If we were now to make concrete inferences from the foregoing, it will be evident that, from the *Russian point of view*, letting quite alone the question as to how far these stipulations are acceptable to Japan—the resumption of Russo-Japanese negotiations is possible only under the following stipulations:

1. Recognition of full equality of the rights of Russia with Japan, as well in the proceedings of the negotiations, i.e. in the setting forth of claims by the other party, as in the treaty itself, i.e. in the corresponding wording and laying down of the clauses themselves of the agreement.

2. Willingness to conduct negotiations not barely on a trade agreement, but on a full treaty, inclusive of the resumption or normal diplomatic relations, for there is a special decision in this reference of the Supreme Organ of the Russian Republic. When at the time of the Genoa Conference I made a report on the latter and

also on the Russo-German Treaty—known as the Rapallo Treaty—, the All-Russian Central Executive Committee of Soviets passed a resolution deciding that henceforth the Council of People's Commissaries shall not have the right to conclude half-way treaties of the Russo-British Trade Agreement type, while instructing it, on the contrary, to sign treaties of the Rapallo Treaty type. And this latter Treaty differs, as is known, in that in it: 1. both parties renounce any claims and accounts for the past, and 2. both parties mutually recognise one another both de facto and de jure.

When, after this Rapallo Treaty, a commercial treaty was concluded in Italy between this country and Russia, which did not contain such clauses, this latter treaty was, for that very reason, not ratified by the All-Russian Central Executive Committee of Soviets.

From this it may be observed that to abide by this stipulation 2 is for the Russian Government a "conditio sine qua non".

3. A date, which would be acceptable, must be fixed for the evacuation of Northern Saghalien by the Japanese troops.

As it was precisely on this question that the rapture of the Changchun Conference occurred, it is perfectly clear that this stipulation is an absolutely indispensable condition.

As, due to the altogether peculiar and unprecedented-in-history attitude taken up towards me by the Japanese Government, I have been now for about one month and a half cut off from Russia in general and my Government, in particular,—I am not in a position to judge of the feelings actually prevailing in Russia vis-à-vis Japan. However, I would believe that this attitude could not get better, in view of the conduct of the Japanese Government referred to above, but, at the same time, I do not believe that the above-mentioned preliminary condition may have changed, which I laid down in the present letter on the basis of foregoing

was absolutely unacceptable to Russia.

Thus, this question having not been discussed at Changchun, no decision about it was taken in Russia.

Now, although it seems most strange to me that one party or the other should take upon herself the responsibility for events which must yet be investigated by both of these parties, I nevertheless believe that there does exist, however, with regard to this question one, though a far distant, precedent. When at Genoa our counterparts claimed from us compensation for losses, we were willing on principle to accept such demand, conditional upon the recognition of our counter-claims. Although it may be true, however, that the above-mentioned decision of the All-Russian C.E.C. of Soviets to take the Rapallo Treaty, containing mutual renouncement of all accounts in the past, as prototype of all future treaties concluded by Russia—is in contradiction with that.

Personally I believe that the Rapallo decision ought

decisions of the Russian Government and my knowledge of the sentiments of the Russian people.

What are in this respect the Japanese stipulations, I do not know, for since I have been staying in this country, the larger part of the Japanese public and press demand simply an immediate recognition of Russia de jure and an immediate resumption of negotiation.

However, as much space is being given in the press to the so-called "Nikolaevsk Affair", I may remind that the Russian Delegates at Changchun never refused to take up this issue immediately, but, that, on the contrary, it was the Japanese Delegation that did not wish, declaring that this question, for some reason or other, in contrast to all the rest, could be discussed only with a Russian Government recognised by Japan, and insisting energetically on the connection between the question of the "Nikolaevsk Affair" and the occupation of Saghalien, or, in other words, exactly on such a proposition as, for the above-stated reasons of prestige of a sovereign State,

to be considered as the most reasonable diplomatically, for mutual relations between peoples do not end, but begin, with the conclusion of treaties, and if, for odious mercantile profits, both parties start turning over again all the horrors of a war already gone through and partly forgotten, this hardly contributes to the settling of friendly relations between corresponding peoples.

I beg to ask your pardon for this extended letter, but I hope, however, that I have been able to satisfy your desire, and have laid down objectively the possible Russian point of view on the resumption of the Russo-Japanese Conference.

I beg you, dear Viscount Goto, to accept the assurance that whatever the future may have in store for Russo-Japanese mutual relations, personally for yourself I will always have feelings of profound esteem and heartfelt gratitude.

Yours most sincerely,
(Signed) A. Joffe

(右和訳文)(註 仮訳文ナリ)

謹啓 最近日本ノ諸新聞中小生ノ閲読シ得ルモノ即チ主トシテ日本ニ於ケル英字諸新聞紙ノ論調ニヨリ判断致シ候ヘバ日本ノ政府及一般公衆ハ露国ノ極東政策ニ関シ多大ノ誤解ヲ抱クモノノ如クニ被存候

小生ニ対シ病氣保養ノ為日本へ来遊スベク御懇招被下候閣下ノ御主旨ハ一ニハ亦小生ノ日本滞在ヲ以テ日露両国ノ間ニ蟠ル誤解ヲ一掃スルノ一助タラシメントスルニアリトノ閣下ノ御声明ハ小生ノ全然賛同ヲ表スル処ニ有之候

小生ハ閣下ノ御懇篤ナル御世話ト御款待トニ対シテハ衷心ヨリ感銘罷在候ヘ共昨今日本朝野ノ間ニ存スルガ如ク思考致サレ候露国ニ対スル誤解ヲ一掃スベキ此ノ好機ヲ此ノ儘ニ逸シ去ルハ小生ノ忍ビ能ハザル処ニ有之候

上記ノ諸新聞ニ表レタル報道ヨリ綜合スルニ日本ノ政府或ハ寧ロ日本ノ外務省ハ露国ノ首脳者間ニ露国ノ対外政策殊ニ対日本政府ニ就テ諸々ノ異リタル意見ノ存スルモノト誤信シツツアルハ殆ンド明カナルモノノ如クニ被存候

現ニ日本ノ波蘭駐割特命全權公使川上氏ハ新聞記者トノ会见ニ於テ「ヨッフエ」氏ノ露国ニ於ケル勢力及威望ハ嘗テ

ニ有之候

由來勞農政府ハ主義トシテ秘密外交ヲ認メザルモノニ有之從テ勞農露国ノ対外政策ニ関シテハ暗闇ノアリ得ベキ筈モ無之露国ノ外交ハ常ニ多数国民即チ自ラノ勞務ニヨツテ衣食シツツアル多数民衆ノ真ノ利益ヲ正実ニ代表スルモノニ有之候露国ノ外交ハ国民ノ外交ニ有之從テ我々外交ノ事ニ從事シツツアル者ノ間ニハ毫モ朋党的ノ爭議ナク又之アリ得ベキ筈モ無之候

御承知ノ通り「クラッシン」氏ハ外国貿易ニ関スル人民委員ニ有之専ラ海外貿易ノ事務ヲ主宰致シ居候關係上氏ガ其ノ資格ニ於テ特ニ外交ノコトニ関与スルコトハ無之筈ニ候又「カラハン」氏ニ至ツテハ氏ガ現ニ国民外交委員會ノ一員ニシテ且ツ「チチュリン」氏ノ補佐官ノ一人タルコトハ事實ニ有之候ヘ共同氏ハ未ダ嘗テ氏自身ノ特別ナル椅子ヲ占メタルコトナク加フルニ既ニ申述候通り我ガ外交部内ニ何等意見ノ扞格ナク又露国ニ於テモ他ノ諸国ト同シク苟シクモ或ル対外問題ニ付キ特命全權委員ノ任命ヲ見タル以上ハ其ノ者ガ人民外交委員會ノミナラズ勞農共和国全体ヲ代表シテ交渉ニ当ルコトト相成居候ニ付「クラッシン」氏ガ

頗ル大ナルモノアリシモ今回余カ親シク幾多ノ露国政治家ト会谈シテ聞キ得タル処ヨリ綜合スルニ長春會議ニ於ケル「ヨッフエ」氏ノ政策ハ多クノ賛同ヲ得ザリシモノノ如シト述べ居ラレ候

同時ニ或ル日本ノ新聞紙ハ日露ノ国交問題及所謂第三回日露会商問題ノ成否ハ要スルニ人ノ問題換言スレバ日本政府ガ何人ヲ相手トシテ交渉ヲ開始スベキカノ問題ニ懸ツテ存スル旨ヲ公言致居候又外務省ノ所見ヲ報道スル幾多ノ日本新聞紙ハ露国ニハ其ノ対外政策及対日政策ニ関シ各派ノ間ニ暗闘アリ、カノ「クラッシン」及「カラハン」氏等ノ率ユル一派ノ如キハ「ヨッフエ」氏ノ率ユル一派ニ比シ頗ル妥協的政策ヲ主張シツツアルカノ如キ言辭ヲ連ネ居候又或ル新聞紙ハ斯ル妥協派ト交渉セバ北部「サガレン」ノ占領問題ニハ触レズシテ唯日露ノ通商条約ノミヲ締結スルコトモ敢テ困難ニアラズト信ジツツアルモノノ如ク見受ケラレ候

尊敬スル子爵閣下、小生ハ事實ヲ明白ナラシムルカ為ニ如上ノ諸説ガ皆純然タル誤解ニ出ヅルモノニシテ毫モ実狀ニ添ハザル臆測ニ過ギザルコトヲ茲ニ断言シテ憚ラザルモノ

特定ノ外交問題ニ就テ特ニ其ノ勢力ヲ振ヒタルガ如キ事例ハ嘗テ無之処ニ候

小生ガ勞農政府ヲ代表シテ長春會議ニ臨ミツツアリタル時ニ於テモ小生ハ常ニ本国政府ト密接ナル連絡ヲ保チ重要ナル問題ニ就テハ常ニ政府ト協議ノ上決定致シ居候ハ申ス迄モ無之、之等ノ諸問題ハ政府内ニ於テモ又全權委員ニ於テモ必ズ十分ノ討議ヲ經テ始メテ決定ヲ見其ノ間關係当局ノ意見ハ特ニ重要視セラレタル次第ニ有之候

露国ニ於テハ長春會議ニ於ケル交渉頗末ハ直チニ之ヲ国民ノ前ニ公表致シ候結果同會議ニ於テ議論ノ焦点ト相成候様ノ諸問題ニ就テハ一般公衆モ十分ニ其ノ所見ヲ開述シ得タル次第ニ有之從テ長春會議ノ際ノ如ク全權委員ト政府ト而シテ人民トノ間ニ意見ノ一致ヲ見且ツ固キ結束ノ結バレタル事例ハ未ダ嘗テ無之カリシト申シ候テモ敢テ過言ニアラズト被存候斯カル次第ニ付小生ノ長春會議ニ対スル政策ニ就テハ露国内ニ何等ノ反対ナキハ申スニ及バズ所謂「小生」ノ政策ナルモノハ終始一貫シテ即チ露国ノ人民及政府ノ政策タルニ外ナラズ候

日本ノ全權委員諸氏ガ長春會議ノ基礎案トシテ提出サレタ

ル命令の覚書ニ対シテハ露国ノ人民政府共ニ憤懣ニ堪ヘザリシ処ニ有之日本ガ北「サガレン」ノ撤兵ヲ実行セザル限り日本トハ交渉ノ余地ナシトノ意見ハ期セズシテ拳国一致ノ輿論タルニ至リタル次第ニ有之候而シテ一方ニ於テ長春ニ於ケル露国ノ全権委員ハ露国人民及政府ノ名ニ於テ明白ニ若シ日本カ暴力ニ訴フルヲ止メ他ノ手段ニ出ヅルニ於テハ露国ハ喜ンデ日本ノ「サガレン」ニ於ケル経済的利益ヲ考慮シ互譲ノ態度ニ出ヅベキヲ声明致シタル次第ニ有之候長春會議ノ顛末及其ノ決裂ノ事由ニ関シテハ茲ニ之ヲ詳述スルヲ避ケ兼ねテ御約束申上候他ノ書翰ニ於テ詳細具陳可致候尤モ御承知ノ通りノ病軀ニテ意ノ如ク執筆致兼候得共兎ニ角不日詳細ノ事情相認メ劉覽ニ供シ可申候

去リ乍ラ長春會議カ決裂ニ終リ候今日ニ於テモ露国ノ日本ニ対スル友誼的感情ハ毫モ変化シ居ラザルノ一事ハ特ニ閣下ノ御注意ヲ乞ヒタキ点ニ有之候現ニ赤衛軍ガ沿海州及黒竜江州ヲ占領致候後ニ於テモ日本ハ未ダ其ノ国内ニ露国領事ノ駐在ヲ許サザルニ拘ハラズ又此ノ点ニ関シテハ国際法ハ嚴格ニ相互的ノ主義ニ準拠致居候ニモ拘ラズ露国ハ特ニ此等ノ地方ニ於ケル日本ノ領事ヲシテ依然其ノ任地ニ滞在

執務致サシメ居候又該地方ニ在留スル日本居留民ニ対スル露国官憲ノ態度モ今猶頗ル友誼的ニ有之何等敵国民ニ対スルガ如キ觀ハ無之候猶又一九二二年十一月十一日小生ガ本国政府ノ訓令ニ基キ本国政府ノ名ニ於テ北京駐劄ノ貴国公使ノ手ヲ經テ貴国政府ニ対シ「サガレン」ノ占領ニ対シ抗議ヲ提出致シ候節モ其ノ抗議書中ニ露国ハ北「サガレン」ノ利權ヲ日本ニ割讓スルコトニ就テハ決シテ吝カナルモノニアラザル旨ヲ重ネテ明言致置候然ルニ此ノ覚書ニ対シテハ今猶何等ノ回答ニ接シ不申日本政府ハ依然トシテ露国ニ対シ武力的敵對政策ヲ繼續シ居ラルルノミナラズヒタスラ列国ガ日本ニ露国承認ノ意アリト疑ハンコトヲ惧レ殊更ニ露国ニ対シテハ些カノ好意ヲモ示サズ全然露国ノ友誼的申出ヲ無視スルノ態度ニ出デラレ候

最近世ニ伝ヘラレ候カノ日本ノ海賊船ガ幾多ノ平和ナル露国民ヲ殺戮シ其ノ財ヲ奪フノ暴虐非道ナル行為ヲ逞ウ致候事件ニ際シテモ小生ハ本国政府ノ訓令ニヨリ小幡公使ヲ介シテ日本政府ニ覚書ヲ提出致シ候処公使ハ最初ノ覚書同様懇切ナル態度ヲ以テ此ノ覚書ヲ受領致サレ候然ルニ数日後ニ至リ日本公使館ハ書記官ヲ我が全権委員公所ニ遣ハシ右

覚書ヲ返却シ且ツ公使館トシテハ公ケニ之ヲ受領シ能ハザル旨及ヒ之ヲ公使館ニ送達シ得ル唯一ノ道ハ之ヲ郵送スルニアル旨ヲ述ベラレ候因テ当方ニ於テハ直チニ之ヲ日本公使館ニ郵送致候処数日ヲ經テ更ニカノ日本書記官ハ同覚書ヲ返還スベク再ヒ露国委員公所ニ來訪サレ先日ノ話ハ同氏ノ誤解ニシテ仮令郵送サルルトモ日本公使館ハ之ヲ受領シ得ザル旨ヲ言明致サレ候(郵書ノ表記其ノ他ニヨリ此郵便物ガカノ覚書ヲ含ム露国全権委員ヨリノモノタルハ一見明ニシテ從ツテ日本公使館ハ即時ニ之ヲ返還シ得タルニ拘ハラズ)

此ノ日本ノ不安定ニシテ曖昧ナル態度ハ其ノ後ト雖モ依然繼續致居候

閣下ヨリ病氣保養ノ為日本へ來遊スベキ旨ノ御懇招ヲ蒙リ候節閣下ノ使者トシテ參ラレ候藤田氏ハ小生ト同氏トノ間ノ予備的談話ニ於テ小生ヨリ申出候日本渡航ニ関スル諸条件即チ日本政府ハ小生及小生ノ一行ニ対シテハ外交官トシテノ不可侵權ヲ保証スベキコト日本ニ於ケル旅行ノ自由ヲ許スコト小生ノ通信ノ不可侵ヲ認ムルコト及ヒ暗号電信及「クリエール」ノ使用ヲ許スコトノ諸条件ハ總テ日本政府

ノ容ルル処トナリタル趣ヲ明言セラレ候ニ付小生ハカノ覚書事件ノアリタル後直チニ部下ニ命シ日本公使館トノ一切ノ關係ヲ絶タシムルト同時ニ藤田及田口両氏ニ対シ果シテ日本政府ハ小生ニ対シ相違ナク上記ノ諸特權ヲ付与サルルヤ否ヤヲ確ムベキ旨ヲ依頼致シ候処両氏ハ直チニ在北京公使館ニ就キ間糺サレ候結果然リトノ確答ヲ得テ之ヲ當時南部支那旅行ノ目的ヲ以テ上海ニ滞留中ノ小生ニ齎サレタル次第ニ有之候

又上海ニ於テモ日本ノ總領事代理ハ閣下ノ兩代表者ノ面前ニ於テ公式ニ叙上ノ諸条件ヲ自ラ一々列挙サレタル上日本政府ハ必ズ之等ノ諸条件ヲ保証スベキヲ言明致サレ候茲ニ於テ小生モ愈々閣下ノ御好志ヲ拝受シテ日本へ渡航致スコトニ決心致シタル次第ニ有之候然ルニ三、四日ヲ經テ總領事代理ハ電話ヲ以テ小生ノ秘書ニ対シ日本政府ハ以上ノ保証ヲ与ヘ得ザル旨ヲ通告致サレ候因テ小生ハ閣下ノ代表者ニ対シ果シテ此ノ如クンバ小生ハ渡日セザルベキヲ告ケ候処藤田、田口両氏ハ總領事代理ノ意ハ単ニ文書ノ上ニ於テ斯カル保証ヲ与ヘ得ズト云フニ止マリ事實ニ於テハ勿論此ノ保証ハ有効ナルヲ以テ此ノ点ニ関シ小生ニ誤解ナキヲ望

ム趣ヲ申述べラレ候ノミナラズ同時ニ総領事代理ヨリモ来翰アリテ日本政府ノ態度ニハ毫モ変化ナク又同氏ノ前ニ声明セル処ハ今猶全然有効ナリトノ旨ヲ申越サレ候

之ニ対シ小生ハ從來他ノ政府トノ關係ニ於テモ常ニ其ノ代表者ノ与ヘタル口頭ノ陳述ヲ以テ文書ニヨル陳述ト同様ノ効力アルモノト思考シ来リタルヲ以テ小生ハ決シテ政府ノ代表者ニ対シ文書ニヨル声明書ノ類ヲ求ムルモノニアラザルモ唯事ヲ明確ナラシムル為閣下ノ両代表者ニ対シ同氏等及小生ノ秘書ノ面前ニ於テ為サレタル総領事代理ノ声明ヲ文書ニ認メ置カンコトヲ要求致置候

然ルニ日本ヘ向ケ乗船出帆ノ間際ニ至リ日本ノ総領事代理ハ氏カ日本内務省ヨリ受領セル電信ヲ小生ノ許ニ送達サレ候ニ付早速披見致候処右電文ニハ「日本内地ニ於テ小生ニ対スル陰謀ヲ企図シツアル者アルヲ発見セルニ付日本政府ハ小生ノ身辺ノ安全ヲ保証シ難シ」トノ意味ヲ記載致シ居候

國際間ノ慣習儀礼ヲ重ンズル上ニ於テ常ニ用意周到ナル日本政府カ外國人ニ関スル問題ハ常ニ外務省ヲ通シテ為スノ慣例ヲ無視シテ直接内務省ヲシテ斯カル通告ヲ発セシメタ

破リ其ノ間「クリエール」ノ問題ニ就テハ日本政府ハ実ニ三度其ノ態度ヲ豹変致候小生ハ一ニ閣下ニ対スル敬意トシテ暗号電信問題ニ就テハ之ヲ讓歩致スベク決心仕候ヘ共「クリエール」ノ問題ニ至ッテハ小生トシテ全然妥協ノ余地ナキ問題ニ有之候

一方ニ於テ日本政府ハ嘗テ小生ニ対シ居住往来ノ自由ヲ約束セルニモ拘ラズ無数ノ密偵ヲ小生ノ周圍ニ放チ小生ヲシテ恰カモ牢獄ニアルノ感ヲ抱カシメ居候小生ニ関スル一切ノ信書ガ悉ク開封検査サレツツアルハ小生ニ宛テラレル書信ガ常ニ四日或ハ五日間ノ遅着ヲ見ルニ徴シテ明カナル所ニ有之候ノミナラズ之等ノ信書カ小生ニ到着スル以前ニ於テ何者カニヨッテ開封サレタルノ跡ハ歴然トシテ明カニ有之此ノ如キ小策ガ旧帝政時代十五年間ノ惡戦苦闘ノ經驗ヲ有スル小生ノ眼光ヲ逃レ得ザルハ素ヨリノ事ニ有之候旧帝政時代ノ露国秘密警察ハ信書ノ盗見ニ就テハ遙カニ日本警察ニ勝ルノ技術ヲ有シ居リタルモノニ有之候

小生ハ日本ノ首都タル東京市ノ市長ニシテ且ツ日本ニ於テ最モ重要ノ地位ヲ占メラル閣下ノ御招待ニヨリ且ツ予メ日本政府ノ好意アル保証ヲ得テ日本ヘ渡来致シタル者ニ有

ル突飛ノ態度ニ就テ小生ハ寧ロ怪訝ノ感ナキ能ハザリシト共ニ発見サレタル陰謀ガ如何ニシテ危險ナリヤヲ疑ハザルヲ得ザリシ次第ニ有之候ヘ共由来小生ハ身辺ノ危險ヲ冒スニ慣レ居候ノミナラズ右電文ニハ日本政府トシテ嘗テ小生ニ与ヘラレタル叙上ノ諸保証ヲ拒否スルノ文書モナク且ツ當時小生ハ既ニ乗船券ヲ購買シテ船室ヲ約束シ荷物モ船中ニ持チ運び候後ニ有之候ニ付小生トシテハ唯内務大臣ノ小生ノ身辺ニ関スル好意の注意ヲ感謝シテ乗船渡日スルヨリ外ニ方法モナカリシ次第ニ有之候

然ルニ小生ハ先ツ第一ニ横浜ニ於テ嘗テ小生ニ与ヘラレタル日本官憲ノ保証ノ侵略サレタル事例ニ際会致候即チ小生ハ勿論小生ノ代表者ノ不在中小生ノ旅行荷物ハ合ヒ鍵ヲ以テ開鎖サレ仔細ニ内容ヲ検査サレタル上私信迄披見サルルノ厄ニ逢ヒ申候

親愛ナル後藤子爵、當時小生ガ漸ク隱忍シテ日本ニ止マルベク決心致候ハ一ニ閣下ガ此ノ手荷物検査事件ナルモノガ偶然ノ過誤ニ出デタルモノニシテ之ニ就テハ直チニ十分ノ調査ヲナスベシトノ旨御懇談アリタルガ為メニ外ナラズ然ルニ日本政府ハ更ニ又暗号電信ノ問題ニ就テモ其ノ保証ヲ

之候処上陸以來今日迄一箇月ノ間ニ於テ乍遺憾小生ハ世界中如何ナル国ニ於テモ日本ニ於ケルカ如クシカク多クノ不快極マル事物ニ接スルコトナシトノ印象ヲ得申候過去五ケ年ニ亘ル我カ勞農政府ノ統治期間ニ於テ小生ハ幾度カ公式ニ或ハ非公式ニ数多ノ国々ヲ歴訪シ幾多ノ政府又ハ其ノ代表者ト折衝スルノ機会ニ接シ申候而シテ之等諸国ノ中ニハ法律上及事實上共ニ我カ勞農露国ヲ承認スル者アリ或ハ単ニ事實上之ヲ認ムルニ過ぎザル者モアリ更ニ或ハ全然之ヲ認メザル者モ有之候シカノミナラズ小生ハ時ニ或ハ我カ露国ト交戦状態ニアル代表者トスラ交渉ヲ試ミタル經驗モ有之候ヘ共小生ハ如何ナル国ニ於テモ未ダ曾テ日本政府ノ小生ニ対スル態度程非交誼の敵対のニシテ且ツ露骨ナル態度ヲ以テ迎ヘラレタルコトハ無之候然カモ一方ニ於テ日本一般ノ公衆ハ殆ンド拳ツテ小生ニ対シ最モ友誼の態度ヲ持シ日口頭又ハ書面ヲ以テ深甚ノ同情ヲ小生ニ寄セラル諸君ノ陸統絶エザルニ独リ日本政府ノミ小生ニ対シ斯カル非友誼の態度ニ出デラレ候ハ全ク或ル特別ノ理由アッテ存スルガ為ニ外ナラズト思考致サレ候

又小生ガ以上長々ト書キ連テ候処モ決シテ閣下ニ対シ小生

ノ不平ヲ訴ヘンガ為ニハ無之全ク上記ノ特別ノ理由ナルモ
ノヲ探求闡明セン為ニ外ナラズ候

長春會議ニ於テ日本ノ全權委員ハ我々ニ対スルニ征服者ノ
被征服者ニ対スルノ態度ヲ以テ臨マレ露國ノ利益ハ一切之
ヲ無視シ唯日本ノ利益ノミヲ主張致サレ候之カ為ニ長春會
議ハ露國ニヨリカノ「プレス・リトウスク」ノ講和會議
ヨリモ更ニ屈辱的ノモノトナリ終リ候「プレス」會議ニ
於テハ独逸ハ我カ露國ニ対シ強慾極マル最後通牒ヲ突キ付
ケ申候ヘ共兎ニ角独逸ノ要求セル処ハ少クトモ外見上ハ相
互的條約ノ体裁ヲ整ヘ居候

而シテ日本政府ノ露國ニ対スル現在ノ態度ヲ見ルニ依然ト
シテ長春會議當時ノ態度ヲ改メズ今猶一大主權國家トシテ
ノ露國ヲ全然無視スルノ態度ヲ繼續シ居ラルモノノ如ク
思考致サレ候而シテ最近ノ事例ニ見ルモ此ノ点ハ毫モ疑ヲ
容ルル余地ナキ処ト存候

嘗テ我ガ勞農政府ガ日本政府ニ抗議書ヲ送り日本ノ軍艦ガ
國際慣例ヲ無視シテ擅ニ露國ノ領海内ニ碇泊シツツアルノ
不法ヲ詰リ候際モ日本政府ハ殊更ニ此ノ抗議ヲ默殺シ何等
ノ回答ヲモ免セザルベキ旨ノ記事新聞紙上ニ掲載致サレ候

アリテハ日本政府ハカノ擅ニ自立セル浦潮ノ地方政府ト協
定ヲ結び之ヲ以テ日本ノ西伯利亞ニ於ケル自由行動ヲ弁明
スルヲ得タル次第ニ候ヘ共本年ニ於テハ最早カカル地方政
府ハ其ノ存在ヲ失ヒ西伯利亞ハ露國ニ於ケル唯一ノ政府即
チ「モスコ」政府ノ下ニ統一一致サレ候義ニ付若シ日本ニ
シテ本年モ依然昨年ノ如キ行動ヲ敢テスルニ於テハ國際法
上之ヲ「海賊行為」ト呼ブノ外他ニ名称ナク而シテ天下到
ル処斯カル海賊行為ガ人類ノ同情ヲ買ヒ得ザルハ申ス迄モ
ナキ所ニ有之候

又之ヲ日露兩國ノ關係ヨリ考察致候テモ斯カル行為ガ露國
民ノ間ニ日本ニ対スル深キ怨恨ヲ抱カシムルハ当然ノ事理
ニ有之其ノ結果トシテ今後数十年ニ亘リ日露兩國國民ノ間ニ
ハ如何ナル協定ヲモ締結スルコト不可能ト可相成申候
小生ハ初メテ極東ニ參リ候以來屢々東洋人ノ頗ル神經過敏
ニシテ就中彼等ノ「体面ヲ保タシムル」コトノ最モ大切ナ
ル所以ヲ説カレ申候併シ乍ラ在留外國人ガ恰カモ自國ニ於
ケルカ如ク勝手我儘ヲ働キ居候支那ニ就テハ小生モカカル
議論ノ当レルヲ會得致候ヘ共之ヲ日本ニ対シテ適用セザル
ベカラザル理由ニ至リ候テハ全然之ヲ諒解致シ兼ね候蓋シ

又露領沿海州ニ於ケル漁業權問題ガ本春ノ漁業期以前ニ於
テ果シテ解決ヲ見ルベキヤ否ヤ些カ疑問トナルニ及ビ候テ
ハ日本政府ハ日本ノ漁船ヲシテ日本軍艦ノ保護ノ下ニ露國
領海内ニ自由出漁ヲ為サシムルノ意嚮ヲ有スルカノ如キ半
官的報道ガ屢々新聞紙上ニ伝ヘラレ申候

新聞紙ニ対スル日本政府ノ平素ノ態度ノ如何ナルモノタル
カハ小生之ヲ詳ニシ不申候ヘ共苟シクモ日本政府ニシテ斯
カル半官的報道ニ対シテスラ猶之ヲ否定セザルニ於テハ吾
人ハ新聞ノ伝フル処ヲ以テ真実ナリト思考スルノ外無之儀
ト存候

以上縷陳致候諸事實ニ就テ何故ニ其ノ然ルヤヲ熟考致候時
ハ之ヲ次ノ理由ニ帰シ候以外ニ説明ハツキ不申ト存候即チ
日本政府ノ最モ恐ルル処ハ日本ハ勞農政府ヲ承認セント欲
スル者ニアラズヤトノ嫌疑ヲ列國ヨリ蒙ルコトニシテ此ノ
嫌疑ヲ免カレンガ為ニ殊更ニ勞農政府ニ対シテ心ニモナキ
高圧的態度ヲ以テ臨ミ且ツ恰カモ主權ナキ國家ニ対スルガ
如キ政策ヲ以テ對露問題ヲ処理セントスルガ為ニ外ナラズ
ト被存候又日本政府ハ昨年ト本年トハ西伯利亞ノ形勢多大
ノ懸隔アルノ事實ヲモ忘却シタルモノト被存候蓋シ昨年ニ

日本ハ世界ニ於ケル最大強國ノ一ニ有之何人ト雖モ日本ヲ
對等以下ノモノトシテ取扱フベシトハ到底想像シ得ザルガ
為ニ有之候

一方ニ於テ露國モ亦頗ル東洋の亜細亞的色彩ニ富ム國家
ニ有之候而シテ幾多ノ理由ニヨリ露國コソ（少クトモ日本
以上ニ）其ノ國家的威嚴ニ就テ神經過敏タルベキ權利アル
モノト思考致サレ候日本ハ世界各国ヨリ正式ニ承認サレタ
ル國家タルノミナラズ實ニ國際法規ノ上ニ於テモ最大國ノ
列ニ伍シツツアル堂々タル大國家ニ有之候然ルニ露國ハ最
近ニ至ル迄列強ガカノ反革命的將軍及提督連ノ援助ヲ名ト
シテ其ノ傍若無人ノ活躍ヲ敢テスルノ舞台ト化シ吾人ガ此
ノ苦境ヲ脱却シ得タルハ實ニ最近ノコトニ有之候又今日迄
ニ法律上露國ヲ承認致シ候國家ハ小國ヲ除キ唯独逸一國ノ
ミニ有之候而シテ他方ニ於テ露國ノ領土ハ世界全地積ノ七
分ノ一ヲ占メ其ノ富源ニ至リテハ恐ラク世界中如何ナル國
家ヨリモ豊富ナルベク又人口モ一億五千余万ノ多キヲ算シ
且ツ其ノ陸軍ハ現存ノ如何ナル陸軍ヨリモ強力ナルベシト
被存候然ルニ茲ニ露國ノ領土外ニ幾多ノ白衛軍ナルモノ存
シ彼等ハ事毎ニ露國政府ヲ中傷非難スルニ全力ヲ尽シ露國

ニシテ若シ他国ニ対シ強硬の態度ニ出ヅルニ於テハ彼等ハ直チニ之ヲ捉ヘテ論難攻撃至ラザルナク又若シ露国ニシテ他国ニ対シ協調の態度ヲ以テ臨ムニ於テハ彼等ハ再ビ之ヲ捉ヘテ罵詈謗ヲ逞ウシ「斯クノ如キハ帝政時代ニアツテハ何人モロニダモシ得ザリシ所ナリ」ト咆哮スルヲ常ト致居候

要スルニ労働露国ハ他ノ如何ナル国家ヨリモ更ニ其ノ威信ニツキ神経過敏ニシテ且ツ其ノ「体面ヲ保ツ」ニ戦々兢々タルノ権利アルモノト思考致候換言スレバ国際関係上權利ノ平等ヲ要求スル上ニ於テ露国ハ他ノ如何ナル国家ヨリモ多クノ權利ヲ有スルモノト存候故ニ日本政府ニシテ此ノ点ヲ明確ニ諒解サレザル限り日露ノ協商ハ仮ニ不可能ニ非ズトスルモ甚ダシク困難ナルベキハ明白疑ヲ容レザル所ニ有之候殊ニ今日露国ガ新外交政策ヲトリ一切ノ対外交渉ハ全國民ノ面前ニ於テ公々然ト進行スル状況ノ下ニ於テハ相手國ノ露国ニ対スル侮辱の態度ガ此ノ交渉ニ参加スル個々ノ男女農夫労働者ノ神経ノ上ニ及ボス過敏ナル作用ハ之ヲ度外視シ得ザル所ニ有之候苟クモ露国ニ於ケル國民一般ノ感情ニ通ズル者ハ日露戦争直後ニ於ケル彼等ノ対日感情ト日

本ノ西伯利亞干涉直後ノ今日ニ於ケル彼等ノ対日感情トノ間ニ多大ノ相違アルヲ看過シ得ザルベシト存候

一九〇四年ヨリ一九〇五年ニ亘ル日露ノ戦役ニ於テ露國民ハ幾多ノ艱難ト闘ヒ又恐ルベキ流血ノ慘禍ヲ経験致シ候ニモ拘ラズ當時彼等ハ日本ニ対シ西伯利亞干涉後ノ今日程ノ憤懣ハ之ヲ感シ居ラザリシ事ト確信致候而シテ此ノ憤懣ノ情ハ前記ノ日本政府ノ露国ニ対スル態度ニ因リ日々助長サレツアル次第ニ有之候

今日露國民ハ恐ラク上記ノ諸理由ノ為ト存候ガ仏國ト日本トヲ以テ最モ惡ムベキ敵ト考ヘ居リ之等兩國政府ノ為スルハ恐ラクハソレガ敢テ露国ニ対スル敵對の行為ニアラザル場合ニ於テモ露國民ハ直チニ之ヲ以テ露国ニ対スル新ラシキ敵對行為ニ非ズヤヲ疑フノ有様ニ有之候現ニ今日ニ於テモ此ノ種ノ事柄ハ陸續起リツツアリテ日本政府ガカノ元山ニ於ケル白衛軍ヲ「サガレン」ニ輸送スベク企テツツアリトノ記事一度紙上ニ喧伝セラルルヤ露國民ノ多数ハ直チニ之ヲ目シテ日本ハ再ビ「サガレン」ヲ本拠トシテ其ノ不法干涉ヲ試ムル者ナリトノ臆測ヲ逞ウ致居候

一方ニ於テ露国ハ毫モ自國ヲ以テ戰敗國トハ考ヘ居リ不申

否寧ロ世界ノ露国ニ対スル資本主義の干涉ト戦ヒ之ニ克チ得タル戰勝者トシテ自任シ居ル者ニ有之候露國民ハ自己ノ努力ト犠牲トニヨリ兎ニ角其ノ領土内ニ外國軍隊ヲ駐メシメザルニ至リタルコトニ就テ少ナカラザル誇リヲ感ジ居候從ツテ又夫レダケ日本軍ノ「サガレン」占領ヲ殊更ニ遺憾ニ感ジ居ル次第ニ有之候由來「サガレン」ノ軍事的經濟的価値ノ如何ニ大ナルカハ露國民ノ周知スル処ニ有之從ツテ此ノ一事ヲ以テスルモ如何ニ日本ノ「サガレン」占領ガ「露國ハ赤色旗ノ下ニ統一セラレタリ」トノ露國民ノ満足ノ感ト名誉ノ心トヲ害フコト大ナルカヲ知ルニ足ルコトト存候以上申述候処ヨリ推論致シ候ヘバ日本ガ果シテ如何ナル程度迄之ニ応ジ得ルヤハ別トシ露國側ノ見地ヨリスレバ日露交渉ノ再開ハ唯次ノ諸条件ノ下ニ於テノミ可能タルベキモノニ有之候

第一、交渉手段ノ上ニ於テモ露国ガ日本ト平等ノ權利アル國家タルコトヲ認ムルコト即チ條約ノ形式ニ於ケルト等シク相手方ニ對シテ要求ヲ提出スル上ニ於テ応酬ノ言辞ニ於テ又協約ノ条項ノ按排決定ニ於テ露国ニモ日本ト同等ノ權利アルコトヲ承認スルコト

第二、單ニ通商協約ニ限ラズ通常ノ外交關係ノ開始ヲ含ム一般的條約ノ締結ニ就テモ交渉ヲ行フノ意アルコト

蓋シ之ニ関シテハ露西亞共和國最高機關ノ特別決議ナルモノ有之候「ゼノア」會議ノ時ニ當リ小生ハカノ「ラッパロ」條約トシテ世ニ知ラルル露獨條約ニ就テ説明ヲ試ミ同時ニ全露中央労働委員會ガ爾今人民委員會ハ英露通商條約式ノ半製ノ條約ヲ締結スルコトヲ得ズ今後同委員會ノ調印スベキ條約ハ凡テ「ラッパロ」條約式ノモノタラザルベカラズトノ決議ヲ通過セルノ事實ヲ報告致置候而シテ「ラッパロ」條約ガ英露通商條約ト異ル点ハ(一)當事者双方ガ互ニ其ノ過去ノ要求及債權ヲ拋棄シタルコト(二)當事國ハ互ニ相手國ヲ法律上及事實上承認シタルコトノ二点ニ存シ候

其後ニ於テ露国ハ伊太利トノ間ニ通商條約ヲ締結致候ヘ共此ノ條約ハ以上ニ掲ケ候二要点ヲ欠キタルノ故ヲ以テ全露労働中央執行委員會ノ批准ヲ得ル能ハズ遂ニ不成立ニ終リタルノ事例モ有之候之ニ因テ見レバ茲ニ掲ケ候第二ノ条件ハ露国トシテハ必要欠クベカラザル条件タルコトハ明カナリト存候

第三、日本軍ノ北「サガレン」撤兵ニ関シ相當ノ時期ヲ明

確ニ定ムルコト

長春會議ノ決裂致候モ実ニ此ノ問題ノ為ニ有之候ニ付此ノ条件ヲ明定シ置クコトノ最モ必要ナルハ申ス迄モナキ義ニ候

小生ニ対スル日本政府ノ全然特別ノ而カモ歴史上未ダ其ノ例ナキ取扱ノ結果トシテ小生ハ渡日以来今日迄約一ヶ月半ノ久シキニ亘リ露国及殊ニ我政府トノ通信ヲ遮断致サレ候為メ現在露国民カ日本ニ対シ果シテ如何ナル感情ヲ有シツアルカニ就テ正確ナル判断ハ之ヲ下シ兼ね候ヘ共上記ノ日本政府ノ露国ニ対スル態度ヨリ考察シテ今日露国民ノ対日感情ガ著シク緩和サレタルモノトハ思考致サレズ候去リ乍ラ上ニ掲ケ候日露交渉再開ノ諸前提条件ナルモノハ小生カ露国政府ノ従来ノ決議ト及ヒ露国民ニ関スル小生ノ智識トニ基キ相認メ候モノニ付之ニ就テハ今日露国ノ意嚮ニ變化ヲ来シタリトハ信ゼラレ不申候

此ノ点ニ関スル日本側ノ希望スル諸条件ガ果シテ如何ナルモノナリヤハ小生ノ知り得ザル処ニ有之候蓋シ小生ノ貴国ニ来遊以来日本ノ国民及新聞ノ大部分ハ唯速カニ法律上露国ヲ承認スベク又遲滞ナク日露交渉ヲ再開スベシト唱フル

者ノ一方ノミガ其ノ全責任ヲ負フベシトナスハ小生ノ頗ル奇異ニ感ズル処ニ有之候ヘ合併シ乍ラ小生ハ本件ニ関シテハ先例トナルベキモノハ一頗ル縁ノ遠キ先例ナガラ「ゼノア」會議ニ於テ露国ノ採リタル態度唯一ツアルノミト存シ候「ゼノア」會議ニ於テ我カ露国ノ相手方ハ吾人ニ対シ彼等ノ損害ヲ賠償スベク要求致候之ニ対シ露国ハ若シ彼等ニシテ露国ヨリノ反対要求ヲモ亦之ヲ認ムルニ於テハ露国ハ主義ニ於テ喜ンデ彼等ノ要求ニ応ズベキ旨ヲ回答シタル次第ニ有之候勿論此ノ如キハ将来ノ条約ハ凡テ「ラッパロ」条約ノ如ク双方ノ要求ヲ拋棄スルモノタルベシトノ前記全露勞農中央執行委員會ノ決議ニ反スル処ニ有之候ヘ共露国ハ特ニ此ノ点迄ノ讓歩ヲナシタル次第ニ有之候

小生個人ノ意見トシテハ「ラッパロ」条約ノ如キ条約ヲ以テ外交上最モ事理ニ適スルモノト確信罷在候何トナレバ斯カル条約ハ其ノ締結ト共ニ兩当事国民ノ相互關係ハ破壊ヨリ創造ニ終了ヨリ開始ニ向フガ為ニ候併シ乍ラ若シ之ニ反シテ兩当事国力互ニ忌ムベキ商業上ノ利益問題ノ為ニ今ヤ將ニ吾人ノ腦裡ヨリ消滅セントシツツアル彼ノ戰時気分ヲ再燃セシメ其ノ意気込ヲ以テ樽俎ノ間ニ相見ユルニ於テハ

ノミニシテ其ノ他ニ関シテハ何等説ク処ナキヲ以テニ候併シ乍ラ唯彼ノ尼港事件ナルモノニ関シテハ多クノ新聞紙ガ日々多大ノ紙面ヲ之ニ割キ居リ候關係上茲ニ一言申述置度ト存候而シテ長春會議ニ於テ露国ノ全權委員ハ此ノ問題ニ付キ直チニ審議ヲ開始スルコトヲ拒絶シタルモノニ非ザルノ一事ハ殊ニ閣下ノ御注意ヲ乞ヒタキ点ニ有之候否ナ此ノ問題ノ審議ヲ欲セザリシハ実ニ日本ノ全權委員ニ有之彼等ハ他ノ問題ニ就テハ急速ノ審議ヲ主張シツツ此ノ問題ニ限り如何ナル理由ノアリテカ之ハ他日日本政府ノ正式ニ承認セル露国政府ノ出現ヲ待ツテ交渉ヲ開始スベシト唱ヘ同時ニ尼港事件ト「サガレン」占領トノ間ニ密接不離ノ關係アルヲ執拗ニ主張致候換言スレハ尼港事件ニ関シテハ日本委員ハ上記ノ主權國トシテノ威信云々ノ理由ニヨリ露國トシテ到底承諾シ難キ主張ヲ固守シ以テ其ノ審議討論ヲ回避シタル者ニ有之候

斯クノ如ク尼港問題ハ遂ニ長春會議ノ議ニ上ラザリシ結果露國ニ於テモ本問題ニ関シテハ未ダ何等ノ決定ヲ見ザル次第ニ有之候

抑モ当事者双方ニヨッテ審議調査サルベキ事件ニ対シ当事

關係兩國ノ友誼的關係ハ到底樹立シ得ザルノ理ト被存候小生ハ茲ニ斯カル冗長ノ書翰ヲ差シ出シ候事ニ関シ幾重ニモ御詫申上候ト同時ニ此ノ拙信ニヨリ閣下ノ御希望ヲ滿タシ且ツ日露通商ノ再開ニ関スル露國側ノ所見ト信ズル処ヲ閣下ノ前ニ明ニシ得タランコトヲ祈居候

親愛ナル後藤子爵、小生ハ仮令今後ニ於テ日露兩國ノ關係カ如何ナル變転ヲ見候テモ小生個人ノ閣下ニ対スル深甚ナル敬意ト衷心ヨリノ感謝トハ常ニ不變ナルコトヲ茲ニ確言シテ擲筆致候 敬具

一九二三年三月七日熱海ニ於テ

ア・ヨッフエ (自署)

親愛ナル後藤子爵閣下

二二七 三月十七日

日露協會会頭後藤新平ヨリ
ヨッフエ宛

日露關係ニ関シ見解ヲ呈示シタルヨッフエノ

書翰ニ対シ回答ノ件

一千九百二十三年三月七日熱海発ノ尊書正ニ落手早速翻訳セシメ拝読仕候

此将来ノ日露親善ノ途ヲ講ゼン為メ御床中推シテ御執筆ニ

努メラレ数干言ノ長文ニ対シ小生衷心ヨリ敬意ヲ表シ反覆
聞了致候

四日頃波蘭駐在川上公使ト新聞記者ノ会見録トシテ伝フル
モノ開示セラレタル一段ハ幸ニ川上公使ト会見ノ機会ニ際
シソレトナク相尋ネタル処同公使ハ曾テ左様ノ所見ヲ有セ
ザルノミナラズ内外新聞記者イヅレニモ左様ノ言明致シタ
ルコト無之何新聞ノ記事ナルカ不審ノ至ナリト申居候是ハ
全然無根ノ記事ナルコト小生ニ於テ証言ノ責ニ任シ得ルト
信ジ候

其他各項中上海横浜ニ於ケル俗吏ノ所行ハ全ク政府ノ意思
ニ無之小生ニ於テモ頗ル遺憾ナル次第ト存居候

長春北京ニ関スル不審ノ点ハ政府側ニ一応相尋ネ見候上拝
答致スベキカト存ズル廉ニ有之候得共此際ハ小生ノ心得迄
ニ止メ目下小生ノ立場ニテハ是等ニ関シ政府側ニ一々質問
ヲ試ミザル方ガ寧ロ得策ト存ジ候故差控置キ候

露国ノ真相ト国民ノ感情ニ関シ御開示ノ諸点ハ平生小生ノ
所信ヲ明確ニ致シタルモノ少カラズ感謝ノ至ニ不堪候

就中結文ノ三要項ハ露国側ノ見地ヨリ明確ニ御開示被下候
事ハ幸甚ノ至ニ奉存候相互ノ希望ハ前年来ノ雲霧ヲ払ヒテ

シ」問題(貴翰末文ノ第三)ヲ解決スルニアリ

抑貴下養病ノ為来遊ハ元来純乎タル御互ノ友情ニ出ヅルモ
ノナレドモ已ニ日本ニ於テ御承知ノ如ク目下群賢衆愚ノ間
ニ可ナリ問題ト相成リ

第一、新露国ノ政情大ニ日本国民間ノ注意ヲ引キ随テ官民
間ニ之カ諒解ヲ進メタル事

第二、赤化宣伝恐怖病ヲ一掃シタル事

但赤化宣伝恐怖アリテ露国側ヨリ之ニ費用ヲ得ント
シ又得タリトテ狂奔スルモノアル間ハ両国民ノ接近
ヲ妨グルコト頗ル大ナリ貴下ノ来遊ハ双方ニ此弊ヲ
去リ一層親善ノ途ヲ開キ得タルヲ疑ハズ

第三、間接ニ欧露並ニ西伯利亚ニ於ケル露国人ト残留日本
人ト接近協和ニ資シタル処大ナル事

此等ノ諸影響ハ目下数字のニハ表明シ能ハザル功德アリシ
ハ将来益明カナルベク偶々貴下ノ養病ニハ政談俗説等ノ煩
累ヲ纏フカノ嫌アリテ御氣ノ毒ノ至リニ察セラルフシナ
キニ非ザルモ日本官民間ノ意向ヲ明ニト定スルコトヲ得ル
ノ端ヲ開キタルヲ以テ互ニ其犠牲ヲ払フコトハ公人ノ面目
トヤ申スベキカ世ニ偉人ノ跡ハ山河ニ印スト承リ居候貴下

今後ノ晴天ヲ迎フルニアルガ故ニ主ナル研究ハ此点ニ存ス
ル次第ト奉存候

右三要項ニ対シテハ政府議會ノ意向並民心ノ帰趨等ニ関シ
推考熟慮ヲ要シ目下實際ノ進行ニ故障ノ有無モ攻究ノ上貴
下ト隔意ナキ意見ノ交換ヲ了シ度奉存居候

折柄老母易簀ノ事アリ不本意ナガラ拝答延引致居候罪謝ス
ル処ニ候其節ハ弔慰ノ貴翰並花環ノ弔贈等御贈付ヲ忝ウシ
地下ノ老母モ感泣永眠致事ト存シ同時ニ小生ノ光栄ヲ謝ス
ル処ニ御座候

又手翰末三問題ニ関シ今日何ノ束縛モナク自由ニ誠意アル
所見ヲ交換スルコトハ単ニ日露兩國間ニ止マラズ東洋平和
政策延イテ世界平和政策ノ一大柱石ヲ建立スルニ至ルベキ
理想ヲ根拠トシ自然ニ無上公平ノ見地ニ於テ事實ニ省ミ意
思疎通ヲ見ルノ機会ヲ得タルハ実ニ人生ノ一大快事ト存候
サレバ日露間ニ横ハル故障ヲ去ルハ実ニ東洋及世界平和ノ
大策ヲ定ムル第一歩タルヲ以テ固ヨリ歴史ヲ無視スベカラ
ザルト同時ニ從來ノ行懸ニ囚ハレザル見地ニ立ツノ要アリ
此日露兩國間ニ存スル歴史の暗影ヲ一掃スルガ為メニハ日本
国民ノ脳裡ニ深ク浸潤固着セル宿昔ノ恨事タル「サガレ

ノ足跡モ山河ニ印スルモノアリシト存候此行必ズシモ苦痛
ニシテ無益ナルモノニアラザルハ夙ニ御諒察被下居事ト奉
存候サレバ貴下ノ来遊ハ唯養病ノミニ止マルモ可ナリ更ニ
進ンデ両国民ノ諒解ヲ媒シ又東洋平和政策ノ発端トナルモ
ノアレバ更ニ可ナリ更ニ更ニ世界平和政策ニ貢獻スル処ア
レバ大ニ可ナリ豈啻ニ来ルベキ日露協商ノ為ノミニ其功ヲ
局スルモノナランヤ故ニ養病ノ傍天下ノ大政ヲ説クモ何ノ
妨カアラン今日ヨリ市会開催ニ付二十五、六日後小生熱海
ニ静養致スベキ心算ニ候其節緩々御面話ニ尽ス可ク候
終リニ臨ミ重ネテ此ニ敬意ヲ表シ候 以上

二三八 三月二十一日

松平欧米局長ヨリ
後藤新平宛

ヨッフエ呈示ノ日露交渉再開前提条件ニ対ス

ル日本政府ノ意見通報ノ件

三月七日付ヨッフエ氏書翰所載日露會議開催ニ関スル前提
条件即チ

一、討議ニ際シテモ亦条文ノ体裁ニ於テモ日露兩國間平等
ノ權利ヲ認ムルコト

二、単ニ通商ニ関スル協約ニ非ズシテ正式外交関係ノ復旧

ヲ含ム完全ナル条約ノ締結ヲ目的トスルコト即チ法律上ノ承認ヲ為スト共ニ一切過去ノ要求ヲ相互的ニ拋棄スルコト

三、薩哈噠北半ヨリ日本軍ノ撤退時期ヲ定ムルコト
ニ対スル意見左ノ通

一、第一条件ニ対シテハ同条件ガ単ニ主義トシテ日露兩國對等ノ立場ニ於テ商議スベシトノ意味ナラバ別ニ差支ナキモ之ニ依リ我方ノ有スル旧条約上ノ既得權其ノ他正當ノ權利ヲモ拋棄セシムトスルノ意ヲ包含セルニ於テハ到底承諾スルヲ得ズ又目下兩國ノ国情及法制著シク相違スル關係上全然相互的形式ヲ採ルニ於テハ我方ハ實質上露國側ニ比シ不利ナル結果ヲ生ズルコトナシトセズ從テ此ノ如キ場合ニハ必ズシモ一律ノ文句ヲ用ユルコト能ハザルコトアリ得ベク此種具體的問題ニ付テハ各個ノ場合ニ就キ和衷審議スルヲ要ス

二、第二条件ニ対シテハ事實上ノ承認ナラバ格別、法律上ノ承認ヲ得ムトスルニハ尠クトモ(イ)尼港事件ノ解決(ロ)國際義務ノ履行等必要ニシテ前記事項ニ付確實ナル了解ヲ得ルニ於テハ勞農政府ニ法律上ノ承認ヲ与フルコ

トヲ考量スルモ差支ナカルベシ尚「ラバロ」条約ノ如ク双方ノ要求全部ノ拋棄ハ日露關係ニ適用スベキ理由及基礎ナシ

三、第三条件ニ対シテハ薩哈噠州駐兵ハ沿海州ヘノ出兵ト全然其ノ起源及性質ヲ異ニシ尼港事件解決ノ為ノ保障占領ナルヲ以テ同事件ノ解決ヲ見ザレバ撤兵スルコト能ハザルハ勿論ナルニ依リ成ルベク速ニ之ガ解決ニ關シ確實ナル了解ヲ得以テ撤兵ノ期日ヲ決定スルコト然ルベシ

註 本件日本政府意見ハ加藤總理大臣ノ命ニヨリ文書ニ認メタル上松平欧米局長ヨリ後藤子爵ニ手交セラレタルモノナリ

二二九 三月二十七日

滝川神戸商業會議所會頭ヨリ
加藤内閣總理大臣宛

日露貿易ノ復活對策ノ樹立ニ關シ陳情ノ件

日露貿易對策樹立ニ關スル陳情書

日露兩國ハ其地理の關係ニ於テ將又經濟の關係ニ於テ互ニ相倚リ相援クベキ地位ニアリ然ルニ近來國交日ニ疎隔シ國民ノ親交亦旧ノ如クナラズ從テ在留ノ邦人悉ク經濟の窮境ニ陥リ何レモ引揚グルノ已ムナキ狀態ニ至レリ如斯ハ兩國

民ノ福祉ヲ齎ラス所以ニ非ザルノミナラズ兩國間ノ通商關係ヲ杜絶セシムルガ如キハ実ニ吾カ國策ヲ滅却セシムルモノナルヲ以テ旧臘末本所議員總會ノ決議ニ依リ兩國通商條約締結ノ促進方ヲ陳情シタルモ今日尚ホ未ダ其實現ヲ見ルニ至ラザルノミナラズ爾來却テ反對ニ益々惡化ノ傾向ヲ見ルニ至レリ今ヤ露國ニアリテハ輸入禁止令ヲ布キ其官憲ハ本年一月中旬以降「クロム」鉄、皮革製品其他多數種ノ貨物ノ極東領域内ヘ輸入スルヲ絶對ニ禁止シ其他ノ品目ニ對シテハ野菜類一布度ニ付八拾錢乃至壹圓五拾錢果實類一布度ニ付四圓ト云フガ如キ高率ナル輸入税ヲ課シ甲ハ二倍半乙ハ三倍ノ昂騰ヲ示シ其他何レモ然ル所ニシテ實ニ禁止の課税ト称スルモ何等不当ニ非ザル所ナリ而シテ更ニ浦潮税

關ノ許可ナキ輸出入貨物ノ陸揚ヲ許サザル旨ヲ發表シ又旅券ニ無査証ノ内外人ノ上陸ヲ禁ジ自然無條約國タル本邦人ノ同地上陸ヲ全然不可能ナラシメタリ斯クノ如クニシテ今ヤ兩國間ノ貿易通商ハ全ク杜絶ノ現況ヲ見ルニ至リ兩國ノ親善亦容易ニ期シ難キニ至レルハ深ク遺憾トセザルヲ得ザル所ナリ而シテ只此狀態ノ儘ニ推移ストセバ對露貿易ノ復活ハ前途尚ホ遼遠ニシテ洵ニ當業者ノ危機ナリト云フヲ憚

ラズ徒ニ等閑ニ付スルニ於テハ東露無忌蔵ノ天産ニ對スル利權ハ遂ニ他ニ委スルニ至ルベク南滿内蒙ニ於ケル帝國特殊ノ關係モ亦脅カサルルニ至ルベキヲ憂フ政府ハ此際速ニ露國ニ對スル經濟の國策ヲ樹立シ對露貿易業者ノ危急ヲ救フト共ニ兩國親善復旧ノ為ニ偏ニ敏速ノ所置ヲ講ゼラレンコトヲ茲ニ本所議員總會一致ノ決議ニ依リ陳情候也
大正十二年三月二十七日

神戸商業會議所

會頭 滝川 儀作(印)

内閣總理大臣男爵 加藤 友三郎閣下

二四〇 三月二十九日

後藤日露協會會頭ヨリ
ヨッフエ宛

日露交渉再開ノ前提トシテ呈セラレタル三

条件ニ關シ質疑提出ノ件

貴下來論末文ノ三条件ハ更ニ日露協商ヲ開クノ基礎トスルコト政府ニ於テ絶對的ノ異議ナカルベシト思考スレドモ該三条件ヲ提案スル動機ト之カ解釈ニ就テハ相互ノ間ニ若干ノ距離ヲ免レザル点アルベシ是ハ固ヨリ和衷審議ノ上自ラ妥協ヲ得ルノ途アルヘシ右三条件ニ就テ余ハ日本政府ノ現

当局者ノ意ノ在ル処ヲ想察シテ此ニ余ハ貴下ト意見ノ交換ヲナシタル上政府当局ニ内交渉ヲ試ムルコト得策ナリト思慮シタルヲ以テ左ノ各条件ニ就テ質疑ヲ試ムヘシ

第一、双方ノ平等ハ固ヨリ主義ニ於テ可ナリト雖我國ハ日露兩國民間ノ国交復旧トシテ之ヲ認メ貴下ハ新興國ノ見地ニ立チ一切既往ヲ拋棄セントスル処ニ彼我意見ニ距離ヲ生スルニ非ザルカ

旧条約ノ既得權其他正当ノ權利ヲ拋棄シテ新ニ条約案件ヲ定ムルコトニ同意ヲ表スルハ困難ナラン之ニ反シテ旧条約等ヲ尊重シ改正ヲ加ヘテ新条約案件ヲ議定スル意義ニ於テナラバ討議ニモ又ハ条文ノ体裁ニモ平等ノ權利ヲ認ムルコト何ノ異議ナキ処ナルベシ此点貴下ノ見解如何ニヤ

又目下兩國ノ国情及法制ニ著シク相違アル關係上全然相互的形式ヲ採ルコトニ拘泥シ一律ニ条文ヲ相互ニ並列スルコトハ却テ意外ノ利害關係ヲ生ズルコトアルベシトノ憂慮ナキニ非ザルベシ是等ハ審議ノ上事情ヲ悉クシテ書キ分ケ双方不利ヲ生ゼザル様ニ為スコトトセバ此意義ニ於テ平等主義ヲ認ムルコト故障ナカルベシ

第二、今日ニ於テハ貴下來遊以來日露接近ニ関スル民意ノ

ニ於テモ頗ル躊躇スル処アルベキカ然レドモ貴下ノ來遊ハ官民間ニ一大刺激ヲ与ヘ殊ニ民心ニ有力ノ好影響ヲ与ヘタルコトハ在野党ノ建議案ニ於テモ著明ニシテ法律の承認問題ガ仮令少数ニテ否決セラルルモ其ノ実有力ナル効果アルコトハ明カナリ是レ我國民ノ對露感情一變化ト見ルヲ得ベシ但シ現在ノ日本政府ハ之ヲ内政ノ必要ヨリスルモ先ヅ無条件ニ勞農政府ヲ承認シ同時ニ過去ニ於ケル一切ノ要求ヲ相互的ニ拋棄スルガ如キハ到底之ヲ為スコトヲ得ザル立場ニ在リト思考ス

今日ニ於テ

(一) 尼港事件ノ解決ヲナサズ

(二) 露國ガ國際的義務ノ履行ヲ為スノ誠意ヲ示サザルニ拘ハラズ無条件ニ勞農政府ヲ承認スルガ如キハ到底日本國民ノ理解ヲ得ルコト能ハズシテ内閣ノ更迭ヲ來スニ至ルベケレハナリ此点ニ関シテハ露國ハ宜シク日本國民ノ感情ヲ察シテ日本政府ヲシテ勞農政府ヲ承認セシムルモ國民ノ反感ヲ挑発スルコトナキ様賢明ナル方法ヲ執ルノ必要アルベシ日本人ノ眼ヨリ見レバ「ラッパロ」条約ハ生レ代リタル露國ト生レ代リタル獨逸トノ間ニ全然新シキ條約ガ締結サレタ

進歩ヲ促シタルヨリ政府モ大ニ動キタル模様ナリ故ニ「ド・ファクト」ヨリ「ド・ジュール」ニ入ルコト困難ナラザルベシ然レドモ

(一) 尼港問題ノ解決

(二) 國際義務ノ履行

ガ必要ナリトノ主張ヲ見ルベキコト疑ヒ無シ此了解ヲ得バ法律上ノ承認ヲ考量スルニ差支ナカルベシ

但シ「ラッパロ」条約ト同一ニ双方全部ノ旧關係拋棄ハ日露關係ニ適用スルコト能ハサルベシ何トナレバ露獨ハ共ニ革命ノ新興國ナルヲ以テ其基礎ヲ一ニスル処アリ日本ハ露國ニ對シテ旧交回復テウ意義ヲ有ス是ハ一面ニハ双方有益ナル事情ナリトス此条件ニ関シテハ自分ニ於テ別ニ考慮スル処アリ後ニ開示スベシ

第三、撤兵期ノ声明ハ可能ナルモ尼港事件ノ解決ヲ見ザレバ撤兵スルコト能ハズトノ主張ヲ免レザルベシ勿論第二条件実行ニ決シタル曉ハ撤兵ノ期ヲ定ムルコト自然容易ナルベシ

之ヲ要スルニ貴下ノ書翰中ニ述ベラレタル如ク英仏米ノ諸國ニ先ンジテ勞農政府ヲ法律的ニ承認セシムル事ハ我政府

ルモノトシテ当事者双方カ互ニ過去ノ要求ヲ相互ニ放棄セル氣分ヲ十分理解シ得ベキナランモ日本人トシテハ当事者ノ一方タル露國ガ其國內ノ政治ガ君主政治ヨリ勞農政治ニ變更シタリトテ日露兩國ノ過去ニ於ケル要求ヲ全然拋棄スベキモノナリトハ到底理解シ能ハサル事情ナリ此消息ハ特ニ貴下ノ諒察ヲ請フヘキ処ナリトス

余ハ過刻別ニ考慮シタル処ヲ開陳スヘシト申置タル点ニ及ブベシ抑「サガレン」駐兵ハ日本國民間ニ頗ル不人望ナル行動ナリ其ノ出兵ノ当初ニ於テ有力ナル反對モアリタルガ最近ニ於テ益々之ヲ批難スルモノヲ増加セリ然レドモ尚比較的其声ノ大ナラザル所以ハ日本國民ハ元來「サガレン」ヲ以テ日本國ノ領土ナリト思惟シ居タリ然レドモ一千八百七十五年ノ條約ニヨリ日本ハ之ヲ千島列島ト交換セリ當時露國ノ強大ナリシ為屈伏セル不名誉ナル條約ヲ締結セルモノト思惟シ居レルガ故ニ尼港ノ保障占領ニ不満アルモノモ暫時沈黙セル内情ナリ

是實ニ年來潜伏セル日露間ノ禍根ニシテ利害ヨリモ感情ノ問題ナリ更ニ最近露國ガ米國人ニ石油坑区ヲ許可シ米國人ノ侵入ヲ媒介スルニ至テハ日本人ハ露國ニ對シ如何ニモ不

平ニ堪ヘザル処ナリ此点ヲ察シテ更ニ賢明ナル手段ヲ執ラルルニ於テハ兩國間ノ合理的の根本解決ヲ以テ世界ノ平和ニ貢獻スル処アルニ至ルヘシ別紙「サガレン」ノ略史ハ貴下ノ已ニ熟知セラルル処ナランガ御一覽ノ上貴下ノ賢慮ヲ煩ハサレン事ヲ望ム

(別紙)

サガレンノ略史

北樺太島ノ割譲若クハ売却ヲ要求スルニ当リテ主

張スベキ史学上ノ論拠

其論拠ニ二アリ

一ハ樺太島ノ夙ニ我邦ノ勢力範圍ニ屬シ明治八年(一八七五)之ヲ千島列島ト交換セルハ露国ガ暴力ヲ以テ圧迫セルガ為止ムコトヲ得ズ採リタル処置ナルコト

二ハ黒竜江地方及樺太島ノ侵略ハ極端ナル帝國主義ヲ抱懷セシ露国前政府ノ暴力政策ノ結果ナルコト

先ヅ第一ノ論拠ヲ詳説セン

第十三世紀ノ末僧日蓮ノ高足日持樺太島ヲ經由シテ沿海州ニ入ル是レ我國民ノ此島ヲ探險セシ証アル初ナリ

第十六世紀ノ末期ニ當リ豊臣秀吉、徳川家康相繼デ国内ヲ

統一シ松前氏ニ命ジテ北薩一円ノ地ヲ世襲私領セシム是レ我國ノ主權者ガ此島ノ領有ヲ公認シタル初ナリ第十七世紀ノ末松前藩「松前島郷帳」ヲ幕府ニ上ル中ニ「カラト」ノ名アリ即チ樺太島ナリ第十八世紀ノ初メ松前藩幕府ノ命ヲ奉ジテ北地ノ地図ヲ献ズ樺太ヲ「カラトシマ」ト号シ之ヲ島嶼トス露国人「ネベルスコイ」ガ其島嶼ナルコトヲ発見セルニ先ヅコト百四十八年ナリ

千七百八十六年幕府最上徳内ヲ樺太ニ遣シテ之ヲ踏査セシム後屢次幕吏派遣ノコトアリ千八百九十年間宮林蔵幕命ヲ奉ジ樺太ヲ探險ス其目的露国ノ境界ノ事情ヲ知ルニアリシカドモ樺太ノ島嶼ニシテ其境界ヲ看出スベキニアラザルヲ知ルニ及ビ対岸黒竜江沿岸ノ地ニ渡リ滿州官吏ノ出張所タル「デレン」ニ到リテ帰レリ是レ露国人力樺太ノ島嶼ナルコトヲ発見セルニ先ヅコト四十年ナリ幕府其復命ヲ得テ全島ヲ北蝦夷地ト命名セリ

千八百五十三年露国使節「ブチャーチン」長崎ニ来リテ国境ヲ議セシヨリ兩國ノ間屢次其議ヲ重ネ我ハ大ニ讓歩シテ五十度説ヲ提出セント雖モ彼ハ全島ノ掩有ヲ希望シテ止マヌ已ムナク雜居ヲ約シテ以テ王政維新ニ及ベリ

由主義ノ仮面ヲ被リテ前政府ノ侵略主義ヲ続行スルモノト謂ヒツベシ

元来黒竜江地方ハ清国ノ領土ナリ其政府長髮賊ノ乱ニ苦シミ此方面ノ防備ヲ怠レルニ乗ジ暴力ヲ以テ之ヲ強奪シ其扞衛トシテ我ノ勢力範圍タリシ樺太島ヲ掩有スルニ至リシナリ畢竟前政府ノ罪惡ノ遺物タルニ外ナラズ當時露国外務大臣「ネッセルロード」ハ東部西比利亞總督「ムラビヨフ」ノ暴力政策ニ反対シ此ノ如キ手段ヲ以テ他国ノ領土ヲ強奪スルトキハ終ニ事端ヲ惹起スルニ至ラントテ二人各々党派ヲ結ビ廟堂ニ相争ヒシト伝フ以テ其ノ正当ノ手段ヲ以テ掩有セルモノニアラザルコトヲ知ルベシ勞農政府タルモノ宜シク前非ヲ悔イ適當ノ処置ヲ採リテ以テ其ノ公明正大ヲ証明スベシ、庶幾クハ列国ノ同情ヲモ得テ露国新政府承認ノ期ヲ進メン

註 右ハ三月二十九日及同三十日ノ熱海会談ノ際後藤子爵ガヨッフェ氏ニ対シ為シタル談話ノ要旨ヲ記載シテ同氏ニ交付シタル覚書ナリ

二四一 三月二十九日

ヨッフエヨリ
後藤日露協定会頭宛

後藤子爵ノ提出セル質疑ニ対スル回答ノ件

覚書(註)

後藤子爵ノ質問ニ対スル「ヨッフエ」氏ノ答弁

一、露国革命ハ其政治的及經濟的結果ノ外外交的ノ意味ニ於テモ亦國際的ノモノナリキ蓋シ勞農政府ハアラユル秘密外交ヲ排斥シ且數多ノ国家ノ関与シタル有ラユル秘密條約ヲ公表シ之カ為是等ノ諸国家ニ対シ旧来ノ政策ヲ踏襲スルコト不可能トナリタレバナリ同時ニ露国ノ新政府ハ「ツァー」時代ノ政府ノ締結シタル條約ノ無効ヲモ宣言シタリ玆ヲ以テ法律の見地ヨリスレバ現在ノ露国政府ヲ承認スル各個ノ外国ノ宣言ノミニテハ抑モ不十分ナリト言フベシ蓋シ斯クノ如キ宣言アリタリトスルモ当事国ハ相互ニ何等ノ條約ヲ有セザルモノナレバナリ故ニ予ノ意見ニ由レバ列国ガ露国ト條約ヲ締結シ而モ其結果トシテ自ラ露国ノ承認ヲ産出スルガ如キ條約ヲ締結スルノ方途ニ出ヅルコト必要ナラン

二、露国ニ於テ外交ニ関スル立法ノ方面ニハ唯一ノ規定アルノミ即チ露国外交官吏ノ大使公使代理公使等ノ如キ階級ノ區別ヲ廃止シ全權代表ナル唯一ノ称呼ヲ採用シタル

負債ハ毫モ露国民自身ノ利益ヲ齎サズシテ単ニ戰爭ノ利益トナリシニ過ギズ加之露国ハ干涉戰ニ由リテ莫大ノ損害ヲ蒙リタルヲ以テ露国政府ハ戰時負債ニ就キ責任ヲ負フ必要ナシトノ見地ニ立テリ然レドモ戰前ノ負債ニ関シテハ露国ノ代表者ハ「ゼノア」ニ於テ之ヲ承認スルノ意アルヲ以テシタリ但シ連合國ニ対スル露国ノ要求モ亦承認セラルベシトノ相互主義ヲ以テ条件トス即チ露国ハ全然不法ナル干涉ニ由リテ露国々民ニ与ヘタル損害ノ賠償ヲ要求スルモノナリ露国政府ハ革命及新規ノ処置——國有、徵發ノ如キ——ニヨリ露国内ノ外国人ノ蒙リタル損害ニ付キテ最初「ゼノア」會議ノ當時ニハ露国ハ是等ノ損害ヲ補償スルノ義務ナシトノ見地ヲ主張シタリ蓋シ總テノ外国人ハ國際法ニ由リ其滞在地ノ國法ニ服從セザルベカラザレバナリ其後露国政府ハ「ヘーグ」ノ會議ニ於テ何等カノ方法ニ由リ補償スルコトニ決心シタリ唯是レ革命後行ハレタル大規模ナル經濟的施設ノ結果多クノ場合ニ於テ現物ノ返還最早不可能トナリタレバナリ日本ノ要求ハ其金額比較の僅少ニシテ總テ他ノ諸國ニ先ヅル勞農政府ノ承認ノ代償トシテ例外的ニ支弁セラレ得ザル

コト是ナリ然レドモ此規定スラモ「ラパロ」條約後ハ露獨ノ外交關係ニ就キ遵守セラレズ独逸政府ノ希望ニ由リ伯林ニ駐在スル露国ノ全權代表モ莫斯科ニ駐在スル独逸ノ代表者ト同様ニ大使ト稱スルコトトセリ予ガ伯林ニ駐在中ハ之ト異ナリ余ハ全權代表ノ称呼ヲ有シタリシモ官報ニテ「大使ノ權限ヲ有スル」旨布告セラレタリ

露国ノ外交官ハ(宮中ノ御招待ニ応ズル等)君主制ノ諸國ニ於テ正ニ他ノ國ノ外交官ト同様ノ態度ニ出ヅルモ露國ノ外交官ニ対シテモ他ノ諸強國ノ代表者ニ対スルト同

一ノ待遇ニ出デシコトヲ要求ス

三、対外債務ノ承認問題ハ「ゼノア」會議當時露國側ニ於テハ戰時負債ト他ノ負債トノ間ニ區別ヲナスノ意向ナリシナリ即チ勞農露國ハ次ノ考慮ヨリ戰時負債ヲ承認セント欲セザルモノナリ即チ戰時債務ハ共同ノ目的共同ノ事業ニ対スル投資ノ一部ナリ加フルニ露國ハ本戰役中莫大ナル黄金ト人命トヲ犠牲ニ供シタリ恐ラク其額ハ戰時負債ノ總額ヨリモ多額ナラン而カシテ連合諸國ハ戰利品ヲ相互間ニ分配シタルニ拘ラズ露國ハ其ノ同盟者ヨリ約束セラレタル物モ獲得セザリシナリ其他露國ノ總テノ戰時

ニアラザレドモ而モ我政府ハ之ヲ以テ他ノ諸強國ヨリ先例トシテ解釈セラルルコトヲ顧慮シ之ヲ拒絶スルナラン革命ノ処置ニ依ル日本人ノ損害ハ極メテ僅少ナラザルヲ得ザリシナルベシ蓋シ是等ノ立法ハ極東共和國ニ施行セラレザリシナレバナリ

「ニコライエフスク」事件ハ露國ニ取リテモ日本ト同様威信問題ナリ此尼港事件ニ就キ孰レノ当事者ニ責任アリヤノ問題ヲ離レテ露國ハ兎モ角有罪者ヲ裁判所ノ手ニ由リ処罰シ且死刑ハ既ニ即時ニ執行セラレタリ

然レドモ本件ハ元來干涉戰爭中ノ一挿話ニ外ナラザルモノナリ日本ノ軍隊ハ西比利亞ニ於テ村落ヲ燒棄シ人ヲ殺傷シ掠奪スル等一層ノ非行ヲ敢テシタリ殺傷サレタル平和ナル露人ノ數ハ尼港ニ於テ殺傷サレタル平和ナル日本人ノ數ヨリ恐ラク一層多數ナラン更ニ之ニ加フルニ日本ノ軍隊ハ露國側ニテ米國人ヨリ購入シ浦塩ニ堆積シタル貯藏品ヲ搬出シ去リタリ玆ヲ以テ余ハ双方ニテ寧ロ兩國民將來ノ親善關係ヲ考慮シ過去ニ拘泥セザルコトヲ以テ賢明ナリト思考ス

余ノ考フル所ニ由レバ「ラパロ」條約ハ理想的ノ條約ナ

リ若夫レ斯克ノ如キ条約ハ独逸カ新規ニ興リタル国家ナルガ故ニノミ成立スルコトヲ得タリト称スルモノアラバ如此見解ハ過リナリト云フベシ独逸ハ共和政体トナリタルモ而モ内部ノ構造ニ於テハ依然トシテ旧態ヲ存シ最早帝国ト称セザルモ而モ今尚「ライヒ」ト称シ居レリ

露独兩國ハ相互ニ頗ル多額ノ要求ヲ有シタルニ拘ラス一切ノ要求ヲ放棄シタリ此事ガ兩國民ノ幸慶トナリタリシコトハ商業統計ニ於テ証明セラレタリ概シテ余ハ總テ条約ナルモノハ本来善隣關係ノ終末ニ非ズシテ其発端ナリトノ見地ニ立ツモノナリ玆ヲ以テ商議スル兩國民ノ気分ハ頗ル大ナル役目ヲ演スルモノニシテ徒ラニ時局艱難ナリシ過去ノ事蹟ヲ穿鑿スルガ如キハ決シテ妥当ナル外交手段ト称スルヲ得ズ

承認問題ニ関シテ予ハ唯条約締結ノ際外交及領事關係ヲ復活スル旨ノ一条項ヲ挿入スルヲ要スルノミナリト思考ス対等主義ヲ以テ条件トスルノ主旨ハ露國民ノ感情ヲ害シ主權の國民ノ侮辱ト認メラルルカ如キ条項例ヘバ露國民ノ差別待遇又ハ露國ガ沿岸地方ニ築城セズ又ハ極東ノ海洋ニ艦隊ヲ保持セズトノ義務ヲ負フガ如キ条項ヲ条約

置ハ遙カニ有利ナリト云フベシ蓋シ勞農露國ハ平和政策ヲ以テ本旨トシ且ツ帝國主義的「ツァー」政府ノ旧侵略政策ヲ放棄シタレバナリ加之条約ノ締結ハ露國ニ對スルヨリモ日本ニ對シ一層ノ利益ヲ齎ラスモノナリ露國ハ元來日本ニ對シ日本ガ露國ヲ極東ニ於テ安穩ナラシムル点ニ就キテノミ利害關係ヲ有スルニ過ギズ露國ハ自己ノ郷土ニ於テ平和ヲ得日本ガ白軍ノ援助ニ由リ露國ノ内政ニ干渉セザルコトヲ願望スルニ過ギズ反之日本ハ商業漁業森林鉱山トノ幾多ノ利益ヲ有スルモノナリ而シテ法律上ノ承認ナシニ從ッテ十分ナル外交上ノ保護ナシニハ經濟的利益ノ十分ニ伸張セラレザルモノナルコトハ事實ニ由ツテ明瞭ニ証明セラレタリ

四、「サハレン」問題

「サハレン」ハ露國國民ノ眼中ニハ露國ノ領土ナリ夫レ或ハ其領有ハ必ズシモ批難ナキモノニアラザリシナラン元來歴史的ノ論拠ハ係争ノ境界地ヲ解決スル好個ノ方法ニ非ス凡ソ大國ハ元帝國主義的ノ道程ニ於テ發生シタリシモノナリ國際連盟スラモ這般ノ見地ヲ採用セザリシナリ寧ロ事物ヲ觀察スルニ當リテハ將來ノ協力ノ可能性如

中ニ入レザルニアリ然レドモ平等ノ主旨ハ本来日本ノ利害ノミニ關シ露國ニ關係ナキ事項マデモ尚千篇一律的ニ對等ノ形式ニテ之ヲ併列スルガ如ク条約文ヲ編纂スベシト云フニ非ズ

吾露國ハ旧条約ノ無効ヲ宣言シ且新条約ノ締結ヲ要求スルモ而モ是レ次ノ会商カ拠所ナク且全然旧条約ト没交渉ニテ行ハルルノ意ニアラズ而シテ次ノ会商ハ新ナル關係ヲ基礎トシテ行ハレザルベカラスト雖モ而モ吾人ハ幾多ノ方途ヲ發見スベシ其中最モ不便利ナル方途ハ總テノ条約ヲ修正スルコトナラン蓋シ若シ此方法ニ由ル時日少クトモ二ケ年ヲ要スベケレバナリ元來今回ハ根本条約ヲ締結セントスルモノナルガ故ニ「ポーツマス」条約若クハ長春會議ノ提案又ハ双方孰レカヨリ提出スルコトアルベキ新草案ヲ以テ商談ノ材料トセザルベカラザルナラン然レドモ總テ細目ハ後日続行ノ委員會ニ一任セサルベカラザルベシ

予ノ個人トシテノ意見ヲ以テスレバ新条約ノ締結ハ日本ニ取リテハ他ノ列國ト比較シ全然其趣ヲ異ニスルモノナリ、「ツァー」ノ露國ニ比シ勞農露國ニ對スル日本ノ位

何ノ見地ヲ以テセザルベカラズ

尼港被害者ノ賠償ノ担保トシテ「サハレン」ヲ占領スルハ對等ノ主義ニ反スルモノナリ蓋シ外國ノ軍隊ガ外國ノ領土ニ自称ノ債權ヲ保全ストノ理由ニヨリ駐屯スル先例ハ國際法上未タ曾テ之レ有ラザレバナリ斯クノ如キハ中央「アフリカ」ニ於テ可能ナランモ大國「ロシヤ」ニハ適當スルモノニ非ズ

然レドモ露國ハ最初ヨリ日本ニ向ッテ「サハレン」ノ經濟的利益ヲ許容スルノ意向アリシモノナリ最初予ハ既ニ長春ニ於テ日本ノ委員ニ之ヲ忠告シタリ

極東共和國ノ「シンクレア」会社ニ与ヘタル特許事件ガ莫斯科ニ於テ審査セラレザルベカラザルニ及ンデ予ハ莫斯科政府ノ命ニ依リ再ビ在北京日本公使ヲ經テ日本ガ「サハレン」ニ於ケル油田ノ特許ヲ獲得スルヲ得ル旨ヲ通告シタリ而シテ此通牒ニ對シ何等ノ答弁アラザリシニモ拘ハラズ我政府ハ尚十二月若クハ一月迄一二ケ月待チテ其愈々答弁アラザルニ及ンデ初メテ条約ヲ允可シタリシノミ

今ヤ特許ノ取消恐ラクハ最早可能ナラザル時ニ及ンデ予

ハ唯一ノ道即チ北部ノ売却ノ一途アルノミ然レドモ是唯予ノ純然タル個人的ノ意見ニシテ予メ政府ト談合シタルニ非ズ其他次ノ理由ニヨリ困難ナル問題タルモノナリ即チ

(一)若シ新政府ガ「サハレン」ヲ日本ニ売渡ス時ハ勞農政府ノ総テノ敵ハ曰ハン新政府唯一ノ事業ハ露国領土ノ割譲ナリト而シテ波蘭及其他以前露国ノ一部分タリシ新興国トノ条約ハ真ニ露国領土ノ割譲ヲ意味シタルガ故ニ予ハ恐ル若シ日本ニ対シテモ同様ノ処置ニ出デナバ現在政府ノ反对者ハ此事実ヲ吾人ニ反对スル運動ニ利用スルニ至ランコトヲ

(二)我政府ハ「サハレン」ハ沿海州殊ニ黒竜江流域ニ対スル掩護物ナリトノ軍事上ノ理由ニ由リ容易ニ決心スル能ハズ露国ニ於テハ日本ニ所謂「バイカール」論者アリトノ説普及シ居レルガ故ニ既ニ「ツァー」統治ノ時代千九百十五年割譲説ハ有力ナル反对ヲ受ケタリ殊ニ沿海州ノ住民ハ割譲ニ反对シタリ露国ニ於テ日本ハ帝國主義的政策ヲ採ルモノニ非ズ且露国ニ対シ友誼的態度ヲ取ル者ナリトノ確信起ラザル限りハ割譲ハ頗ル困難ナル問題ナリ

ク五ヶ年ニシテ戦前ノ經濟の水平線マテ恢復セラレ得ルコトヲ通知スルコトヲ得タリシナランニハ予ハ政治的軍事的經濟の懸念ニ拘ラズ北部「サハレン」ノ売却ニ何レノ露人モ同意スルナランコトヲ確信スルモノナリ

註 右ハ独語覽書ノ仮訳文ナリ

二四二 三月三十一日 道岡静岡県知事ヨリ
内田外務大臣宛

後藤ヨツフェ会谈後ニ於ケル通訳者ノ談話報告ノ件

高第五七四三号

大正十二年三月三十一日

静岡県知事 道岡 秀彦

内務大臣 水野 鍊太郎殿
内務次官、警保局長 大塚外事課長 殿
大塚事務官
外務大臣伯爵 内田 康哉殿
外務次官、情報部長、欧米局長殿
警視總監、神奈川県知事殿

「ヨツフェ」一行ニ関スル件(第九十八報)

「ヨツフェ」一行ノ前報後ノ状況左記ノ通りニ有之候条此

五 日露国交回復交渉関係 二四二

(三)長春ニ於テ大阪毎日新聞ノ川上君ガ「サハレン」ハ日本ニ売却セラレ得ルヤノ問題ヲ提ケテ予ニ迫リタル際予ハ「モスクワ」ニ問合セ露国政府ハ曾テ再ビ「アラスカ」ニテ為シタルト同一ノ過ヲ再ビセント欲スルモノニ非ズトノ回答ヲ得タリ合衆国ハ「アラスカ」ニテ既ニ初年度ニ於テ百倍ノ利益ヲ収メタリ

我政府ガ上述ノ重要ナル理由ニ依リ「サハレン」ノ割譲ニ同意セザルナランニ拘ラズ予自身ハ米國ノ会社ガ特許ヲ得タル後日本ガ曾テ「ボーツマス」会議ノ際要求シ且當時ノ露国ヨリ拒絕セラレタル北半部ノ領有ヲ再ビ要求スルニ於テハ北半部ノ売却ヨリ他ニ途ナキコトヲ信ズ——而カモ露国政府ガ人民ノ前ニ本件ヲ弁明シ得ル条件ノ下ニ換言スレバ売買代価ガ十分高価ナルコトノ条件ノ下ニ——

「ゼノア」會議ノ當時露国ノ委員ハ一露国學者ノ計算書ヲ携ヘ且統計ノ方法ニテ会合ノ相手ニ露国ハ自力ヲ以テセバ十五ヶ年ヨリ少カラザル歳月ニテ且外債ノ援助ヲ以テスレバ五ヶ年ニシテ戦前ノ状態マデ復旧スルコトヲ証明シタリ而シテ是ガ為ニハ三十億金貨「ルーブル」ヲ要ス若シ例エバ予ニシテ露国ハ北半分ノ売却ニ依リ公債モナク負債モナ

段及申(通)報候也

左記

一、昨三十日後藤子爵「ヨツフェ」ト会見シタル後ニ於テ通訳者森孝三ハ左ノ如ク語ル

「ヨツフェ」ノ来邦以來日露通商開始ノ促進運動ハ各所ニ起リ已ニ吾國民ノ輿論トナリ居ルニ不拘政府ハ頗ル冷淡ナル態度ヲ執リ其時機ヲ逸セントスル虞アルヲ以テ後藤子ハ之ガ中間ニ在リテ斡旋ノ勞ヲ執リ好機ヲ逸セザル様努メツツアリ即チ今回ノ来訪モ「ヨツフェ」氏ト隔意ナキ意見ヲ交換シ所謂國民の外交ニヨリ諒解ヲ得以テ政府ニ献策シ之ガ促進ヲ図ラシメントスルニ外ナラズ万一好機ヲ逸センカ英米仏伊其他ハ取テ之ニ代ラントスル野心ヲ抱藏シ居ルハ明瞭ニシテ現ニ北樺太ノ油田採掘ノ一部利權ノ如キ当然吾國ニ於テ獲得スヘキ利權ナルニ不拘米國ニ横取りセラレタルニアラズヤ故ニ吾國ノシベリヤ北樺太等ニ關係ヲ存スル巨商等ハ政府ヲ鞭撻スル意味ニ於テ日露通商開始促進同盟会ナルモノヲ組織シ運動スルニ至レリ併ナカラ彼等ハ自己ノ利益ヲ本位トシタルモノニシテ通商カ一年遅ルレバ何千万円ノ損失ナリ杯トノ打

算ヨリ出タルモノナルモ吾国家トシテハ斯ル小利害ニ着眼スル能ハス世界的見地ヨリ又東洋ノ平和保全ノ上ヨリ何時カ日露条約ヲナスニ最適当ナルヤヲ考慮セサル可ラス元来日露交渉ト云フモ之ハ単ニ日露ノミノ干係ニアラスシテ吾国ノ立場トシテ日露支ノ三国ハ其親善利権保持等ノ総テニ於テ離ル可ラサル干係ヲ有スルモノナルコトニ思フ致ササル可ラズ日露通商条約ニ関スル第三次会議ヲ開催スルニ当リテハ此点ヲ考慮シテ好機ヲ捉ヘサル可ラス吾国ニ於テ其機会ヲ逸シタル為メ英米等ニ其利権ヲ獲得セラレンカ永久ニ恢復スルコト能ハサルヘク露支等ノ如キ弱国ヲ相手ナラバ幾分吾国ノ意志モ通ルベキモ一旦英米等ノ如キ強国ニ獲得セラレンニハ如何トモスルコト能ハズ利権ハ横取りセラレ各国何レモ通商ヲ開始シタル後ニ於テ吾国ノミ通商ヲ拒ムコト能ハズ糟ヲ嘗メナカラモ尻ニ就テ行カサル可ラサルナリ而シテ其時期如何ト云フニ今露農露国ノ外交官「ヨッフエ」氏ノ来訪中ナルハ最好機会ニシテ之ヲ逸シテハ再度取返スコトハ困難ナルヘシ第一次、第二次ノ日露開議ノ決裂ヲ見タルハ畢竟スルニ彼我ノ諒解十分ナラサルカ大ナル原因タルヲ疑ハ

ズ即吾国ノ朝野共ニ露国代表「ヨッフエ」氏等ヲ過激派「バルチザン」ノ頭目ノ如ク思惟シ露農政府ノ外交家中又吾国情ニ精通シ居ル人ナキニヨリタルモノナルカ今回「ヨッフエ」氏来邦シ具ニ吾国情ヲ研究シ帝國議會ノ状況、国民ノ輿論、各新聞紙ノ論調等ニ依リ大ニ日本通トナリタル次第ニテ露農政府トシテハ日本通ノ第一人者ナルベシサレバ氏ノ意見ハ取テ以テ露農政府ノ吾国ニ対スル最有方ナル意見トナルハ自明ノコトニシテ氏ノ在留中ニ遺スニ至ルナキヲ保セズ後藤子爵ノ今回ノ斡旋ハ実ニ斯ル見地ヨリ出テラレタルモノニシテ子爵ハ明治天皇ノ御趣旨ヲ奉シ至誠國ニ竭サントノ誠意ヨリ出テタルニ外ナラズ故ニ本問題ニ付テハ後藤子爵ノ会见ハ之カ最後ナルベク又最後トシテ今後ハ所謂露政府ノ非公式外交ニ移シ度希望ナリ余ハ或ハ尚一二回使者トシテ往復スルニ至ルヤモ知レズ云々

一、憲政会代議士望月小太郎ノ頃日「ヨッフエ」氏ヨリノ書簡ナリトシテ發表シタル長文ノ文書ニ対シ森孝三ハ左ノ如ク語レリ

望月代議士ハ始め「ヨッフエ」氏ト会见セントスルノ意

アルコトヲ後藤子爵ニ語リタル処子爵ハ会见スルハ結構ナルカ其前ニ幾分「ヨッフエ」氏ノ意見ノ存スル処ヲ知り置ク必要アラントテ最初余(森孝三)ガ「ヨッフエ」氏ヲ迎ヘテ意見ヲ聴取シタル点ハ詳細報告書トシテ後藤子爵ニ提出シ置キタルモノヲ望月代議士ニ貸与シタルニ同氏ハ之ヲ懷中シテ「ヨッフエ」氏ト会见ノ際之ヲ提出シ此ノ文書ヲ發表シテ差支ナキヤト尋ネタルニ「ヨッフエ」氏ハ夫レハ余ノ意見ニ相違ナキモ發表スルナラバ尚字句ノ訂正ヲ要シ度処アリトテ之ヲ一読シテ所々訂正セリ而シテ之ナラバ余ノ意見トシテ發表シテモ差支ナシト望月代議士ニ渡シタルニ其ノ後望月代議士ノ發表シタルモノト大ニ相違セルノミナラズ余ヨリ望月代議士ニ宛テタル書簡ヲモ發表シタルハ不都合ナリ余ハ何ヲ苦ンデ少數ナル時ノ政府反對党而カモ名モ知ラザル望月代議士ニカカル長文ノ書簡ヲ出ス要アラン斯ノ如キハ余ノ意思ト離ルルコト遠シ憲政会ノ如キハ信用零ナリト大ニ憤慨シ居レリ云々

一、「レーウキン」ハ本日午前七時三十分東京支那公使館

ニ電話ニテ左ノ如ク通話セリ

何カ御用件アリテ書面ヲ發セラルルトカ又ハ来訪セラルルトノコトナルモ小生本日上京公使館ニ御伺ヒスヘキニヨリ書面及ヒ御来訪ハ見合ハセラレタシ云々

二四三 三月三十一日 在ハルビン山内総領事ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

日露交渉再開問題ニ関シ請訓ノ件

第一一三三号 (四月一日接受)

昨今当地露国人ニシテ第三日露會議ハ何時何処ニ於テ開催セラルヘキカニ付當館ヘ問合せ来ル向非常ニ多シ右ニ對シ島田ハ何等語ルヲ得ザルニ付質問セザラムコトヲ望ム旨答ヘ居レリ本件ニ付何等本官心得迄ニ承知シ置クヘキコトアラハ御垂示アリタシ露農代表側ノ態度ハ極メテ冷淡ナルニ付當方モ冷淡ナル態度ヲ持シ居レリ

二四四 四月四日 内田外務大臣ヨリ
在ハルビン山内総領事宛(電報)

日露交渉再開問題ニ関スル応答振ニ付回訓ノ件

第四四号

貴電第一一三号ニ関シ

日露會議ニ関シテハ新聞紙上種々取沙汰セラレ居ルモ勞農側從來ノ態度ヲ以テシテハ未ダ第三會議開催ノ氣運ニ達セリト速斷シ得ザル現状ニ在ルニ付其ノ含ミニテ適宜応酬シ置カレタシ尙政府ニ於テハ「ヨッフエ」ト公式又ハ非公式ニ何等折衝シタルコトナキニ付是亦含置カレタシ本電浦潮へ転電アリタシ

二四五 四月十日 後藤新平ヨリ
加藤内閣總理大臣宛

ヨッフエニ対スル交渉上ノ我方態度ニ付伺出

ノ件

付記一 大正十一年十一月十一日付ヨッフエヨリ小幡

公使宛書翰訳文

二 四月十日付加藤内閣總理大臣ノ備忘録

口上

前日松平欧米局長ヲ以テ御内示相成候条件ヲ基礎トシヨッフエ氏ト会谈シ後別紙第一号ヨリ第五号ノ参照書ヲ得テ此ニ左ノ三問ヲ決セラレンコトヲ請フ
第一、非公式交渉ニ進マレヘキヤ否

第二、彼ニ暗号ヲ許可シテモスクワ政府ト了解ヲ経タル意思ヲ聞クノ要ナキカ

第三、彼ヲシテ支那ニ帰ラシムルヨリモモスクワニ帰ラシムル問題ヲ授クルノ意思決定セラルヘキカ

以上

四月十日

新平識

註 別紙第一号ヨリ第五号ノ参照書左ノ通り

第一号 三月七日付ヨッフエヨリ後藤子宛書翰(前出)

第二号 三月十七日付後藤子ヨリヨッフエ宛答翰(前出)

第三号 三月二十九日及三十日ノ熱海会谈ノ際ノ後藤子談話

覚書(前出)

第四号 右会谈ノ際ノ後藤子ノ質疑ニ対スルヨッフエ答弁ノ

覚書(前出)

第五号 大正十一年十一月十一日付ヨッフエヨリ小幡公使宛

書翰和訳文(左掲付記一)

(付記一)

大正十一年十一月十一日付ヨッフエヨリ小幡公使宛書翰和訳文

(註 仮訳文ナリ)

北樺太ニ於ケル日本軍駐留ニ対スル抗議等ニ関スル件

拜啓露西亜社会主義連邦「ソヴィエト」共和国ノ勞農政府ハ日本帝国政府ニ対シ直接通信スル事ヲ得ザルニヨリ小生

閣下ガ此ノ宣言ヲ出来得ル限り速カニ貴国政府ニ進達セラレン事ヲ望ミ小生ハ閣下ニ対シ最高ノ敬意ヲ表シ申シ候

敬具

千九百二十二年十一月十一日

駐支那露西亜社会主義ソヴィエト共和国特命全權公使

アドルフ・ヨッフエ(署名)

駐支那国日本帝国特命全權公使

小幡 西吉閣下

註 本件ニ付テハ日本外交文書大正十一年第一冊二九二文書(三八八頁)参照

(付記二)

四月十日付加藤内閣總理大臣ノ備忘録

四月十日午後三時後藤子ト談話ノ要点左ノ如シ(但シ同子ノ談ノミヲ記ス小生ノ問ニ対スルモノモアリ雜誌中ノモノモアリ)

一、「ヨ」氏ハ誠意ヲ有スルモノト確認ス

一、外務ガ「ヨ」ヲ信ゼザルコトモ熟知ス

一、結局ハ別紙ノ内何レカニ方針ヲ決セラレタシ

一、次官位ガ「ヨ」氏ト非公式相談ヲサレテハ如何

一、浦潮方面ニ於ケル漁業問題其他ハ「ヨ」ノ指揮ニ依リ

ハ露国政府ノ名ヲ以テ次ノ事ヲ日本帝国政府ニ進達セラレン事ヲ閣下ニ希フノ光榮ヲ有シ候
長春會議ニ於テ露西亜社会主義連邦「ソヴィエト」共和国及極東共和国ノ連合委員ハ最モ熱心ニ日本軍ノ北部「サガレン」占領継続ニ対シテ抗議致シ居リ候同會議ガ何等ノ結果ヲ見ル能ハズシテ決裂致シタルハ全ク日本政府ガ同地ヨリ日本軍ノ撤退スベキ時日ヲ決定スル事ヲ拒絶シタルガ為メニ外ナラズ候

同會議ニ於テ露国代表ハ其ノ政府ノ名ヲ以テ日本ノ「サガレン」ニ於ケル利益ハ別ノ方法例ヘバ同島北部ニ於ケル利権ヲ日本ニ与フル事ニヨリ満サレ得ベキ事ヲ明白ニ指示致シ居リ候

勞農政府ハ其ノ言ヲ守リ未ダニ同一ノ意見ヲ有シ居リ候然レドモ——特ニ今日ニ於テハ唯「サガレン」ヲ除ケバ露国極東ノ領土何処ニ於テモ既ニ外国軍ノ駐屯ヲ見ザル状態ナルヲ以テ——露西亜社会主義連邦「ソヴィエト」共和国ノ勞農政府ハ最モ熱心ナル態度ヲ以テ絶対的不法ニシテ且許スベカラザル日本軍ノ露領「サガレン」占領ニ抗議セザルヲ得ザルモノニ有之候

解決ス

一、自分ハ何等困リ居ルコト更ニナシ此ノ儘打切ルモ立場上差支ナシ

一、「サガレン」ハ買取ル事ハ六ヶ敷カランモ全島ノ利権ヲ得ルコトハ可能ナラン三十億ノ言ハ単ニ露ノ経済状態ヲ述ベタル迄ニテ此ノ価格ヲ以テ売ラントスルノ意ニハアラズ

以上ハ要点ナルガ当方ノ意見ハ一言モ口外セズヨク研究スヘシトテ別レタリ

浦潮ノ暗号禁止ノ事ハ咄シ置ケリ

何分御研究ヲ望ム

友三郎

二四六 四月二十日 閣議決定

後藤子及ヨッフエ氏間交渉ニ関スル我方針決定ノ件

一、帝國政府ノ意向ヲ確メタル結果トシテ政府ハ第三次日露交渉ノ開始ニ主義上異存ナキコトヲ「ヨッフエ」ニ言明シ差支ナシ

二、後藤子爵ヨリ三月二十九日「ヨッフエ」ニ開示シタル綱領ニツキ更ニ同子ニ於テ一步踏込ミ労働政府ノ意向ヲ確ムルコト殊ニ尼港問題及北樺太問題ニシテ解決ノ見込立タサル以上第三次日露通商ニ関スル交渉開始ノ徒勞ニ帰スヘキハ勿論ナルニヨリ本問題ニ付更ニ詳細且具体的ノ話合ヲ為シ第一案トシテ労働政府ヲシテ尼港事件ノ解決ニ関連シ北樺太ヲ日本ニ売渡ス様話ヲ進メ老億五千万円内外ニテ先方ヲ承諾セシムルニ努ムルコト尤モ右ハ後藤子ノ意見トシテ意見ノ交換ヲ行フコト

三、右買取案ノ成立ヲ見サル場合ニハ長期例ヘハ五六十年ノ期間相当条件ノ下ニ租借セシムルカ又ハ北樺太ニ於ケル鉱山森林漁場等主要ナル利権及樺太対岸ニ於ケル森林伐採權ヲ日本ニ許与セシムルコトシ尼港事件ニ由ル日本側損害ハ右利権ノ一部ノ無償提供又ハ利権許与ニツキ特ニ我ニ有利ナル条件ヲ以テスルコトニヨリ補償セシムルノ案ニヨリ先方ノ意向ヲ具体的ニ突止ムルコト

四、「ヨッフエ」ト莫斯科間ノ暗号電報ハ本件交渉ノ終了迄之ヲ許可ス

五、右内交渉ノ進展ニヨリ予備の意見ノ一致スルカ又ハ全

然見込ナキニ至ラハ「ヨッフエ」氏ヲ一先ツ立去ラシムルコト若シ内交渉進展ノ結果当局者ト「ヨッフエ」トノ間ニ接觸ヲ必要トスル場合ニハ外務部内ノ或者ヲシテ非公式ニ予備交渉ヲ行ハシムヘシ

六、前記ノ諸会谈ハ出来得ル限り短期間ニ行フコトス而シテ彼我ノ間ニ予備の諒解成立シタル場合正式ノ会商ニ依リ尼港問題及北樺太問題ヲ確定セシムルコト双方ニ有利ナルヘキニヨリ右ハ引続キ「ヨッフエ」トノ間ニ取極ムルコトトシ差支ナシ

七、第六項所載ノ事項終結シタル上通商問題其ノ他ニ関スル日露交渉ヲ開始スヘキ処其ノ場所ハ諸般ノ關係上本邦以外ヲ可トス從テ「ヨッフエ」ハ第六項所載ノ交渉成立ノ上ハ一応本邦ヲ去ルコトトス尚右交渉開始ノ場所及代表等ハ追テ決定スルコト

(付 露国官憲ハ在浦潮総領事代理ノ貿易事務官交換ニ関スル提案ニ回答セサルノミナラス其ノ暗号電報使用ヲ禁止セル処露国側ニシテ如斯不当ノ措置ヲ擅ニシ事毎ニ術策ヲ弄スルニ於テハ我方ニ於テモ對露方針ヲ變更シ自衛上必要ノ措置ヲ執ルノ已ムヲ得サルニ至ル

五 日露国交回復交渉関係 二四七

ヘク日露交渉開始ノ如キ之ヲ予期シ得サルコトナルヘキニ依リ右内交渉ニ入ルニ先チ嚴重先方ノ反省ヲ求メ暗号電報使用禁止ヲ解除スルト共ニ速ニ総領事代理ノ提案ニ對シ回答セシムル様後藤子ヨリ忠告スルコト)

註 右閣議決定ノ冒頭ニ「總理大臣承知(内田外相印)」及「同日夕此写ヲ後藤子ニ手交(内田外相印)」ノ記載アリ

二四七 四月二十一日 後藤新平ヨリ 内田外務大臣宛

前日閣議決定セル政府方針ニ付質疑提示ノ件

昨日拜別ニ臨ミ承認問題ノ事ニ及ヒ候時御意見不明瞭ニ有之寧ロ不承認ニ決シ居候テ更ニ御交付ノ覚書ニテ彼ト意見ヲ試ミ候様御懇頼ノ主旨ニアラザルカノ疑ヲ生シ候故玄關マデ送り来リ候浅井秘書官ニモ不審ノ点申残シ置候処御聞取被下候哉

本覚書ハ前日松平局長ヨリ受取候覚書ト対照拜読熟考候ヘバ當時ヨリモ首相若クハ閣議ノ決定ハ承認ヨリ退却シ浦潮領事ヲ經テモスクワ政府ニ交渉シ失敗シタル案ニサガレン問題ヲ加ヘテ新問題別問題トシテ小生ノ方面ヨリ再試セラ

レントスルモノノ様ニモ被察候随テ前日松平局長首相代理トシテ小生ニ面会交付シタル覚書中ノ承認問題ハ殊更ニ避ケテ触レズ巧ニ文字ヲ羅列シタル跡歴然タルカニモ被疑誠意ナキ閑戯ノ様相見得候

要スルニ彼提出ノ三条件ヲ無視シテ全然別個ノ問題トシテ小生熱海会谈中尼港事件サガレン問題ニ関シ彼ノ言質ヲ採ル様

暗号禁止ハ今日尚帝国外交唯一ノ秘策トシテト取セラレ居リ赤化宣伝恐怖ヲ旧ニ依リテ固守スルノ主旨ナルコト

ヨッフエ氏ニ一日モ早く退去ヲ命ゼントスル属僚ノ主張ヲ改メズ此機会ニ露骨ニ御声明相成リタルモノト解セラルルコト

本交渉ハ難事ヲ構ヘテ不成功ヲ辞セズ否此場合ハ非公式云云ハ景物トシテ全然懸引上ノ文句ニシテ前日承認問題ニ入ル様声明セラレタル文字ヲ取消ノ精神ト解スルコトガ賢明ニシテ巧文章ノ内面ヲ悟ラザリシモノハ其自身ノ愚ナリ以上如何ニモ懸引アリ且前日浦潮領事館暗号禁止ノ件ニ関シ小生ヨリ忠告候様御付言相成タル処ヨリ推測シテモ疑問相生シ候ニ付一応相伺候間御主旨御明示被成下度至急ヲ要

至ニ存ジ候右ハ小生ノ考ニテ最初ヨリ承認問題ヲ論議スルコト却テ交渉ヲ紛糾セシムル虞アルニ付是レカ論議ヲ避ケ事實上樺太尼港事件ノ解決ヲ図ラムトシタルモノニシテ過日首相ヨリ松平局長ヲシテ貴覽ニ供シタル覚書ノ趣旨ヲ變更シ又ハ取消サムトスルガ如キ意思ニハ全然無之即チ尼港事件ノ解決及國際義務ノ履行等ニ関シ確實ナル諒解ヲ得ルニ於テハ帝國政府ニ於テ勞農政府ノ承認ヲ考量シ差支ナキ次第ニ有之此ノ方針ニ関シテハ今日ニ於テモ何等變更無之次第ニ御座候仍テ若シ先方ト御話ノ際右ノ方針御説示ノ必要アルニ於テハ其ノ点御開示相成候テモ差支無之候ニ付左様御了承相願度尚浦潮暗号問題及貿易事務官問題等ニ関シテハ御序ノ節一応先方ノ注意喚起方便宜ト思考致シタルモ右ハ御都合次第其ノ儘ニ付セラルルモ差支無之候ニ付是亦御了承願度尚委細ハ浅井秘書官ヨリ口頭申上グベク右不取敢御回答迄如斯御座候 敬具

二四九 四月二十三日 後藤新平ヨリ
内田外務大臣宛

日露交渉再開ニ関スル政府方針ノ再確認方要
請ノ件

シ候事故書面ヲ以テ相願候 草々不尽

四月二十一日

新平

内田外相閣下

侍曹

二四八 四月二十一日 内田外務大臣ヨリ
後藤新平宛

日露交渉再開ニ関スル政府方針ニ付テノ質疑

ニ対シ回答ノ件

御懇書拝誦致候然ルニ昨日御面晤ノ節勞農政府承認問題ニ関シテハ閣下ノ御質問ニ対シ小生ハ北樺太及尼港事件ヲ解決スルコトハ承認問題其他通商問題等ヲ審議スベキ第三次日露交渉ニ便ナラント思考スル旨ヲ述ベタルニ対シ閣下ヨリ若シ先方ニ於テ此際承認問題ヲ本件樺太及尼港問題ト全然切離スコトヲ拒ム場合ニハ如何ニスベキヤトノ御反問ニ対シ右様ノ場合ニハ打切ルノ外ナシト思考スル旨述ベ閣下ニ於テモ御同意相成候様拝承致シタルニ付其ノ旨一応首相ニモ報告致シタル次第ニ有之候然ルニ貴翰ニ依レバ此ノ間充分ノ御諒解ヲ得ザル点アリ却テ誤解ヲ招キタルハ遺憾ノ

愈々明早朝熱海行可致途中湯河原ニ立寄候心算ニ御座候數日来ノ件ニ付更ニ不審ノ点ト了解決意ノ点明カニ申上度別紙相認メ差出置御覽ヲ請ヒ奉り候
万一誤解ノ点有之候テ承認問題ニ影響ヲ生シ候ハバ湯河原首相ヘ御通信ヲ煩ハシ度右マデ

早々不尽

四月二十三日

新平

内田外相閣下

侍史

(別紙)

前略四月二十一日貴答中

「此際承認問題ヲ樺太及尼港問題ト全然切離スコトヲ拒ム場合(後者ヲ先決スルコトヲ拒ム場合ノ意)ニハ如何ニスベキヤノ御反問ニ対シ右様ノ場合ニハ打切ルノ外ナシト思考スル旨述ベ閣下ニ於テモ御同意相成候様拝承シタルニ付其旨一応首相ニモ報告シタル次第ニ有之候」

トノ御回答有之候処當時外務大臣ノ提案ハ長春談判ノ記録ヲ閣議ニ提出セラレザルヨリ閣員之ガ調査ヲ為サズシテ議

決セラレンカ又ハ外務大臣ニ於テ故意ニ該經過並ニ記録ヲ閣員ニ説明スルコトヲ省略セラレタルカ又ハ最近「ヨッフエ」氏ヨリ三月七日小生宛提出ノ末文三条件中第二ニ記セル日本全権執拗ニ主張シ云々トアル一章、即チ

「併シ乍ラ唯彼ノ尼港事件ナルモノニ関シテハ多クノ新聞紙ガ日々多大ノ紙面ヲ之ニ割キ居リ候關係上玆ニ一言申述置度ト存候而シテ長春會議ニ於テ露國ノ全権委員ハ此ノ問題ニ付キ直チニ審議ヲ開始スルコトヲ拒絶シタルモノニ非ザルノ一事ハ殊ニ閣下ノ御注意ヲ乞ヒタキ点ニ有之候否此ノ問題ノ審議ヲ欲セザリシハ実ニ日本ノ全権委員ニ有之彼等ハ他ノ問題ニ就テハ急速ノ審議ヲ主張シツツ此ノ問題ニ限り如何ナル理由ノアリテカ之ハ他日日本政府ノ正式ニ承認セル露國政府ノ出現ヲ待テ交渉ヲ開始スベシト唱ヘ同時ニ尼港事件トサガレン占領トノ間ニ密接不離ノ關係アルヲ執拗ニ主張致候換言スレバ尼港事件ニ関シテハ日本委員ハ上記ノ主權國トシテノ威信云々ノ理由ニヨリ露國トシテ到底承認シ難キ主張ヲ固守シ以テ其ノ審議討論ヲ回避シタル者ニ有之候」

ヲ取消サレタル義カトノ疑問ヲ生ゼシメタルガ故此上ノ反

モ此方ノ勝手タルヘシト云フ義ニ非ズシテ「サガレン」及尼港問題ガ解決セバ何等ノ異議ナク承認スベシトノ閣議若クハ外務大臣ノ御意向ト心得ルコト当然ト存候是ニテ誤解無之候哉右更ニ承リ置度得貴意申候依テ小生ト閣下トノ間意見交換ニ於テ尚不審ノ点有之ニモセヨ此際徒ラニ遷延時日ヲ經過スルモ好マシカラザルニ付不取敢先方ニ伝話致候事トセバ先ヅ次ノ如クニテ可然カ

会谈案ノ大要

前日貴下ヨリ交付セラレタル意見書並去ル三月二十九日、三十日会谈ノ覚書ヲ添ヘ政府当局ヘ相示シタル処

(一) 政府ハ第三日露交渉開始ニ異存ナキ様ナリ尼港事件「サガレン」問題ヲ解決セザレバ承認問題ニ入ルコトヲ難ンズルノ色アリ本日会谈ニテ貴意承リ前日来御互ノ会谈ヲ一步進メテ政府ニ伝ヘタシ

(二) 「サガレン」問題ノ解決トシテ日本ニ売渡ストセバ約其金額幾許ナルベキカヲ問ヒ

(但長期租借又森林鉦山漁場ノ利權日本許与ノコトハ本文不成功ノ場合ニ転ジテ開談スベシ)

(三) 尼港事件日本側損害ノ賠償ハ具体的ニ承リタシトノ意

問ハ却テ無用ナリト胸中ニ不審ヲ抱キツツ只右様ノ場合ニハ打切ルノ外ナシト思考スル旨ノ御説明ハ先ヅ不承認トノ内意ニ出デタルモノニテ単ニ或ル言質ヲ取得レバ好シ否ラザレバ破談トナルモ可ナリトノ意ニ傾キ居ラルルコトナラント察セラレ本来誠意ナク小生ヨリ提出ノ書類ニ対シ一応ノ挨拶タルニ止マルモノニ非ザルカニ相考ヘラレ候ヘ共更ニ後証ノ各書類参照ノ上篤ト熟考可致ト存シ拝別シタル後二十一日ニ疑問ノ廉概略書面ニテ開陳シタル次第ニシテ同日浅井秘書官ヲ以テ御回答書並ニ口頭ノ説明ヲモ承リ候ヘ共尚釈然タラザルモノアル旨申陳置候処更ニ右「ヨッフエ」氏ノ書翰末文三条件第二中ノ正式ニ承認セル露國政府ノ出現ヲ待テ交渉ヲ開始スベシトノ日本全権ノ声明ニ関シテハ今日ニ於テハ彼モ一時此モ一時ト申ス如キ無意味ナルモノナル哉ニ御伝言承リ意外ニ存候乍去彼「ヨッフエ」氏ハ之ヲ以テ日本全権ノ誠意アル強キ声明ト心得居候事小生ト同様ナルベクト被察候サレバ前言之ニ戲ムルノミ今日ハ先ヅ取消シト心得御差支無ク前日松平局長ヨリ小生ニ交付覚書ノ通り承認ノコトヲ考慮スベシトノ意味変化ナシトノ御主旨ニ承リ置且考慮トハ其場合ニ到リ変更シテ不承認トスル

ヲ述ベ

(但本件ハ必ズ逆ニ彼ヨリモ損害ヲ計上シ来リ結局其実ハ日本側ヨリ露國側ニ与ヘタル損害大トナランコト予測ニ難カラズ結局調査委員ヲ設ケ精査ヲ試ムベシト云フ説ヲ聞クニ至ラン然ル時ハ不利ヲ来スコトアルベキ事情ハ外務当局モ夙ニ承知シ居ラルル処ナルベシ御示ノ覚書其辺ニ於ケル政府ノ予見アリヤ否不明ナリ如何ニヤ)

(四) 暗号ノ電信ハ本件ニ関シ「ヨ」氏ト本国政府トノ交渉ノ為之ヲ許可セラルベシト伝ヘ置クベシ必ズヤ支那政府ト交渉案件ニモ許可スヘキコトヲ要求スルナラン之ヲ拒ムハ穩当ナラズト信ズ政府ノ意見如何ニヤ

(五) 右交渉ノ進展ニヨリ予備の意見一致スルカ又ハ全然見込ナキニ至ラバ「ヨ」氏ヲ一先ヅ立去ラシムルコト云々ハ甚ダ其意ヲ得ザルニ付申伝ヘザル積リ

(小生此一句ハ政府ニ誠意ナキ不信ノ發言ニ非ザルカヲ疑フ之ハ「ヨ」氏ニ伝ヘザル方政府ノ体面上可ナラン何トナレバ此發言ハ仮令小生限リノ言トシテモ正ニ先般来上海横浜ノ失体ヲ政府行動ト立証セルモノトナル

虞アレバナリ加之政府ガ小生ニ対シ從來言明セラレタル処ニ反シ暗ニ小生ノ行動ヲ裏切シタル公私ノ言動(乃チ警察官ノ虚偽情報作為等)ニ政府ガ賛同シ居ラレルコトノ立証トナルヤニモ察セラルソレハ暫ラク別問題トスルモ此場合ハ政府ガ此提言ヲナスベキ理由ハ毫モ之ナシ是或ハ「ヨ」氏ヲ一日モ早ク退去セシメントシタル内務官僚ノ意思ニ出デテ外務一部ガ暗ニ之ニ迎合シ居レル潜態トモ相見エ綱紀ノ紊乱ヲ暴露シタル嫌アルニ非ズヤ依テ差控ノ方政府ノ道義上ヨリモ可ナルベシ)

外務当局ト非公式ニ予備交渉ニ入ルコトハ内交渉談ノ進展ニ準シテ便宜小生ヨリ彼ニ開示スベシ

(六) 会谈ハ可成短期ニ行フコト同意ニ付其意味ニテ交渉スベシ

付 貿易事務官交換ノ件ト浦塩総領事代理暗号電報使用禁止ノ件ハ覺書開示ノ理由ヲ以テ忠告スルコト小生ニ於テハ不可能ニシテ帝國政府トシテ此ノ如キ理由ニテ抗議スルコトハ最拙ナル方法ト認ムルヲ以テ政府ニ小生ヨリ御忠告致シ度忠実ニ進言ス併シ友情ヲ

後引続キ尼港問題其ノ他ノ案件ヲ論議スル方適當ナル旨ヲ述ベタルヲ露国側ニ於テ右ノ如ク曲解シタルモノト思ハル又承認問題ニ関シテハ先方ニ於テ尼港事件ヲ解決シ且國際義務ヲ履行スルコトヲ条件トスルハ過日首相ノ命ヲ受ケ松平局長ヨリ閣下ニ伝ヘタル覺書及本大臣ヨリ閣下ニ呈シタル書面ニテモ明瞭ニシテ尼港事件及北樺太問題ノミガ解決シタル場合直ニ之ヲ承認スルヲ得ズシテ國際義務ノ履行ニ付明確ナル諒解ヲ得ルヲ必要トスルハ勿論ノ次第ナリ但シ右二条件ニシテ成立スル場合ニハ之ヲ承認スルモ差支ナカルベシトハ「考量」ナル文句ノ言外ニ含ム所トシテ解スルモ差支ナシト思考ス

註 本件書翰ハ四月二十四日東郷欧米局第一課長ヨリ真鶴ニ於テ後藤子ニ又同文ヲ湯河原ニ於テ加藤首相ニ手交セラレタリ

二五一 四月二十四日 後藤新平
ヨッフエ 会谈

四月二十四日熱海ホテルニ於ケル右会谈覺書

ノ件

覺書

後藤子爵ハ『三月七日付「ヨッフエ」氏ノ後藤子爵宛書簡』

五 日露国交回復交渉関係 二五一

以テ解禁ヲ望ム旨申込ムニハ異存ナキヲ以テ相試ムベシ

二五〇 四月二十四日 内田外務大臣ヨリ
後藤新平宛

日露交渉再開ニ関スル政府方針再確認方要請

ニ対シ回答ノ件

四月二十三日付御來信別紙前段「ヨ」ヨリ三月七日貴爵宛提出書類中尼港事件ニ関シ長春會議ニ於テ日本全權ハ「他日日本政府ノ正式ニ承認セル露國政府ノ出現ヲ待テ交渉ヲ開始スベシト唱ヘ」云々トアルモ當時帝國代表ハ斯カル主張ヲ為シタルコトナク却テ基本協約締結後引続キ尼港事件解決ノ為交渉ヲ開始スルニ異議ナキコトハ予備交渉ニ於テ先方ニ明ニシ置キタルノミナラズ帝國代表ハ會議ノ席上之ヲ言明シ更ニ客年九月二十五日會議決裂ニ際シ之ヲ声明シタリ從テ政府ノ方針ハ前後一貫毫モ渝ラザルモノナリ尤モ露國委員ハ成ルベク尼港問題ヲ先ニ議シタキ意向ヲ表ハシタルモ日本委員ハ撤兵開始前ニ基本協約ノ締結ヲ見ル様当初ノ方針ニ依リ努力セシヲ以テ尼港問題ノ論議ヲ基本協約ト同時ニ議スルコトヲ避ケ其際速ニ基本協約ヲ締結シタル

並ニ「ヨッフエ」氏トノ数次ノ会谈覺書ニ基キ政府ト詳細ナル会谈ヲ行ヒタル後政府ヨリ次ノ決議ヲ受領シタル旨通告シタリ

(一) 政府ハ所謂第三次露日會議ヲ開催スル意向アリ但シ

(甲)「ニコラエウスク」問題、(乙)「サガレン」問題ナル二ヶノ重要ナル問題ヲ予メ露國政府ト解決スルコトヲ以テ条件トス

(二) 日本政府ハ「サガレン」問題ヲ第一次ニ売買取引ノ方法ニテ解決センコトヲ欲シ且ツ露國政府ニ於テ之ニ同意ナル場合ニハ其代価ヲ承知センコトヲ希望ス

(三) 日本政府ハ目前ニ迫レル予備交渉ニ際シ「ヨッフエ」氏ニ暗号電報權ノ必要ナルガ為メ「ヨッフエ」氏ニ即時ニ該權利ヲ許与スル意向ナリ

「ヨッフエ」氏ハ後藤子爵ニ其ノ報告ト尽力トニ対シ感謝ノ意ヲ表スルモ而カモ日本政府ノ前記ノ決議中ニハ全体ノ事柄カ聊カ「回転」セラレタルヤニ見受ケラルルコトヲ注意致シ度シ「ヨッフエ」氏ハ偏ニ後藤子爵ノ懇篤慰勸ナル招待ニ基キテ日本ニ來遊シタルニ過ギザルコトヲ回想セリ右招待ノ理由トシテ第一「ヨッフエ」氏ノ

重キ慢性的疾患ト世界ニ著名ナル日本ノ温泉場ニ於ケル療養ト第二ニ「ヨッフエ」氏ノ滞在ハ両国民間ノ種々ナル誤解ヲ氷釈スル機会タランコトヲ以テセラレタリ

「ヨッフエ」氏ハ此ノ第二ノ重要ナル動機ハ本来ソノ目的ヲ達成シタルコトヲ敢テ信セントスルモノナルモ而カモ「ヨッフエ」氏ハ決シテ第三次露日会議ノ開催ニ就キ提議シタルコト無ク且又日本政府ヨリモ斯種ノ提案アリタルコトヲ聞カザリシモ最初ヨリ長春會議後馴致サレタル形勢ヲ打開スル工夫ニ就キ会谈スル意向アル旨ヲ述ベタリ是ヲ以テ「ヨッフエ」氏ハ公式ノ文書ニ於テハ『日本政府ハ云々ノ意向アリ(……ヲ承諾ス)』トノ文句ナカラシテ希望ス蓋シ此等ノ文句アルカ為メ他方ヨリス種ノ提議アリタルヤノ印象ヲ惹起スレバナリ其外「ヨッフエ」氏ニ於テ後藤子爵ノ注意ヲ請ヒ度キ点ハ後藤子爵ヨリ屢次提出セラレタル——露国政府ハ如何ナル条件ノ下ニ新ナル露日會議ヲ予想セラルルヤ——トノ質問ニ対シ「ヨッフエ」氏ハ毎ニ個人的名義ニ於テ三箇ノ周知ノ予備条件ヲ以テ答ヘ且ツ此三箇ノ予備条件ハ個人的名義ヲ以テシタルモ而カモ幾多ノ先例ニ基クモノナルコトヲ指摘シ

ク「事件ハ本来不当ニシテ且ツ露国民ノ苦痛ヲ感ジタル日本ノ干渉ノ「挿話」ニ過ギザルモノナリキ日本軍隊側ノ露国民ニ対スル斯種ノ「挿話」ハ頻繁ニ發生シタリシナリ

「ヨッフエ」氏自身ハ日本政府ガ此「挿話」ヲ以テ宣伝及威信ノ問題トナシタル後ノ今日ニ迫ンテ最早本問題ヲ回避シ能ハザルコトヲ能ク了解セリ又氏ハ露国政府ガ実ヲ言ヘバ斯ノ如キ瑣細ナル問題ノ為ニ露国及日本間ノ善隣且ツ親密ノ關係ヲ樹立セントスル大問題ヲ敢テ失敗ニ終ラシムル意アリトハ考ヘズ唯「ヨッフエ」氏ハ全然罪ナシト信ズル露国ガ此關係ニ於テ奈何ナル提案ヲ為シ得ベキヲ想像スルコト能ハズ且ツ日本政府ノ面目ヲ損セズ又露国ニ取リテモ同様ナルベキ提案ガ日本側ヨリ出シコトヲ希望セリ

(イ)、「サガレン」問題ノ解決トシテ「サガレン」ヲ日本ニ売却スル問題又ハ売却ノ可能ハ後藤子爵御承知ノ如ク「ヨッフエ」氏ニ於テ露国政府ト何等ノ接触ナク寧ロ類似ノ先例ニ反シナガラ絶對ニ独立シテ考案セラレタルモノナリ拠テ本問ニ就テハ露国政府ニ問合セヲ為スベキノ

タリシコト是ナリ「ヨッフエ」氏ハ此等三箇ノ予備条件ニ対スル日本政府ノ見解奈何ヲ後藤子爵ニ質問セント欲ス

後藤子爵ハ之ニ答フラク日本政府ハ既記ノ如ク上述セル二箇ノ予備条件ニ就キ妥協ヲ前提トシテ此等三箇ノ点ニ對シ異議ナキ旨ヲ以テセラレタリ

「ヨッフエ」氏ハ此見地ヲ完全ニ了解セルヲ以テ今ヤ暗号発信權ヲ得タル旁々直ニ其政府ニ問合セヲナスベキ旨ヲ述ベタリ然レトモ「ヨッフエ」氏ハ直ニ次ノ註解ヲ加ヘント欲ス

(イ)、「ニコライエフスク」問題ニ関シテ露国ノ見地ハ露国ノ掌裡ニ在ル資料ニ基キ次ノ如キモノナラザル可カラズ露国政府モ將タ齊多政府モ當時該方面ニ於テ如何ナル威力ヲモ有セザリキ該地方ハ日本ノ軍隊ト所謂露国ノ「バルチザン」トニテ支配シタリシモノナリ事件全体ハ露国側ノ文書ニ拠レハ日本軍隊ノ挑発ニ起因セルモノノ如シ然ルニモ拘ラズ事後正式ニ露国裁判所ニ於テ殺戮及掠奪罪アリト認メラレタル露国ノ「バルチザン」ニ對シテハ死刑ヲ宣告シ且ツ之ヲ執行シタリ其他「ニコライエフス

ミ

(ロ)、「サガレン」問題ニ関シテ他ノ解決法ノ必要ナル場合ニハ「ヨッフエ」氏ハ今日既ニ新ナル提案ヲ為シ得ベシコノ提案ハ「ヨッフエ」氏ノ信ズル所ニ拠レバ露国政府ヨリ受諾セラルル最大ノ機会(チャンス)アルモノナリコノ提案ハ次ノ如シ

即チ北部「サガレン」ノ一切ノ天然富源開拓ノ長期例之ハ九十九年間ノ「コンツェション」ヲ有スル露日会社ヲ設立スルコト之ナリ

「シンクレレーヤ」会社ノ「コンツェション」ハ之ヲ解除ス但シ「シンクレレーヤ」契約中ニ定メタル違約金ハ日本ニ於テ支弁ス露国ハ支弁ヲ引受クルコト能ハザレバナリ然レドモ大体「ヨッフエ」氏ハ後藤子爵ヨリ通報セラレタル事柄ヲ即時「モスコウ」ニ電報ニテ通達セント欲ス之ニ對シ後藤子爵ハ売却問題ノ拒絕セラレタル場合ニハ本来「サガレン」問題ハ二ヶノ解決法即チ長期ノ租借ト「コンツェション」アルノミナルコトヲ指摘セラレタリ「ヨッフエ」氏ハ之ニ答ヘテ曰ク第一、公式ニ「ニコライエフスク」事件ト「サガレン」問題ト連絡スルモノニ

アラズ且ツ「サガレン」ノ撤兵ハ無条件ノモノナルコトハ勿論ナリト思惟ス長期ノ租借ニ関シテハ若シ租借ニシテ旅順式ノ租借又ハ之ニ類似ノモノノ意味ニ解セラルルモノナラバソハ露国ニ取りテ到底承諾シ難キモノナリ「コンツェション」ニ就キテハ前段提案通りナリ

後藤子爵ハ之ニ答ヘテ曰ク「サガレン」ノ撤兵ハ任意且ツ無条件ノモノナルコト勿論ナリ且ツ旅順式ノ租借ヲ想像シタルニアラズト且ツ子爵ハ全然法律的法式ニ触レズ専ラ経済的利益ニ就キテ談話セラレタリ

「ヨッフエ」氏ノ病状ニ顧ミ子爵ハ「ヨッフエ」氏ヲ此上勞スルコトヲ欲セズ午後会谈ヲ継続センコトヲ希望セラレタリ

「ヨッフエ」氏ハ重ネテ北部「サガレン」ニ於ケル日本ノ経済的利益ハ必ズ露国側ニ於テ重大ノ注意ヲ以テ顧慮セラルルコトヲ声明セリ

正午休憩中ニ「ヨッフエ」氏ハ自身が暗号発信権ヲ得随テ所謂日本ノ領事ニモ同様ノ権ヲ許容センコトヲソノ政府ニ請フノ電報ヲ「モスコウ」宛ニ発センコトヲ書記官ニ命ジタリ

午後後藤子爵ノ「ヨッフエ」氏再度訪問ノ節「ヨッフエ」氏ハ後藤子爵ニ第一、自己ハ決シテ自己ノ個人的利益ヲ以テ其国民及国家ノ利益ノ上ニ置キタルコト無ク随テ自己ノ病症ハ如何ナル場合ニ於テモ刻下ニ迫レル交渉ノ障碍タラザルコト並ニ日本ノ所謂領事ニ対スル暗号ニ関スル前記ノ次第ヲ告ゲタリ

(欄外註記)

右会谈覚書ハ五月一日後藤子ヨリ松平局長ニ手交セラレタルガ同局長ニヨル次ノ記入アリ

「此点藤子ニ質問シタルニ自分ハ此意味ニテ言ツタノデハナイカラ直ニ先方ニ申遣ハシ取り消サシムベシト答ヘラレタリ」

二五二 四月二十八日 松平欧米局長ヨリ 後藤新平宛

勞農政府承認ノ条件タル國際義務履行問題ニ付政府見解指示ノ件

勞農政府ノ國際義務履行ノ問題ハ之ヲ大別シテ条約廢棄、債務破棄及外国人私有財産沒收ノ三問題ト為スヲ得ヘシ以上ノ諸点ニ関シ露国側ハ「ゼノア」會議ノ際連合諸国ニ於テ新ニ勞農政府ニ対シ財政援助ヲ与フルコト戰爭債務ノ免除及總テノ債務ノ利子ノ減額並勞農政府ノ承認ヲ条件トシ

テ露国ノ蒙リタル損害ニ関スル勞農政府ノ對抗要求ヲ拋棄スルト共ニ戰前債務承認ニ同意シタルモ勞農政府ニ於テ沒收シタル外人財産ニ対シ単ニ旧所有主ノ優先使用権ヲ認ムヘシトシ連合側最終提案(露国帝政時代以来ノ外債承認、開戦後革命中露国側ノ蒙リタル損失損害ニ関スル勞農政府ノ對抗要求ノ拋棄、勞農政府ノ負担スヘキ債務額ノ減少或ハ變更、財産沒收等ニ依ル外人ノ損失損害ノ恢復又ハ賠償等ヲ含ム)ヲ拒否シタルヲ以テ連合側モ遂ニ交渉ヲ断念シ結局海牙ニ専門委員會ヲ開催シテ露国側トノ意見ノ相異ヲ審議スルコトトナレルガ海牙會議ニ於テモ露国側ニ於テハ大体ニ於テ「ゼノア」會議ニ於ケル主張ヲ繰返スノミニテ私有財産ノ返還ヲ認メザルノミナラズ之ガ賠償ニ付テモ保障ヲ与ヘズ戰前債務ニ付テモ条件付ニ非ザレバ之ヲ承認スル能ハズト云ヒ何等協定ニ達セザリキ

翻テ右ノ諸点ニ関スル帝國政府ノ態度ハ条約廢棄問題ニ関シテハ苟クモ国家間ノ合意ニ基ク約束タル以上一方當事国單獨ノ意思表示ノミニ依リテ之ヲ廢棄スルヲ認ムベカラズトスルモノナリ從テ日露間漁業ニ関スル協約ノ如キ露国側廢棄主張ハ之ヲ認ムルヲ得ズ然レドモ從來日露兩國間ニ締

結セラレタル条約協約等ノ内之カ改廃修正スルヲ適當トスルモノハ適當ノ手段方法ニ依リ改廃修正ノ措置ヲ執ルハ固ヨリ之ヲ辭セザル所ナリ
對露債權問題ニ付テハ帝國政府ノ對露債權ハ大正十一年三月末調査ニ依レバ利子ヲ除キ總額約三億円(内約一億円ハ帝國政府ガ露國政府トノ直接契約ニ依リ引受ケタルモノ其他ハ元來民間所有ノモノヲ帝國政府ニ於テ引受ケタルモノナリ)ヲ超過セル処我方債權ノ大部分ガ戰時債務ニ属スル關係上戰前債務ノミヲ承認セムトスルガ如キ露國側主張ハ之ヲ承認スル能ハズ但シ露國財政狀態ノ現狀ニ顧ミ其ノ支払能力ヲ參酌シテ一定期間債務支払ヲ猶予シ又場合ニ依リテハ債權額又ハ利子ヲ減額スルコトハ之ヲ考量シ差支ナカルベシ
私有財産問題ニ関シテハ我方ノ關スル利害鮮少ナルモ目的物ノ現存スル以上原所有者ノ權利ヲ尊重セシムルヲ要シ現存セザルモノニ付テモ其ノ損害ヲ賠償セシムルヲ要ス

二五三 五月一日 後藤新平ヨリ 内田外務大臣宛

國際義務履行問題ニ関スル政府見解ニ対シ更

二 質疑提出ノ件

前日松平局長ヲ経テ接手致シタル書類中国際的義務履行ナル文字ノ内容説明拝読、別紙ノ各疑点ヲ生シタルニ付更ニ御説明相煩シ置度はハ勿論「ヨッフエ」氏へ伝話ノ準備ニハ無之小生攷究ノ腹稿マデニ必要ト存シ候次第ニ御座候右御伺マデ

草々不尽

五月一日

新平

内田外相閣下 侍史

(別紙)

四月二十七日稿

新平

一、条約廃棄ノ問題ニ就テハ政府ガ露国ノ廃棄説ヲ承認セザルハ同覚書後段ニ現ハルル如キ法理上ノ理由ニ基クモノナル乎又ハ連合諸国ノ政策ト協調セント欲スル實際上ノ理由ニ基クモノナル乎

二、果シテ法理上ノ理由ニ出ヅトセバ是レ主義ノ問題ナルガ故ニ全世界ノ各国ガ之ヲ承認スルモ帝国政府ノミハ依然トシテ之ヲ承認セズトノ主張ヲ貫徹セザルヲ得ズ政府ニモ此覚悟アリヤ如何

三、反之實際政策ノ理由ニ基クモノトセバ周囲ノ形勢ノ変

化ト共ニ帝国政府ノ態度モ変化セザルヲ得ズ帝国ハ英仏米諸国ノ態度ニ順応セムト欲スル乎又ハ必要ニ応ジテハ帝国独自ノ自主的態度ニ出ヅルノ覚悟アリヤ如何

四、更ニ廃棄是非ノ問題ハ形式上ノ問題ナリ政府ハ實質上ニ於テ同一ノ結果ニ陥ルガ如キ改廃修正ニ応ズルノ意アリヤ又ハ名ハ廃棄ナルモ別途ノ方法ニ依リ實質的效果ヲ収メ得バ之ニ応ズルノ用意アリヤ如何

五、日露漁業ニ関スル協約ノ如キ露国側ノ廃棄主張ハ之ヲ認ムルヲ得ズトノ政府ノ意見ハ絶対的ノ主張ナリヤ如何

六、対露債權問題ニ就テハ支払猶予及元本利子ノ減額ヲ承認スト言フハ債務放棄ニ主義上反対ナル結果ナルカ又ハ三億円ト称スル金額カ多額ナル為メナルカ如何

七、私有財産權ノ問題ニ就テモ連合諸国ト全然立場ヲ異ニスル帝国政府ガ之ヲ主張スルハ主義上ノ問題ナル乎政策上ノ問題ナル乎乃至ハ從來ノ行懸上之ヲ主張セラルル乎如何

八、要之去ル四月二十八日松平局長ヲ以テ内示セラレタル国際義務履行問題ニ関スル覚書ハ文情詳細委曲ヲ尽シ頗

労農政府ノ正式承認ノ前提ニ関スル件

労農政府ノ正式承認条件トシテ尼港事件ノ解決ノ外国際義務ノ履行ニ付充分ナル了解ヲ得ルヲ要ストノ我方主張ハ法理上主義上ノ理由ニ基クノミナラズ實際上又ハ政策上ヨリモ之ヲ主張スルモノナリ而シテ右承認ニ付テハ列国ノ態度ヲ注意スルコトハ重要ナルモ我方ハ必ズシモ英仏米諸国ノ態度ニ拘束セラルルノ理由ナシ労農政府ニシテ前記二条件ニ付充分ナル了解ヲ与フル場合之ヲ承認スルモ差支ナカルベシ而シテ国際義務履行問題ノ具体的細目ニ付テハ将来事情ノ變更ニ応ジ決定スベキ必要アルニヨリ此際右ニ就キ詳細ナル言明ヲ為スヲ得ズ

註 前掲五月一日付後藤子爵ノ質問ニ対シテハ本件閣議決定ノ後松平欧米局長後藤子爵ヲ往訪シ口頭ヲ以テ右決定ノ趣旨ヲ回答シタリ

二五五 五月九日 在ハルビン山内総領事ヨリ 内田外務大臣宛

日露、中露両會議ニ関シ露紙記者ガ島田副領事ニ対シ為シタル談話報告ノ件

機密第二〇二号 (五月十六日接受)

二五四 五月四日 閣議決定 五 日露国交回復交渉関係 二五四 二五五

九、更ニ帝国政府ハ上記理論ニ拘泥セズ實際上ノ利益ヲ取得セムトスルノ真意ヲ藏セラルルヤ如何若シ藏セラルトセバ果シテ如何ノ種類ノ利益ナリヤ教示ヲ仰クコトヲ得ム乎如何

註 右文書起稿ノ日付ハ疑問ナルモ暫ク此ノ儘トス 右ハ五月一日市政調査会ニ於テ後藤子ヨリ松平局長ニ手交セラレタルモノナリ

大正十二年五月九日

在哈爾賓

総領事 山内 四郎 (印)

外務大臣伯爵 内田 康哉殿

日露、露支両会議ニ関スル觀察ニ付報告ノ件

五月八日島田副領事ト会谈シタル当地露紙「ノーウオスチ・ジーズニ」紙(労働側ト密接ノ関係ヲ有ス)記者「ソコロフ」(同人ハ「ボゴージン」方ニ出入シ居レリ)ガ極メテ卒直ニ内話セントテ露支日露両会議ニ付語レル所左ノ如シ

「吾人ハ露支会議開催近シトテ頗ル熱心ニ宣伝シタルモ実ノ所日露會議成立前ニ露支會議成立スベシトハ思考シ居ラズ又支那ト會議シタリトテ露国側トシテハ何等得ル所ナシ当今当地露国人間ノ一般ノ希望ヲ卒直ニ言ヘバ実ニ一日モ速ニ日露ノ關係樹立セラレンコト是ナリ日本トノ關係樹立セラレテ始メテ貿易ノ将来ニ望ヲ嘱シ得ベシ支那人トハ到底有価値ナル製造工業乃至大規模ノ商業ヲ営ムコトヲ得ズサレド吾人ハ同時ニ日本ノ立場ヲモ了解セザルベカラズ帝國主義ヲ奉ゼル日本ガ今直ニ労働政府ヲ承認センカ即チ自

スキーゴーロス」政治部長「ペロブロッスキー」ノ内話左ノ如シ

卒直ニ言ハンニ支那側ハ露支會議ノ為メ委員ヲモ任命シ王正廷ハ当地方視察ニ来リ頻リト一方のニ準備ヲナシタルニ反シ労働側ノ態度ハ如何全然冷淡ニシテ委員ヲスラ確定セズ支那側ノ醜態サ加減笑フニ堪ヘタリ自分ハ日露會議成立シテ然ル後始メテ露支會議モ成立スヘキモノト確信ス但シ自分ノ日露會議トハ労働日本両政府間ノ會議ニアラズシテ将来生ズベキ真ノ露国政府ト日本トノ會議ヲ指スモノナリ労働政府トノ會議ハ到底成立シ得ザルベク仮令成立スルトモ何等日本側ニ利益ナカルベシ見ヨ漁業問題、林業問題、日本内務事務官問題、日本領事館問題其他皆然リ更ニ誠意ナキニ非ズヤ何等ノ保障ナキニ非ズヤ金ヲ入手スルモ認可ヲ与ヘザル遣方ナリ斯カル連中ト談判セントスル日本側ノ意ヲ解スルニ苦シム所ナリ云々

右御参考迄ニ報告申進候 敬具

二五六

五月十日

ヨッフエヨリ
後藤新平宛

日露交渉ニ関スル書翰及ビ覺書送付ノ件

五 日露国交回復交渉関係 二五六

ラ帝國主義ヲ排除スルコトヲ意味スルモノニシテ単独ノ承認ハ对内策上到底不可能ナラン米國ノ外交ハ強硬ナリサレド斯カル強硬外交ハ米國ニシテ始メテ之ヲ行ヒ得ルモノナリ日本ハ之ニ随フコト能ハザルベシ目下「ヨッフエ」ト後藤子トノ間ニ日露国交ノ樹立ニ関シ話進行中ノ由ナルガ吾人ハ此際日本外務省ノ官吏ガ假令位置ノ低キ者例ヘバ貴下(島田)ノ如キ者ヲシテ「ヨッフエ」ト連絡ヲ保タシムルニ於テハ話ノ進捗一層良好ナルベシト信ズ元來談判ハ難事ナルガ故ニ十分從來ノ成行ヲ熟知セル人其局ニ当ルコト適切ナリト思考ス云々」

ト述べタル後余談トシテ「ボゴージン」ハ老人ニシテ事無カレ主義ナレバ病氣ヲ理由トシテ貴下(島田)トノ会见ヲモ避ケ居ルモノノ如シ即チ外交的病氣ナリ査証事務ノ如キモ更ニ解決セズ最モ入國ノ困難ナルハ實ニ日本人ノミナラズ外國人ニ對シテモ一律然リトハ「ボ」公館ノ説明ナリ「コーボゼフ」ハ莫斯科ニ召還セラレ多分知多ニハ歸來セザルベク又「オザルニン」ノ如キ極東通商ガ歸來スル日モ遠カラザルベシ云々ト語レリ

五月八日同ジク島田副領事ヲ來訪セル東支鐵道機關紙「ル

謹啓閣下トノ会谈ガ二個國語ニヨリ且ツ通訳者(優秀ナル人ナレドモ)ノ勞ヲ煩ハスノ必要アルノ事實ニ鑑ミレバ時トシテ其ノ間相互ノ諒解ノ障害タルヘキ或種誤解ノ發生スルナキヲ必シ難シト思惟ス

故ニ余ハ本書ニ於テ此種誤解ヲ一掃センガ為メニ從來閣下トノ会谈ニ際シ常ニ余ノ取り来リタル意見ニ付テ更ニ明瞭ニ正確ニ且ツ其ノ真意ヲ一層徹底的ニ御説明致サムト欲ス第一ニ余ノ指摘セント欲スル所ハ——余ノ諒解スル限り——四月二十四日ニ至ル迄ハ余等ノ会谈ハ全然非公式且ツ無拘束ナル地位ニ於テ取行ハレタリトノコトナリ而シテ四月二十四日ニ至リ閣下ハ以前ノ如ク非公式ニ会谈セラレタリト雖而カモ閣下ハ此日ハ政府ノ指揮ノ下ニ会谈セラレタルモノトモ言ヒ得ベシ日本政府ハ我等ノ会谈ヲ以テ頗ル重要ニシテ殆ンド半公式ナルモノナリト思惟セルガ為メニ余ニ賦与スルニ本國政府トノ暗号電報使用權ヲ以テシ從テ余ニ全然公式ノ回答ヲナスノ可能性ヲ与ヘラレタリ

四月二十四日会谈ノ要領ハ余ノ諒解スル所ニ於テハ大凡ソ下ノ如シ

四月二十日日本政府ハ次ノ如キ決定ヲ為シタルモノノ如シ

(何トナレバ翌二十一日森孝三氏ハ書面ヲ以テ先日閣議決定ノ事項ヲ申来サレ余ニ暗号電報使用許可ノ件並ニ同決定ヲ余ニ伝達スベク政府ハ閣下ニ依頼シタルノ件ヲ報告セラレタルガ故ナリ)

(一) 日本政府ハ左記二条件ニシテ予備的ニ決定セラルルニ於テハ第三次日露会商ヲ開始スルノ意アリ

(イ) 尼港問題

(ロ) 薩哈連問題

(二) 薩哈連問題ニ関シテハ日本政府ハ北薩哈連ヲ買収シテ解決セント切望ス

(三) 余ガ上記予備交渉中本國政府ト暗号電報ヲ以テ通信スルノ必要ヲ有シタルニ鑑ミ日本政府ハ此權能ヲ余ニ特許シタリ

此等ノ諸点ニ関スル閣下ト余トノ會談ノ内容ハ既ニ覺書ニ記載シアルヲ以テ之ヲ反覆スルノ煩ヲ避ケ余ハ單ニ下記ノ点ニ付閣下ノ記憶ヲ促サント欲ス

親愛ナル後藤子爵ヨ、既チ余事ニアラズ余ノ當國ニ到着シタル殆ンド最初ノ日ニ於テ余ハ既ニ公ニ聲明シテ日露会商再開ノ為ノ三個ノ予備条件トシテ我露國政府ノ必ズ提出ス

ル旧條約ノ承認ヲ予備的ニ承認セムコトヲ望ム旨聲明セラレタル際余ノ甚シク驚愕シタル所以ナリ

閣下ガ最後ノ覺書ニ於テ此問題ニ就テハ我々ハ既ニ會談シタリトノ旨指摘セラレタルハ正シ然レドモ亦同時ニ三月二十九日ノ閣下ノ覺書ニ於テハ閣下ハ「國際義務」ノ意義ヲ解釈シテコレ露國外交官ガ國際禮讓ノ諸規則ヲ遵守スルコト即チ外交官ノ義務タル宮廷ニ出頭スルノ義ナリト為サレタルコトモ亦事實ナリ之ニ對シテ余ハ此等問題ハ露國側ニ於テ何等ノ誤解ナカルベシト信ズル旨回答セル次第ナリ余等ノ數多キ會談ノ際ニ於テ國債、個人損害、旧條約等ノ諸問題ニ論及シタルコトアルハ事實ナリ然レドモ亦同時ニ余ガ「ゼノア」及海牙ニ於テ露國ノ取リタル立場ヲ說示シ且露國ノ對日債務ハ多額ニアラズ又個人損害ニ至ッテハ當時極東共和國ニハ「ソヴィエト」法制ノ実施セラレ居ラザリシノ事實ヨリシテ毫モ多額ニ上リ居ラザリシニ相違ナシト雖露國ハ如何ナル事情アルモ此等ノ主張ヲ満足セシムルノ意思ナカルベキコトヲ信ズル旨力說シタリ即チ絶對的ニ許スベカラザル先例ヲ生ズルモノナルノ理由ノミヲ以テスルモ然ルヲ得ザル旨力說セリ

ベキモノヲ發表セリ而シテ日本政府ノ閣議ノ決定ハ上記ノ余ノ三条件ヲ容レタルモノト解釈セラルベキヤ否ヤトノ余ノ問ニ答ヘテ閣下ノ言ヲ通訳シツツアリシ森孝三氏ハ尼港及薩哈連問題ノ解決セラルル以上ソレハ申スニ及バザルコトナリト言ヒタリ

先般閣下ノ覺書ニ於テ余等ノ非公式會談中ニ閣下ハ政府ノ意向ヲ推測シテ貴見トシテ語ラルルコトアルノ故ヲ以テ其ノ何人ノ意見タルヤ明瞭ナラザルニ際シテハ質問スベキ旨申出デラレタルハ余ノ感謝スルトコロナリ

向後余ハ正ニ貴需ノ如ク行動スベシト雖現下論述セル此場合ニ於テハ久シキ行惱ノ後漸ク暗号使用權ヲ得タリシヲ以テ日本政府ノ意向ハ可成の早ク露國政府ノ回答ヲ得ムト欲スルナラムト解シ余ハ本文冒頭記述セシト殆ンド同文章ヲ以テ四月二十四日ノ提案ヲ本國政府ニ電送シタリ

コレ余ガ五月六日ノ會談ニ於テ閣下ガ口頭並ニ文書ヲ以テ日本政府ハ余ガ尼港及薩哈連問題ノ予備的解決ノ条下ニ記セル余ノ三個ノ予備的条件ナルモノヲ承認セズ且ツ露國ガ「國際義務」即チ(一)露國ノ對日債務ノ承認(二)革命的手段ノ故ニ日本市民ノ被リタル損害ニ對スル補償(三)日露間ニ於ケ

又更ニ旧日露條約ヲ承認スルノ必要ニ関シテハ——會議ニ於テハ全然白紙的態度ヲ以テ交渉ヲ行フノ不可能ナル事情ニ鑑ミ——余ハ此見解ノ正シカラザルコトヲ反覆力說セリ蓋シ國際法ノ規定ニ從ヘバ戰爭ハ其ノ戰爭ト稱スル事實ノミニ基イテ交戰國間ノ既存條約一切ヲ消滅セシムルモノニシテ而カモ右事實ハ此等交戰國ガ戰爭終熄ニ際シ平和條約取定メノ交渉ニ入ルニ何等妨ケナキモノナリトノ理由一ツニヨルモ明白ナレバナリ更ニ余ハ新創設國家トノ間ニハ何等條約ガ存在セザリシトノ事實ハ此等新國家ト交渉スルニ當リ實際上何等ノ障害タラザリシコト又此等ノ交渉ガ多ク余ノ作成シタル草案ニ基イテ取り行ハレタリトノコトヲ指摘シタリ又大連及長春ノ會議ニ際シテハ交渉ハ旧日露條約ニ基カズシテ日本委員ノ提出シタル草案ヲ基礎トシテナサレタルノ事實ニ對シ閣下ノ注意ヲ惹キタリ之レ實ニ余ガ五月六日ノ會談ニ際シテ日本政府ニシテ斯ノ如キ「國際義務」ノ承認ヲ固執スルニ於テハ進ンデ公式予備交渉ニ入ルノ無益ナルコトヲ指摘セザルヲ得ザリシ所以ナリ如何トナレバ露國政府ハ「ゼノア」ト海牙トニ於テ拒絶シタル提案ヲ今日ニ於テ承認スルコトヲ拒絶スヘキハ明白ナルヲ以テ

ナリ當時「ゼノア」及海牙ニ於テハ此提案ハ一切ノ「ブルジョア」国（日本ヲ含ム）ノ要求トシテ提出セラレタルモノニシテ若シ之ヲ承諾セムカ露国ハ正式承認及多額ノ資金貸付ヲ受ケ一般ニ自己ノ要求ノ大部分ノ満足ヲ得ベキコト知悉シタルニ関ラズ之ヲ拒絶シタルモノナリ

之ニ次イテ閣下ハ日本政府ニ於テハ日本ノ既得權ハ如何相成ルヘキヤヲ知ランコト並ニ、故ニ露国カ交渉ニ先立ツテ第三次日露会商ノ結果作成セラルベキ新条約ニ依ッテ日本ハ以前ヨリ劣等ナル状態ニ置カレザルヘントノコトヲ露国ガ約束スヘントノ保障ヲ得ンコトヲ切望スル旨指摘セラレタリ殊ニ日本ニ取リテ最緊要ナルコトハ漁業問題ガ日本ノ為ニ「ポーツマス」条約ノ取定メヨリ低下セザルベキ方法ニ依ッテ決定セラルベキコトヲ露国カ予備的ニ約束スベキコトナリ

此点ニ関連シ余ハ閣下ノ注意ヲ乞ハント欲スルコトアリ、親愛ナル後藤子爵ヨ、余ハ此麗ハシキ国土ニ到来シタル殆ント最初ノ日ヨリ閣下トノ会談ノ際ノミナラズ全日本人ノ面前ニ於テ公然ト声明シタリ即チ余ノ当国到来ノ結果交渉再開ノ運ニ至ランニハ此種交渉ハ如何ニシテ長春會議ニ於

ゲラレタル最具体的ナル數種ノ問題ヲ論ズル全ク不自然ナル予備交渉ニ墮シ去ルヘシシカモ其ノ理由トスルトコロハ單ニ当事者ノ一方又ハ他方ガ這個問題ノ解決ニ特殊利益ヲ有ストノコトニ外ナラザルニ於テヤヤ

斯ノ如キ方法ヲ以テ交渉ヲ執行スルコトハ余ノ知ル限りニ於テハ何等ノ先例無キトコロナリ如何トナレハ契約当事者カ予備的交渉ヲ取り行ヒ予備的条約ヲ締結スルノ必要ヲ認ムルニ際シテハ此種交渉ハ常ニ一般の原則ノ問題ニ関シ決シテ特殊の具体的性質ヲ有スル問題ニ触レザルヲ常トスルヲ以テナリ而シテ余ノ牢乎トシテ確信スル所ニ依レバ特殊の具体的問題ニ関スル予備的交渉ハ實際上非実行のナリ何トナレハ會議ニ於テ此種問題ノ協定セラルハ會議ハ一切ノ問題ヲ討議スルカ故ニ妥協ノ結果トシテ發生スルモノニシテ其ノ協定ハ會議ニ参加セル各当事者ノ態度ト相互的讓歩トニ起因スルヲ以テナリ

余ハ既ニ日本政府ノ紀憂ガ全然根拠ナキモノナルコトヲ指摘セリ何トナレハ今日ニ於ケル日露兩國ノ經驗ニヨリテモ明ナル如ク露国側ハ日本市民ノ利益ニ適合セムガ為メ經濟的方面ニ於テハ可成リノ歩ミ寄りヲ為セルニ関ラズ日本側

テ生ゼン行詰リヨリ出口ヲ発見シ得ベキカ又如何ニシテ長春ニ於テ中断シタル交渉ヲ再開スヘキヤノ問題ニ限局セザルベカラズト声明セリ——何トナレハ余ハ會議ニ出席スベキ全露国委員ヲ代理シテ今日ノ如ク何等專門家ヲモ同伴セズンテ将来ノ条約自身ノ内容ヲ討議スルコト能ハザレバナリ更ニ余ヲシテ反覆絮説ノ煩ヲ許シ賜ヘ、親愛ナル後藤子爵ヨ、長春會議ヲ決裂セシメタル尼港及薩哈連問題ハ予備交渉及予備協定ノ内容の問題ヲ形成スト雖——両当事者ハ再ヒ會議決裂ノ危険ヲ冒スコトヲ欲セザルガ為メ這個問題ニ付テ予備的協定ヲ作ラムト欲スルハ頗ル自然ノ理ニ出ヅルカ故ニ——何故ニ日本ノミガ特殊利害ヲ感スル一切ノ問題ヲ一般的ニ予備協定ノ問題トシテ挿入スルノ要アリヤ余ハ全ク其ノ理ヲ解スルニ苦シムトコロナリ

若シ日本ニシテ此權利アリトセバ同様ノ權利ハ又露西亞ニ許容セラレザルベカラズ若シ然リトセバ兩三個ノ一般の問題ヲ討議スベキ頗ル自然ナル予備交渉ハ——其ノ兩三個ノ問題ニ付テ意見ヲ交換スヘキコトハ必要ナリ何トナレバ會議ノ決裂セルハ全ク此等諸問題ニ原因セルカ故ニ——會議ノ際ニ於テ討議スベキ諸問題ノ一般の集合体中ヨリ拾ヒ上

ニ於テハ之ニ対シ全然互惠の態度ヲ取ラズ寧ロ反対ニ日本外務省ニ於テハ露国及真ノ露国市民（即チ白衛軍ナラサル）ニ対シ不断ニ且ツ辛辣ニ敵意アル態度ヲ取レルニアラズヤ

余ハ「ポーツマス」条約ニ依リテ如何ニ漁業問題ガ決定セラレタルヤヲ今日記憶セズ又其ノ条約正文ヲ手許ニ所有セズ何トナレバ余ハ第三次日露会商ノ能否ヲ論ズル際ニ斯ノ如キ問題ノ發生スヘキコトヲ予期セザリシヲ以テナリ然ルト雖此種外交政策ヲ見ルニ及ンテハ既ニ閣下ニ申上タル某氏（原文ニハ名前アリ）トノ會談カ必ズシモ余カ當時彼ニ對シテ抱キタル如キ疑惑ヲ値セザルコトヲ考ヘシムルニ至レリ何トナレハ彼モ亦當時此ノ問題ヲ余ニ提示シタレバナリ

右ニ就キテハ後文更ニ詳述スル所アルヘシ故ニ今余ハ單ニ余等ノ會談ニ於テ触レタル諸問題ヲ多少ノ説明ヲ加ヘツツ茲ニ約言シ而シテ又此等問題ニ對スル解決案ヲ選択ノ余地アル私案トシテ開陳セントス

一九二三年五月十日東京ニ於テ

ア・ヨッフエ

親愛ナル後藤子爵閣下

註 右ヨッフエヨリ後藤子爵宛書翰和訳文及次掲文書ノ覚書と訳文ハ共ニ仮訳文ナリ而シテ後者ハ主要部分ノミニ関スルモノニシテ後藤子爵ハ同月十七日之ヲ浅井総理大臣秘書官ニ手交シ其後同月二十一日加藤総理大臣ヨリ松平欧米局長ヘ交付セラレタリ

二五七 五月十日 ヨッフエヨリ 後藤新平宛

日露交渉ニ関スル書翰及ビ覚書統報ノ件

覚書（五月十日記）

（前略）

余ハ既ニ三個ノ問題ヲ提出シ日本政府ニシテ之ヲ容ルルニアラズンバ第三次日露會議ノ不可能ナルベキコトヲ説キタリ

(一) 平等權利ヲ兩当事者ガ會議前並ニ會議中認ムルコト、其ノ意ハ蓋シ露國ヲ強國トシテ認ムルニアリ彼ノ日本外務省ガ從來行ヒ来リタル如キ行動ハ容認スベカラザル処ニシテ例之露國ニ對シテ國際禮讓ノ慣行の条規ヲ無視シ或ハ露國ノ承認ヲ得ズ又ハ其ノ抗議ヲ蔑視シテ露國領海内ニ日本軍艦ヲ派遣スルガ如キ或ハ日本ノ緊急利害問題

者ニ依リテ解釈セラルルコトニ依リテ為サルベシ上掲予備條件ノ真意ニ至ッテハ余ハ既ニ反覆説示スルノ機會アリタルガ故ニ今更ニ之ヲ絮説スルノ煩ニ出デザルヘシ

四月二十四日ノ會談ノ主旨ハ日本政府ガ此等ノ予備條件ヲ予備の取定メトシテ承諾シ尼港問題及薩哈連問題ニ関シ予備協定ニ於テ解案ニ到達スルノ意ナリト余ハ解釈セリ

右ノ主旨ヲ余ハ本国政府ニ打電シタルニ之ニ對シテ左記ノ如キ回答ニ接シタリ

(一) 露國政府ハ日本政府ト同様ニ第三次日露會議ヲ開催スルノ意アリ

(二) 露國政府ハ公式予備交渉ニ於テ最重要ナル問題並ニ余ガ日本側ガ予備協定ヲ為スベキモノトシテ提案シタリトシテ提出シタルモノ即チ尼港問題及薩哈連問題ヲ「オフイシアリー」ニ解決スルノ意アリ

(三) 露國政府ハ余カ直チニ上記予備の公式交渉ニ入ルコトニ對シ異議ナシ

故ニ上記三点ハ今ヤ余ノ個人的意見ニ非ズシテ露國政府ノ

ニ関シ露國トノ意見ノ一致ヲ見ザルニ際シテハ日本軍艦ノ保護ノ下ニ露國領海内ニ於テ獨立ニ行動シ乃至ハ自由行動ニ出デント威嚇スルガ如キ或ハ日本ノ利益ニ関スル問題ノ解決ノ為メノ保障トシテ露國領土ヲ占領スル如キ比々トシテ皆然リ又更ニハ會議中ニ於テハ要求提出ノ不可能ナル種ノ事件例セバ國際法上ノ主權ノ侵害ノ如キ又ハ戰勝戰敗兩國家間ニ於テノミ起リ得ベキ事象例之露國領土内ニ於ケル砲台ノ取り壊チ露國海軍ノ制限ノ如キ之ナリ況ンヤ此等ニ就テハ日本側ニ於テ何等相對的義務ヲ負担スルニアラザルヲヤ

(二) 北薩哈連ヨリ日本軍ノ撤退乃至ハ撤退時期ノ確定ヲ予備交渉中ニ協定スルコト、固ヨリ之ガ公然ノ聲明ニ就テハ之ヲ予備交渉中ニ為スヲ要セズ會議中乃至ハ會議ニ於テ取定メラルヘキ條約中ニ於テ之ヲ為スヲ以テ足レリトスベシ

(三) 「ソヴィエト」露西亞ノ正式承認、固ヨリ之ハ聲明ノ形式ヲ以テ之ヲ為サズ予備取定ノ形式ニ於テ之ヲ定メ會議ニ於テ決定セラルベキ常例の外交官領事官關係ノ再開ヲ規定スル條約中ノ一項ガ正式承認ノ意味トシテ兩当事

公式決定ト見ルコトヲ得ベシ

更ニ余ハ余ノ名ニ於テ——乍併其ノ提案ガ露國政府ノ承諾ヲ得ベシトノ希望ヲ持ッテ——余等ノ會談ニ上リタル日本側提出問題ノ試験的解案ヲ提出スベシ

第一、尼港問題

私案

露國ハ千九百二十年三月尼港ニ起リタル悲シムヘキ事件ニ對シ深甚ナル痛嘆ノ意ヲ表シ之ニ對スル物質的責任ヲ承認スヘシ之ニ對シ日本ハ前露帝國領土内ニ於テ日本ノ過失ニ基キ發生シタル同様ナル事件ニ就テ深甚ナル痛嘆ノ意ヲ表シ之ニ對スル物質的責任ヲ認ムヘキモノトス（右ニ對シ付録ヲ添付ス之ハ必ズシモ公表スベキモノニアラズ即チ兩当事國ハ右取極ノ意義ヲ以テ日本ハ尼港事件ノ損害ニ付キ露國ニ對シ有スル債權ハ之ヲ現實ニ計算スルコトナク同様事件ニ付キ露國カ日本ニ對シテ有スル反對債權ト相殺セラルヘキモノト解釈スルコト之ナリ）

第二、薩哈連問題

私案

一、露領薩哈連ヲ日本ニ売却スヘキ場合ノ解決案

既述セル如ク此場合ニ於テハ種々ノ理由ヨリシテ露国ハ甚タ多額ナル価格ニ於テノミ之ヲ承諾スルコトヲ得ヘシ

薩哈連ニ対スル日本ノ「歴史の権利」ハ之ヲ考慮スルコトヲ得ズ如何トナレバ総テノ国家ハ甚ダ感服シ難キ理由ノ下ニ膨張シタルモノニシテ今日日本主張ノ原則ニシテ容認セラレムカ総テノ強国ハ其ノ国民の歴史の境界ニ立チ返ラザルベカラズ即チ露西亜ハ「モスコ」大公時代ニ立返リ英国ハ英吉利島ノ一部分ヲ以テ満足スヘク独逸ハ「ブランデンブルグ」公国ニ立チ返ル等ノ現象ヲ呈セザルベカラズ故ニ上記原則ハ理論ニ於テモ實際ニ於テモ未ダ嘗テ何人モ認メタルコト無キ所ニシテ之ヲ今薩哈連問題ノミニ対シ適用スヘキ理由毫末モ存セザルナリ

「ポーツマス」条約以後ト雖北部薩哈連ハ露領ノ一部トシテ存在セリ故ニ吾人ガ此地売却ヲ論ゼントセバ唯此事実ヨリ出発セザルベカラズ

第一ニ薩哈連ハ莫大ナル經濟の価値ヲ有ス旧キ露国ノ文献ニ徴スルニ北薩哈連ノ石炭貯蔵量ハ頗ル多大ニシテ其開發宜シキヲ得バ此地ハ太平洋ニ於ケル最重要ナル石炭供給地タルヘシ更ニ石油ノ供給ニ関シテハ其ノ量無尽蔵ト称セラ

於ケル所謂「バイカル」問題即チ暴力ニ依リテ露領ヲ占領シテ「バイカル」湖迄大陸ニ膨張セムトスルノ理論ガ日本

ニ於テ頗ル人氣アリトノコトヲ知悉セザルモノナシトノコトナリ最後ニ露国民ノ現実ナル政治意識ニ依レバ最無智ナル農民ト雖北薩哈連ガ日本ノ手ニ歸スコトハ露領極東ヲ重大ナル脅威ノ下ニ置クモノニシテ同時ニ無尽ノ富ヲ蔵スル沿海州地域ヲ日本ノ勢力圈内ニ置クモノナリトノコトヲ諒解セザルコト無カルヘシ而シテ余ハ最後ニ今一度繰返シテ声言セザルヲ得ザルコトハ過去数年間ノ日本ノ對露政策ニ依レバ日本ガ這個ノ有利地位ヲ利用セズト信ズルコト能ハズトノ一事ナリ

之ヲ他面ヨリ觀ズレバ上記諸理由ハ北薩哈連カ日本ニ對シ如何ニ莫大ナル価値ト重要性トヲ有スルカヲ容易ニ反証スルモノト謂フヘシ

更ニ余ハ進ンテ「ソヴィエト」露西亜カ北薩哈連売却ヲ難スル一理由ヲ陳述スヘシ

勞農政府ハ其ノ声明シタル民族自決ノ主義ヲ遵守シ旧露帝國領内ニ創設セラレタル共和各国トノ条約ニ依テ甚シク其領土ヲ滅殺シタリ此事情ハ新露西亜ノ敵人ガ間絶ナク且極

ル故ニ飛行機時代タリ石油爭奪期タル現代ニ於テ特殊重要性ヲ帶ブルモノト謂フヘシ又同地ハ金鉱ヲ有ス其ノ額未詳ナリト雖頗ル多量ナル如シ其ノ他種々ノ有用ナル鉱石ヲ埋藏ス而シテ最後ニ此地ノ木材ハ其レ自身ニ於テ甚タ重要ナルノミナラズ石炭石油ト共ニ日本ノ所有セザル所ノモノタルガ故ニ日本ニ取テ更ニ有用ノ度ヲ増スモノナリ

轉シテ軍事的戰術の見地ヨリ之ヲ論ゼンカ北薩哈連カ太平洋ノ「ジブラルタル」ノ称呼ヲ有スルハ蓋シ徒爾ニアラズト謂フヘシ

「ソヴィエト」露西亜ハ平和愛好ヲ以テ聞ユルカ故ニ又太平洋ニ於テ海軍ヲ有セズ又将来有スヘキ可能性ナキガ故ニ此地ヲ露国ノ手ニ委シ置クニ於テハ薩哈連ハ単ニ防御の重要性ヲ有スルニ過ギザルベシ反之此地今若シ日本ノ掌中ニ歸センカ日本ハ今尚世界最軍國的侵略の国家タリトノ声名ヲ有スルガ故ニ北薩哈連ハ総テノ人ノ眼中ニ攻勢の見地ヨリスル重要性ヲ有スルモノトシテ映スルニ至ルヘシ

此点ニ関シ吾人ノ記憶スヘキコトハ日本ノ過去五年間ノ對露政策ガ甚タ日本ノ平和愛好心ニ對シ露人ノ信用ヲ鼓吹スル能ハザリシコト並ニ露国労働者及農民ハ一人ト雖日本ニ

端ニ利用スル所ノモノナリ然リト雖歐露ニ於テ旧露領ヲ自決の民族ニ与フルニ正当ノ理由ノ存スルモノアリタリ即チ(一)勞役ニ従事セル民衆カ這個民族自決主義ヲ採用シタルコト(二)這個ノ領土割讓ニ依リテ露西亜ハ精神的並ニ物質的ニ頗ル浪費のナル戰爭ヲ終熄セシメテ平和ヲ樹立シ得タルコト(三)之ニ依テ露西亜ハ世界の封鎖ノ鉄環ヲ破リ全世界ト通商關係ヲ開始スルヲ得タルコト之ナリ然ルニ今北薩哈連売却ニ際シテハ何等上記ノ利益ヲ得ル能ハズ即チ(一)此場合ニ於テハ何等民族自決ノ事實ナシ寧ロ此地ニ居住スルモノハ多ク露人ナルガ故ニ此領土權ノ移轉ヲ喜ブコト無カルベシ(二)露国民ノ其ノ良心ニ於テ斯ノ如キ讓歩ガ欧州ニ於ケル如ク極東ニ於テ平和ヲ確保スルモノナリト信ズル能ハズ寧ロ反対ニ此讓歩ガ日本ノ帝國主義者ニ与フルニ更ニ一層ノ土地獲得趣味ヲ以テセンカヲ疑フベシ(三)薩哈連売却ハ日露双方間ノ通商關係ヲ變更スルモノニアラズ蓋シ日露通商ノ問題ヲ決定スルハ政治問題決定ニ最勢力ヲ有スル歐露人民ナル処彼等ハ未ダ日露通商ニ多大ノ興味ヲ有スルモノニアラズ其ノ理由トスル所ハ戰前ニ輸入セラレタル奢侈品ト戰時中ニ輸入セラレタル破壊の物品トノ外ハ歐露国民ハ毫モ

日本商品ナルモノヲ知ラザレバナリ
カルガ故ニ薩哈連売却ヲ正当トスヘキ何等ノ理由ナキ結果
唯一ノ正当ナル理由ハ此地ニ対シ収得スベキ金額ニアリト
云ハザルベカラズ

上記諸理由ニ基キ余ハ露国政府ハ十億金留以下ニテハ薩哈
連北部ヲ売却スルノ危険ヲ冒ス能ハズト信ズ而シテ右金額
ハ現金タルベク日本ノ対露債權乃至ハ他ノ第三者タル法人
ノ有スル対露債權タルニ対シ有責ナルモノタルコトヲ得
ズ

二、薩哈連売却ニ関シ協定成立セザル際ニ於ケル第

二 解決案

日露合併ノ会社ヲ設立シ特許ノ基礎ニ於テ北薩哈連ノ地
下資源ヲ開発スルノ権利ヲ得ベシ然ルトキハ露国政府ガ薩
哈連ニ於テ「シンクレアー」会社ニ賦与シタル特許ハ取
消サルベク右ニ依リ没収セラレタル金額ハ後日日本ヨリ同
会社ニ支払ハルベキモノトス（日本軍隊カ北薩哈連ヨリ撤
退スヘキコトハ勿論ノコトトス）

第三、国際義務問題

日本側提出ノ問題ニ対スル余ノ個人的回答

者ノ関係ニヨリ定マルモノナレバナリ故ニ露西亜側ノ提示
セル予備の解決ノ問題ハ両当事者ノ平等權利（之ハ固ヨリ
問題ノ性質上当然ナルコトナリ）承認、薩哈連ノ撤兵、ナ
ルニ際シ而シテ會議自体ニ於テ日本委員ノ態度カ徹頭徹尾
非妥協のニシテ露国ノ利益ヲ擁護セムトスル露国提案ヲ全
部拒絶スルニ於テハ露国側ニ於テモ日本ノ特殊利益ノ各問
題ニ付テモ譲歩ヲナサムト欲スル意思ヲ表セザルベキハ亦
頗ル事ノ自然ナリト云ハザルヲ得ズ

斯問題ニ関スル法理的方面ニ付テ見ルニ日本ハ既得權ヲ予
備的ニ保障セムコトヲ要求シ又ハ日露間ニ嘗テ締結セラレ
タル凡テノ条約ノ予備的承認ヲ求ムベキ國際法上ノ理由ナ
シ何トナレバ日本ハ露国ニ対シ戰鬪行為ニ出デタルガ故ニ
此事實ニ基キ國際法上日露両国間ノ旧条約ヲ無効トシタル
モノニシテ仮令「ソヴィエト」政府ノ「ツアー」時代ノ条
約ノ否認ニ関スル一般の布告ニヨリ一切ノ旧条約カ廃棄
セラレザリシトスルモ上記理由ニヨリテ消滅シタルモノナ
リ

最後ニ余ハ斯ノ如ク予備的の取定メナルモノヲ以テ一方ガ予
メ自ラ利害ヲ感スル凡テノ問題ニ付テ相手方ノ承諾ヲ得ル

A、露国カ総テノ外交的慣例並ニ義務ヲ承認スベシトノ意
味ニ於テハ露国政府ニ於テ何等異議ナカルヘキコト疑ナシ
B、然レトモ右主旨ガ(1)革命的手段ノ為メ被リタル個人損
害賠償ノ満足(2)露西亜政府ノ旧債承認(3)日露間ニ於ケル旧
条約ノ承認タルニ於テハ露国政府ヨリ最モ無条件ナル拒
絶ノ到来スヘキコトニ付テ余ハ寸毫モ疑フトコロナシ（此
点ニ関シテハ本覚書ノ中ニ於テ既ニ余ハ説明ヲ記述セリ）

第四、日本ノ既得經濟權利ヲ日本ニ予備的保障ス

ル件（余ノ個人的回答）

日本政府ハ何故ニ新条約ニ依テ日本市民ノ地位ハ「ポーツ
マス」条約ヨリモ低下スヘシトノ杞憂ヲ抱ケルヤ余ハ到底
其ノ理由ヲ解スルニ苦シムモノナリ寧ろ反対ニ余ハ大連及
長春ノ會議ノ經驗並ニ露国政府ガ日本市民ニ対スル現実ノ
關係ノ實際ト目下ノ日本市民ノ利益トハ此等諸問題ノ将来
ノ決定ニ対シ最輝ケル望ヲ鼓吹スヘキ筈ナリト思考セリ同
時ニ余ノ信ズル所ニ依レバ斯ノ如キ具体的問題ニシテ一般
的性質ヲ有セズ又主義ノ問題ニアラザルモノハ予備的交渉
ノ際ニ於テ討議スベキモノニアラズ何トナレハ此等諸問題
ノ解決ハ會議自身ノ空氣ニ依リ又會議中ニ發生スル両当事

ガ如キ種類ノ取定メナリト想像スルコトヲ得ズ如何トナレ
バ若シ同様ノ權利ガ他当事者ニ対シテモ認めラルヘシトセ
ハコレ予備交渉ヲ轉シテ會議自身トナスモノナレバナリ然
レ共日露両国ノ現狀ニ於テ必要トスルトコロノモノハ第三
次會商ガ果シテ可能ナルヤ否ヤヲ発見シ且ツ如何ニシテ此
ノ第三次會商ニ入ルベキヤノ實際問題ノ解決案ヲ見出ス為
メノ予備交渉ナリ

二五八 五月十日 ヨッフエヨリ
後藤新平宛

露領沿海ニ於ケル日本漁業者ニ対スル査証問

題等ニ関スル件

付 記 一 五月五日外務当局談

大正十二年度露領沿岸ニ於ケル漁業問題
二 五月十日ヨッフエガ露国政府ヨリ受取リタル
漁業問題ニ関スル電報一通

我が親愛ナル後藤子爵

我政府ガ漁業問題ノ査証手續之變更ニ関スル貴下ノ御要
求ニ応ジタリトノ事ヲ今般貴下ニ伝達スルヲ得タルハ生ノ
深ク欣幸トスル所ナリ

只今生ハ更ニ別個ノ電報ヲ本国政府ヨリ接受シタリ右ニ

依レバ日本市民ガ漁区ニ自由且ツ無統制ニ出入スルハ許容スベカラズト雖露国政府ハ漁船ニ乗ジテ出漁スル人名簿ニ対スル航海証明書ヲ挿入スルヲ以テ満足シ敢テ各個人別ノ査証ヲ要求スルコト無カルベシ

同時ニ我政府ハ生ニ訓令シテ日本政府ニ対シ次ノ如ク公式ニ声明センコトヲ命ジタリ即チ今回漁夫ニ賦与セラレタル特權ハ如何ナル場合ニ於テモ之ヲ以テ将来ノ漁期ノ先例トシテ思考セララルコトアルベカラズト然リト雖本取極メハ当該契約ノ規定スル全時期ニ亘リ貸下漁区ニ対シ有効ナルモノトス

生ハ未ダ日本政府ト何等直接ノ關係ヲ有セザルガ故ニ貴下ノ好誼アル斡旋ニ依リ本国政府ノ名ニ於テ本声明ヲ為サント欲ス

同時ニ生ハ一親愛ナル後藤子爵ヨ一生ハ貴下ニ御報道致サント欲スル一事アリ即チ生ハ上記査証発行ノ任務ヲ掌ルベキ者ヲ未ダ任命セズトノコトナリ其ノ理由トスル所ハ生ノ知ル所ニ依レバ一問題ハ之ヲ概言スレバ未ダ全然解決セラレタリト為スヲ得ザレバナリ蓋シ日本外務省ハ浦塩ニ於ケル所謂日本総領事ヲ通シテ漁区ニ關係アル人間並ニ物

ヲモ考慮シ何等カノ便法ヲ設ケ以テ出漁ニ支障ヲ与ヘス且不当ノ課税ヲナササル旨ノ保障ヲ与フルニ於テハ何時ニテモ當業者ヲシテ之カ納付ヲ完了セシムヘキ旨申入レ居レルニ拘ラス他面ニ於テ在浦潮莫斯科政府外交代表ハ旅券査証並課税問題ニ付キ今尚莫斯科政府ヨリ回訓未着ノ理由ノ下ニ出漁ヲ容認セサルノミナラス漁期ノ關係上便宜漁獵庁ヨリ仮出漁許可書ノ発給ヲ受ケ且旅券査証等ノ手續省略方ニ付キ了解ヲ取付ケタル上沿海州西南区方面ニ出漁セル我當業者ニ対シ事實上從業ヲ不能ナラシメタルカ如キ事情ニ在リ右漁場方面ニ於ケル事故ニ関シ漁獵庁側ニ於テハ我方ノ要求ニ基キ關係地方官憲ニ電訓セル由ナルモ勘察加「オホツク」方面ノ漁場ニ対シテハ未タ出漁ヲ容認セサルハ前述ノ通ナリ然ルニ此等漁場中ニハ遅クモ五月上旬迄ニ出漁スルニアラスンハ其ノ漁期ヲ失スルモノアル実情ナルニ鑑ミ帝國政府ニ於テハ此ノ際重ネテ浦潮露国当局ニ対シ莫斯科政府ヨリノ回訓督促方ヲ要求シタル上若シ万一五月十二日迄ニ旅券査証問題ニ付キ何等ノ了解成立スルニ至ラサル場合ハ漁期ノ關係上已ムヲ得サル事情ニ在ル者ニ対シテノミハ機宜ノ措置トシテ出漁セシムヘク其ノ他ノ者ニ対シテハ

件ハ各種ノ関税及租税ヲ免除セラルベシトノ新主張ヲ提出シタレバナリ而シテ右ハ五月六日貴下トノ会谈ニ際シテハ何等説示セラレタルコトナキ要求ナレバナリ

此機会ヲ利用シテ貴下ニ対スル最友好的ナル感情ヲ披露ス

エー・ヨッフエ(署名)

(付記一)

五月五日外務當局談

大正十二年度露領沿岸ニ於ケル漁業問題

帝國政府ニ於テハ露領沿岸ニ於ケル漁業問題ニ付テハ漁季ノ關係上日露間ニ存スル他ノ諸懸案ト切離シ成ルヘク速ニ露国当局ト円満ナル了解ヲ遂ケ以テ我當業者ノ從業ニ支障ヲ与ヘサラムコトヲ期シ之カ為在浦潮帝國領事官並我當業者代表ヲシテ露国当局ト交渉ヲ重ネシメ来レリ其ノ結果一面ニ於テハ我當業者ノ經營希望漁区二百六十八個所ニ付テハ既ニ四月一日漁獵庁ト我當業者代表トノ間ニ借区契約成立シ我代表ハ之ニ対シ所要ノ保証金トシテ本年度借区料ノ半額ニ相当スル金額ヲ供託セルノミナラス同借区料ノ他ノ半額ニ付テハ露国側カ旅券査証等ノ案件ニ関シ我方ノ提議

依然協定ノ成立ヲ待タシムヘキ旨並協定成立ノ上ハ一般出漁船ヲシテ遲滞ナク所要ノ手續ヲ履マシムヘキ旨通告スルコトトセリ

斯ノ如ク帝國政府ニ於テハ飽ク迄穩健公正ノ態度ヲ採リ以テ漁業ヲ円満ニ經營セシムコトヲ期待スルト共ニ本問題ノ為對露全局ノ關係上遺憾ナル結果ヲ及ホササラムコトヲ切望シテ止マサルナリ

(付記二)

五月十日ヨッフエ氏ガ露国政府ヨリ受取リタル漁業問題ニ関スル電報二通

一、漁業問題ニ関スル露国政府ノ回答

(五月十日着電)

露国政府ハヨッフエ氏ノ取次キタル漁業問題ニ関スル件ニ就キ左ノ如ク回答ス

右問題ハ後藤子爵ノ要求ナルニ依リ本政府ハ之ニ同意シヨッフエ氏ノ任命スル人ヲシテ日本ニ於テ日本漁民ニ査証ヲ与フルコトヲ許可ス

五月十日正午ヨッフエ氏秘書レヴィン氏
後藤邸ニ來訪口頭報告

備考(註)

初メヨッフエ氏自ラハ本問題ニ関スル我外務省ノ要求ヲ片務的ニシテ毫モ条理ニ適ハサルモノトナシ承諾ノ模様ナカリシヲ以テ更ニ漁期其他ノ關係上至急円満解決ヲ必要トスル旨陳弁シタレトモ承服致シ難シト声明セリ只後藤子爵ニ敬意ヲ表スルノ意味ニ於テ懇談ノ主旨ヲ莫斯科政府ニ伝達致スヘントテ電報シタルモノニシテ本文ニ後藤子爵ノ要求ナルニヨリ云々トアルハ此レカ為ナリ

註 備考ハ後藤子爵ガ書添ヘタルモノナリ

二、漁業問題ニ関スル露国政府ノ報道の電報

(五月十日着電)

露国政府ハヨッフエ氏ノ為参考トシテ左ノ事実ヲ報告ス日本政府ガ在浦塩日本領事ヲ以テ浦塩政庁ニ要求シタルトコロハ其ノ内容後藤子爵ノ要求ヨリモ遙カニ広汎ニシテ税金其ノ他ノ事項ニ及ヒ居レリ、ノミナラス五月十二日迄ニ露国側ガ承諾セザルニ於テハ自由行動ニ出ヅベキ旨ノ威嚇ヲ随伴セリ露国政府ハ日本政府ノ這般ノ言動ガ国際間ノ礼讓ニ合セザルヲ遺憾トスルノミナラズ右威嚇ノ故ニ之ヲ承諾スルモノニアラズシテ後藤子爵ノ誠意アル友誼ニ報イム

昨夜接受シタル電報ニ依レバ莫斯科ニ於ケル所謂「タリフ」委員会ハ「漁具ノ関税ヲ免除ス」ル旨決議致シタル趣ニ候右決議ハ未ダ人民委員会ノ批准ヲ得ザレドモ其ノ之ヲ得ベキコトハ些ノ疑モ無之候

貴下ノ最モ誠実ナル

エー・ヨッフエ(署名)

二六〇 五月十三日

在浦潮渡辺総領事代理ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

日露交渉円滑化ノ為メヨッフエノ地位権限承

認方ニ関シ意見具申ノ件

第三七八号 至急

(五月十四日接受)

政府ノ対露御方針乃至最近後藤「ヨッフエ」ノ交渉結果並ニ之ニ対スル当路ノ御意向等ハ視ヒ得ザル所ニシテ殊ニ労働政府ガ先頃来漁業問題及貿易事務官交換問題等ヲ利用シテ飽迄我方ヲシテ「ヨ」ノ地位ヲ認メシメ(脱)両国交渉促進ニ資セントシ今次査証ノ件ヲ「ヨ」ノ手ニ移サントセルニ対シ如何ナル御処決ニ出デラルルヤハ未ダ承知シ得ザルモ政府ニ於テ当面ノ懸案タル漁業問題ヲ飽迄平和的ニ解決ノ御意向ナル以上右御容認ノ外之ナカルベシト存ゼラル

ガ為ニ承諾スルモノナルコトヲ明白ニ表示セムトス

五月十日正午ヨッフエ氏秘書レヴィン氏後藤邸
来訪口頭報告

備考(註)

漁業者査証以外ノ件ニ関シテハ予ハ政府ヨリ何ニモ承リ居ラス一応当局ニ尋ネテ御返事致スヘント「レヴィン」氏ニ答ヘタリ

註 備考ハ後藤子爵ガ書添ヘタルモノナリ

二五九 五月十三日

ヨッフエヨリ
後藤新平宛

露領沿海ニ於ケル日本漁業者ニ対シ露国ハ漁具関税ヲ免除スル旨通報ノ件

於東京

千九百二十三年五月十三日

(五月十三日午後二時「レヴィン」氏持参)

親愛ナル後藤子爵
漁業問題ニ関シ本国政府ト通信ノ結果更ニ良好ナル結果ヲ得タルコトヲ御報道致シ得ルコトハ生ノ深ク欣幸トスル所ニ有之候

然ルニ右「ヨ」ノ査証ハ今日ノ処彼我共ニ単ニ漁業ニ関スルモノニ限ル(当地日露実業ガ当県林業地ニ本邦労働者五十名ヲ送ラントシ其ノ査証方願出デタルニ対シ「ハ」ハハ別問題故一応中央ニ伺ハザルベカラズト本官ニ語レリ)モノト解セラルル処一問題ニ関シ許ス程ナラバ他ノ緊要ナル一般入国者ニ対スル査証ヲモ許スベク序ニ一般領事職權ヲ非公式ニ許サバ一層利便ナリトハ何人モ首肯スル所ニシテ卑見ニ依レバ此際「ヨ」ニ対シ本官ガ現ニ享有スル職權ヲ仮ニ認メ目下ノ重要懸案ヲ東京ニ移サルレバ「ヨ」ノ地位権限ニ鑑ミ是等ノ解決ハ本官ガ不安ノ地位ニ於テ鼻息荒キ出先キ難輩ヲ相手ニ彼等ノ政策ニ翻弄サレツツ交渉ニ当ルヨリ遙カニ迅速有効ナルハ明カナルノミナラズ斯クテ貿易事務官問題モ一部のニ解決セラレ本月二十日ニ限ラレ居ル本官職權問題モ(往電第一〇二号)緩和セラレ延テハ先方ノ態度ヲ間接善導シツツ第三日露会商ノ氣運ヲ作り得ラルル利益アリト存ゼラル依テ此際政府ニ於テハ一步ヲ進メラレ速ニ「ヨ」ノ地位権限ヲ事実上当館同様ニ仮ニ認メラレ刻下並ニ将来ノ日露交渉ヲ円満有利ニ解決セシメタシ既報英米仏支各国領事統々当地ヲ引揚グルニ際シ帝国ガ当方

面ニ特殊關係ヲ有スル事情且ハ一週後ニ迫マレル当館ノ地位並目下交渉難解ノ原因ニ鑑ミ本省ニ於テハ業已ニ御詮議済トハ存ズルモ右僭越ナガラ卑見電稟ス

二六一 五月十四日 在独国日置大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

労働外交、ヨッフエノ人物等ニ関スル外務次
官ノ談話報告ノ件

第一一一号

(五月十五日接受)

十二日外相晚餐会ニ於テ外務次官 Malizan ト露国問題ニ関シ腹藏ナク雑談シタルガ其内同氏ノ実験ニ基ク左記談話要領御参考迄ニ

(一)「ヨッフエ」ノ人物ニ付テハ「ゾルフ」大使モ好ク承知ノ筈ナルガ非常ニ鋭キ猶太人ニシテ彼ノ談判駈引ニ於テ勝利ヲ制スルコト容易ナラズ「ラッパロ」条約談判ハ自分ガ「ヨッフエ」ヲ相手ニ行ヒタルモノナルガ当時自分ハ冒頭ニ於テ彼トノ談判駈引ニ於テ勝ツ見込ミナキコトヲ露骨ニ彼ニ自白シテ単ニ独乙側ノ基礎条件ヲ明確ニ提示シ之ヨリ一步モ譲歩セズト声明シテ形式其他ノ調理ヲ「ヨッフエ」ニ一任シテ成立シタリ乍併彼ハ大量ノ人物ニシテ余リ

国行ノ分ダケハ爾後一切何等ノ故障ナク輸出サレ居レリ云云

二六二 五月十五日 後藤新平ヨリ
ヨッフエ宛

漁業問題ニ関シヨッフエ氏宛返答ノ件

一、漁業問題ニ付テノ御尽力ヲ謝ス
二、御來翰(五月十日)ニアル如ク漁業取定メハ今年度限りノモノタルコト外務省ニ於テモ承知セリ
三、査証ノ為必要ナル人員ヲ浦塩ヨリ呼寄せラルル為メ日本領事ノ査証必要トノコトナルガ右ハ既ニ外務省ヨリ其手續ヲ為セリ

四、一昨年五月十三日ノ御電報ニヨル漁業ノ関税免除ノ件深謝ス

五、只小生ハ不幸ニシテ一事ヲ申上ゲザルベカラズソレハ露国ノ租税ノコトナリ聞クトコロニ依レバ露国ニテハ五月六日ヨリ全国一樣ニ漁業税ヲ課セラレタル由又人頭税モ課セラルル由然ラバ此等ノ金額多額トナル為採算上漁夫ハ利益ナキコトト為リ折角ノ査証ノ御心配モ充分効ナキニ至ランヤモ知レズト憂慮致居候

五日露国交回復交渉関係 二六二 二六三 二六四

小事ニ拘泥セズ(二)「ボルセヴィック」ト締結シタル条約ガ実行サルル事ノ確信ハ到底持ツヲ得ズ言ハバ彼等ハ「ヒステリー」症ノ婦人ノ如ク氣ニ向ケバ実行シ然ラザレバ実行セズト言フ状態ナレバ「ボルセヴィック」ハ treat スベキモ決シテ彼ト treaty ヲ結ブ可カラズ(三)日露ノ間ニハ相当処理スベキ問題モアレバ「ボルセヴィック」ニ於テ希望スルコトモ有ルベシ之等ニ付一時的ニ解決ヲ得ル事ハ不可能ニモアラザルベキモ余リ広汎長文的ノ如キモノヲ作ルハ不得策ナリト思考ス「ラッパロ」条約ハ露国ニ対シ賠償金ヲ支払フ事ヲ防止シタルト最惠国待遇ヲ得タル事ヲ以テ目的ヲ達シタルモノト吾人ハ考ヘ居レリ(四)仏国ハ露国トノ關係ヲ成立セシメント目下密ニ努力中ナレバ恐ラク基年ナラズシテ其実現ヲ見ルナラム此ノ事情ヲ感知シタル波蘭ハ忽チ英國ニ向ツテ秋波ヲ送り仏国ヨリ乖離セントスルノ傾向アルヲ以テ仏国ハ「フォシュ」將軍ヲ送り波蘭ヲ慰撫シツツアリ(五)仏国ガ露国ノ好意ヲ得ン為努力シ居ル一証拠ハ不思議ニモ今回「ルール」ニ於テ出現セリ即チ仏占領軍ハ例ニ依リテ露国注文ノ機關車等ノ輸出ニ干渉シ一旦之ヲ差押ヘタル処莫斯科ヨリノ談判ニ接シテ忽チ解除シ曖昧ノ間ニ露

二六三 五月十六日 田中外務次官ヨリ
有吉朝鮮總督府政務總監宛(電報)

ヨッフエ見舞ノ露国人医師ニ來日ノ査証発給
シタル件

第五〇号

今般在哈爾濱山内總領事ヨリ在同地労働代表者ヨリ「ヨッフエ」見舞ノ為莫斯科ヨリ派遣セラレタル医師「エチンゲーム」ニ対シ査証ヲ与ヘラレ度キ旨依頼アリ時節柄事情已ムヲ得ザルモノト認メ之ヲ与ヘ置キタル旨並同人ハ本月十六日哈爾濱出發滿鮮經由渡航ノ管ナル旨電報アリタルニ付右ニ御了承相成度シ

二六四 五月十八日 在英國林大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

對露交渉再開ニ関シ所見具申ノ件

第三三九号 (五月十九日接受)

露国側トノ會議ヲ再開シ何等ノ協定ニ達セラレントノ帝國政府ノ御希望ニ関シ左ニ本使ノ所見ヲ開陳シ何等ノ御参考ニ供ス

現露国政府ハ内ニハ無理ナル「ソヴィエト」制度ノ維持ヲ

図ルト共ニ外ニ向ヒテハ此制度ヲ外国ヲシテ認メシメント企テ居リ英伊其他トノ通商協定ノ如キ承認ニ導ク第一歩トシテ之ヲ締結シタルモノト本使ニ於テハ觀測ス從テ独逸ノ如ク「ソヴィエト」政府ヲ承認シテ掛ラバ兎ニ角然ラザル以上露国トシテハ通商協定ノ規定ノ如キニ頓着セザルハ当然ノ次第ニシテ露国ト接觸スル地方多キ英國ノ如キハ此事実ヲ最痛切ニ感ズベク伊太利ノ如キハ露国ト接觸スル利害殆ド無キガ為之ヲ感ズルニ至ラザルニ過ギズ「ゼノア」勞山等ニ於ケル本使ノ經驗ニ徴スルニ露国委員ノ態度ハ恰モ病犬ノ如クニシテ露国ヲ承認シテ掛レバ兎ニ角然ラザル以上露国ノ此ノ心理狀態變化セザル限りハ露国トノ會議ニ於テ普通ノ議論ノ上下ニ依リ満足ナル協定ニ到達スルコトハ到底之ヲ望ムヲ得ズサレバトテ列國ガ承認ヲ肯ゼザル今日帝國独リ先ジテ承認スル程ノ時機ニ未ダ達シ居ラズト認メラルルニ付テハ帝國政府トシテハ露国問題ニ付テハ急ガズ焦ラズ悠ルリト解決ヲ期セラルル方然ルベキヤニ思料ス之ガ為ニハ露国ノ内情殊ニ財政ノ情況西比利亞地方ノ露人ノ生活狀態其産業トノ關係、交通機關ノ現狀其他ニ就キ充分ナル調査ヲ行ヒ將來帝國ノ對露方針樹立ノ確実ナル資料蒐

図ニ非ズ勞農側昨今ノ對外立場ハ極メテ不利ナルニ付我方トシテハ此際益々強硬ノ態度ニ出ヅルコト必要ニシテ然ルトキハ「ヨッフエ」ヲシテ讓歩ノ止ムナキニ至ラシムルコト可能ナリト信ス（長春中継大正十二年五月二十一日午後三時五十五分）

二六六 五月二十二日

加藤内閣總理大臣
後藤新平子爵 會談

加藤首相ニ對シ後藤子ヨリ同氏トヨッフエト

ノ下交渉ニ付報告及ビ同首相ノ決心方要望並

後藤子ノ意見書手交ノ件

付屬書一 非公式日露交渉基礎案

二 日露兩國非公式交渉基礎案余論

五月二十二日後藤子爵ハ首相官邸ニ於テ加藤總理ト會見シ「此所迄自分ト「ヨッフエ」ト下交渉シタル上ハ今後ハ政府ノ決心如何ニ依リ政府ノ為スヘキ事ニ屬ス仍テ何分御決定ノ上ハ其ノ御決心ヲ聞キタシ其ノ上ニテ「ヨッフエ」ニ返事スヘシ但シ不取敢「ヨッフエ」ニ對シ自分ノ意見ハ是迄同人ト往復シタル書類ト共ニ加藤首相ニ手交シ置キタリト申込ミ置クヘク尙非公式日露交渉基礎案ノ内ノ項目タケ

集ノ方法ニ付考慮ヲ運ラサレンコトヲ切望ス

二六五 五月二十一日

在ハルビン山内總領事ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

ヨッフエノ對日態度及勞農政府内部ノ情勢ニ

關スル島田副領事觀測報告ノ件

第一七二號

（五月二十一日接受）

松平局長ヘ島田ヨリ

各方面ノ意向ヲ綜合スルニ小官ハ「ヨッフエ」ノ立場ニ付左ノ通觀察ス

露国内務大臣等ハ此際日本トノ国交樹立ヲ有利必要ナリト認メ努メテ温和の態度ヲ執ルノ意向ナルモ「ヨッフエ」ニ於テ徒ニ彼一流ノ意地張リヲ為シ對日態度強硬ナルニ對シ一律憐焉タラザルモノアリ

莫斯科政府ハ最近日本及支那ニ「クーリエー」ヲ特派シタルガ其使命ノ内容ニ「ヨッフエ」「ダフチアン」等ニ對シ西欧諸國ト勞農トノ国交關係ノ非ナル情報ヲ傳達セシムルト同時ニ此際四週ノ情況ニ鑑ミ日本トノ關係ニ重キヲ置キ円滿解決国交樹立ニ努力スヘキ旨ノ訓令ヲ与ヘタルモノノ如シ即チ「ヨッフエ」ノ腕白の態度ハ必ズシモ勞農政府ノ意

（理由ヲ除キ）ハ内話スル積ナリ」ト述ヘタルニ對シ加藤總理ハ本件ハ重大問題ナルカ故ニ外務当局ヲシテ充分研究セシメ場合ニ依リテハ閣議ノ決定ヲ經サルヘカラサルカ故ニ回答スル迄ニハ少ナクトモ數日ヲ要スヘキ旨ヲ答ヘタリ右會見ニ於テ後藤子爵ハ加藤總理ニ對シ前記五月十日付「ヨッフエ」ヨリ後藤子爵宛書翰並覽書ノ外同子爵ノ意見トシテ左ノ如キ非公式日露交渉基礎案及日露兩國非公式交渉基礎案余論ヲ手交セリ

（付屬書一）

非公式日露交渉基礎案

一、「サガレン」問題ニ就テハ賣買若クハ日露合弁「シンダケート」ニ特許ヲ以テ利權ヲ与フルコトニ決定スルコト

本問題賣買價格ハ政府内示ノ案ニ比スレハ頗ル高価ナレトモ當時外相ニ算出ノ根拠ヲ問ヒタルニ精確ナル基礎アルニ非ス單ナル概算ナリトノコト故ニ推問ヲ止メタリ此回ノ彼ノ提案ハ余ノ予想ヨリモ意外ニ少額ナリシ更ニ之ヲ金貨十億「ルーブル」以下ニ低減セシムルコトヲ得ハ頗ル幸甚ナリ仮リニ金貨十億「ルーブル」以上トスレハ

油田、石炭等ノ礦区及山林ノ価値トシテ或ハ高価ナランカ若シ戦争ニヨリテ北樺太ヲ得ルトセハ恐ラクハ二三十億円以下ノ戦費ヲ以テ之ヲ得ルコト難カラン況ンヤ国策上ノ卓見ヨリ自然沿海州「バイカル」以東ノ利権ヲ占ムルノ形勢ニ到ルノ日アリ得ヘキコトヲ推想セハ其価格十億乃至十五億モ辞セサルモノアラン此際十分考慮ノ価値アラン

二、國際義務履行問題ハ之ヲ承認問題ノ外ニ措キ将来ノ問題トシテ留保スルコト

本問題ニ就テハ彼ハ「ゼノア」及「ヘーグ」會議ニ於テ其否定ヲ公然声明セシ処ナレハ帝國ニ對シテノミ特ニ之ヲ肯諾スルコト至難ナルヘシ帝國政府ニ於テ法理上主義上ノ問題トシテ連合諸國ノ態度如何ニ關セス之ヲ固執シ之ヲ主張シ之ヲ貫徹スルノ確信アリトスレハ格別唯列國ノ輦ニ倣ヒ形勢ニ順應セムトスルノ主旨ナルニ於テハ之カ為ニ本問題ト承認問題ト関連セシムルコトハ實際上ノ利害ニ顧ミ不得策ナルヲ以テ断然從來ノ所見ヲ變更シ之ヲ留保シテ将来列國會議ノ解決ニ待ツヘキコト

三、尼港問題ニ就テハ露國ヲシテ精神上並物質上ノ責任ヲ

ノ形式ヲ以テ之ヲ為サス予備取定ノ形式ニ於テ之ヲ定メ會議ニ於テ決定セラルヘキ常例ノ外交官領事官關係ノ再開ヲ規定スル条項中ノ一項カ正式承認ノ意味トシテ兩当事者ニ依リ解決セラルコトニ依リテ為スヘシ」トアルニ於テオヤ且ツ實際問題トシテ之ヲ見ルニ條約ノ締結ヲ遷延スルハ帝國ノ利益ニ非ス一步譲リテ「ゼノア」會議ニ際シ帝國使臣カ連合各國ト歩調ヲ一ニシテ承認ニ反對シタルカ故ニ國際道德上ノ責任アリト為スノ說アルモ斯ノ如キハ片務ノ責任ニアラサルカ帝國獨リ國際信義ヲ信奉スルモ爾余ノ列國ハ果シテ其政策ノ改廃ニ際シ帝國政府ト談合スルヤ否ヤ若シ列國ニシテ政策ヲ變更シタル後ニ於テモ帝國ハ單獨ニ此主張ヲ固執スルノ覚悟ナルヘキカ如何殷鑑遠カラス米國ト共同出兵シ彼ハ帝國ニ何等ノ交渉ナクシテ單獨撤兵ヲ宣シ帝國ハ其後圖ヲ誤リ更ニ大ナル帝國ノ損害ヲ被リタル辛キ經驗アルニ非スヤ今ヤ帝國ハ空シク犠牲ヲ払フノ過ヲ再ヒスヘカラス

六、刻下ノ緊要事ハ北「サガレン」問題ヲ本体トシテ政府如上ノ決意確実ナリトセハ非公式會見ノ手段ニ出テラルルコトニ在リ百事唯此一断ニ繫ル如上根本問題ノ腹案ヲ

認メシムルコト

但露國ニシテ日本軍カ同様ノ行為アリタリトノ実証ヲ挙ケタル場合ニハ之ヲ認メテ賠償額ヲ相殺スルコト

四、北「サガレン」駐在ノ軍隊ハ帝國ノ自由意志ニ基イテ撤退スルコト

尼港事件ノ保障占領ハ尼港事件ノ落着ト共ニ撤兵スヘキハ当然ニシテ年々一千万円ニ近キ経費ヲ以テ尼港問題解決督促ノ為ニ力ヲ費スコトハ頗ル賢明ノ国策ト云フヘカラス尼港ノ面目立チ「サガレン」我カ手ニ入ルニ至レハ幸ニ國威揚リ武ヲ汚スノ名ヲ免レ其実國家カ經濟上軍事上大ナル利益アルヘシ撤退ハ面目上威信上何等欠点ナキモノトス

五、承認ハ條約ノ審議ヲ始ムルト同時ニ生シ條約批准ノ日ニ完了スヘキコト

承認問題ニ就キテハ信認セサル國家ト條約ヲ締結スルハ不信任ノ人ト契約スルト同一ニシテ常理ニ反スルカ故ニ通商條約締結ト同時ニ別ニ宣言ヲ要セスシテ自然承認スル事實ヲ生スヘク之ヲ法律上ノ承認ト區別シテ學究的ニ論スルノ要ナシ況ンヤ彼ハ五月十日ノ覺書ニ於テ「声明

定メ置キテ各般ノ枝葉問題ニ就テハ非公式交渉ノ際更ニ日本ニ有利ナル結果ヲ齎ラスヤウ努力セラレテ可ナリ

七、從來政府カ余ニ交付セラレタル覺書ヲ通読シ其意ノアル処ヲ察スルニ自ラ如上ノ卑見ト一致スル点ニ到達スヘキモノト認ム或ハ外交技術ノ末節ニ走り強ヒテ迷路ニ入り細条ニ恋着シテ「ヒステリック」政見ニ囚ハレ帝國發展ノ大策ニ添ハサルノ憾ミヲ免レサルニ至ルモノナキニ非サレトモ斯ノ如キハ大局ヨリ達觀シ利害ヲ攻厥シテ帝國百年ノ長計ヲ樹立スヘキ方策ニ出テサルヘカラス

不幸ニシテ此卑見政府ノ容ルル処トナラスンハ余ハ是以上ノ交渉ヲ「ヨッフエ」氏ト試ムルモ徒爾ニ属スト信スルヲ以テ翻然其初メニ復ヘリ今日以後政府カ交渉ヲ非公式ニ進ムルノ便宜ヲ講スルニ努力スルカ如キ關係ヲ離レテ日露國民外交ニ全幅ノ努力ヲ傾倒セント欲ス

大正十二年五月五日起案

子爵 後藤 新平識

註(後藤子爵意見 是レハ未タ何人ニモ示サズ首相御内覽ニ供スル為メ作製セルモノ也トノ事)トノ註記アリ

(付屬書二)

日露兩國非公式交渉基礎案余論

一、帝國本位ノ對外政策ハ第一次ニ對東洋策即對三国(露支米)策ナリ第二次ニ對世界政策ナラサルヘカラス其對東洋策トシテ日露兩國ノ關係カ如何ニ重大意義ヲ有スルカハ明治ノ洪謨ニ敬示セラルル所並ニ各元老至深ノ苦心ヲ重ネ絶大ナル犠牲ヲ厭ハスシテ切念セラレタル所也此間ノ事情ハ今日ニ於テモ閣僚諸賢並ニ外務高等官僚ハ之ニ通曉セラレサル管ナク又之ヲ知悉セラレサル理ナキヲ確信ス然ルニ今回某々等ノ背景ヲ以テ「ヨッフエ」氏ニ通シタル經過ハ少クモ國家ノ重大事ヲ輕視シ其計畫ヲ漏洩シ一謀者ノ手ニ委ネテ閑戲ヲ試ミタルノ嫌アルヲ免レス仮令關係者如何ニ弁疏スルモ重大事ノ漏洩ヲ為シタルモノタルノ責任ヲ逃ルヘカラサルナリ彼謀者輩自ラ夫ノ外交ニ關スル交渉ノ基礎案ヲ編成シ得サルヘキハ勿論ナレハ彼等卑劣關係ハ其案カ全然政府案ト一致シ居ルヲ以テ立証シ得ヘシ彼ノ綱紀紊亂此ニ到ルモ之ヲ顧ミス隱ニ細作ヲ用ヒ大事ヲ漏洩スル雜輩カ外務当局ニ在ル間ハ最早ヤ此上大事ヲ共ニスル能ハサルヲ覺レリ依テ此際此經路ヲ公表シテ國民ニ訴ヘ先ツ社会ノ

一、世界大戰後ニ於ケル帝國ノ對外政策ハ如何ナル活動及能率ヲ發揮シタルカ

単ニ變動的地位ニ立チシ為戰時ニ於ケル異常ノ努力貢獻ニ比較シ公正ナル收穫分配ヲ得タルヤ否ヤヲ疑ハシムルモノナキニアラサルカ

勿論或時代ニハ受動的ナル立場ヲ以テ却ツテ利益ト認メララレタル事實ナシトセサルモ現時ニ在ッテハ積極的ナル主動の方策ニ拠ルニアラスンハ以テ國勢ヲ伸張シ能ハサルヘシ

一、歐米先進國ハ大戰亂ノ激動及其余波ヲ受ケ今尚懊惱ノ狀態ヲ脱セスト雖モ這般ノ大試練ト活動教訓トニ由リ臆テ其中ヨリ將來ノ優勝國ヲ発見スルニ至ルヘキハ想像ニ難カラス英米兩國ヲ始メトシ仏國ノ如キ將又安逸ノ如キモ大戰ノ痛苦ヲ忘レサル限り所謂艱難汝ヲ玉ニスルノ効果ヲ齎ラスヘシ之ト同時ニ一時ノ好景氣ニ依リ外觀ノ繁榮ニ誇ルモノハ他日必ス因果応報ノ理法ニ支配サレサルヲ得ス日本ノ現状ハ頻リニ樂觀サレツツアルカ如キモ世界經濟ノ變態的ニ膨張セル結果ニ過キス一朝逆勢ニ遭逢セルノ後將來果シテ如何ナル狀態ニ陥ルヘキ乎識者經世家ノ嚴肅ナル考慮ヲ

制裁ニ問ヒ以テ非國民の外交ノ陋秘ヲ洗濯スルコトニ益微衷ヲ致サントス

一、現時世界ノ平和ニ反スル禍根カ歐洲ニ在リトスルハ一面ノ信ナレトモ他面殊ニ帝國ヲ中心トスル吾人ノ責務ヨリ稽查セハ第一歐米人カ大戰前後ニ新ニ「バルカン」化シタル一大陸ヲ我隣接地支那ニ建設シタルコト否我隣接地ノ不安崩壞若クハ分裂ヲ促シツツアリテ之カ責ヲ日本ノ軍國主義ニ歸セントシタルコト尚今日吾人ノ耳目ニ新ナル所ナリ軍國主義必スシモ不可ナラス軍國主義ハ名ニ非スシテ其實ヲ得ルヲ要ス真ノ軍國主義ノ極ハ平和ニ歸スヘキハ当然ナリサレハ日本ヲ中心トシテ講スヘキ東洋平和ノ方策ハ日露關係ノ解決ヲ差措キテハ之ヲ實現スル能ハス此策タル決シテ列國ニ於テ異論ヲ挾ムヘキ余地ナキハ勿論之ヲ高処大局ヨリ觀察シテ東洋平和ノ鍵鑰タリ此確乎タル我カ對露政策一定セハ其ノ世界ニ及ホス影響ハ寔ニ至仁至高ナルモノアルヲ思ハサルヘカラス試ニ其一例ヲ挙げンカ日露ノ接近ハ暗ニ支那ノ妄動ヲ制シ在支米國人ノ指頭策略ヲモ制スル効果アルヘキヲ以テ啻ニ東洋ノ小波瀾ヲ防クノミナラス安ヲ得テ經濟的發展ノ途ヲ開クヘシ

必要トスヘシ今日世上減稅論ヲ唱フルモノ多ク又我國債負擔額ノ少キニ安意スルノ色アリ減稅固ヨリ絶對的ニ非ナリトセス國債負擔ノ輕少ナルハ殊ニ至幸ナリトセンモ(經濟的ニ有意義ナル生産の國債ハ目下多キヲモ厭ハス何トナレハ生産的の良國債ハ資金ノ先取權ノ斷ニシテ先憂後樂ノ策タルコトヲ思ハサルヘカラス是レ經濟上ニ於テ一種ノ逆取順守ノ主義ト云フモ可ナリ宜シク十年ノ苦ヲ以テ百年ノ樂ヲ創造スヘシ若シモ此間帝國ニ天与ノ福ヲ受ケサレハ必ス禍アラシク恐ルヘシ)而モ之カ為ニ其財力ヲ無益ニ放散シ其經濟資源ヲ無意義ニ費消センカ是レ恰モ底無シ囊ニ財ヲ容ルルカ如ク策ヲ以テ水ヲ掬フノ類ニアラサルカ是到底其ノ好果ヲ收穫スルノ期ナキヲ如何セン先進國民カ多大ノ重稅及國債ヲ負擔シツツ刻苦經營毫モ怠ラサルニ拘ラス我國獨リ之ヲ傍觀シテ徒ラニ場當リノ小事小策ニ耽ルハ寧ロ過失ナリ(知ラス國民ハ重稅ヲ払ヒタルヨリモ將來ノ不幸大ナルモノアラシコトヲ)若シ此小策ニシテ各党派ノ利用若クハ濫用スル所トナリ互ニ競争シテ民心迎合ノ具ニ供スルニ到ランカ其弊ト其責ヲ負フノ不幸ハ何人ニ歸スヘキカ獨リ國民ナルノミ若シ我同胞ニシテ真ニ自治的の自覺アラハ宜シク

我財力ヲ積極的ニ利用シテ百年ノ長計ヲ画スヘキ用意ナカ
ルヘカラズ

一、今仮リニ日露交渉ノ上ニ於テ樺太北半ノ讓渡ヲ得ヘク
ンハ必スシモ其財源ノ欠乏ヲ患ヘス其籌策調査考究ニ足ラ
サル所アルヘキ点ニ着想スルノ要アルニ非サル乎且帝國ニ
取リテハ如何ニ其価値ヲ認ムヘキ乎之ニ対シテ単ニ石灰、
石油、鉄、森林、漁業等ノ唯物的計算ノミニ局限シテ之ヲ
測定セハ其籌算宜ヲ得タルモノト云フ可カラスノハ少クト
モ下記ノ教点ヨリ考察セラレサルヘカラス即チ

(一)第一ニハ實質上ノ価値ヲ評量スルト同時ニ地形上ノ關係
(地ノ理)ヲ知ラサルヘカラス是レ例ヘハ或ル商舖ヲ購
フニ方リテ其ノ所有品ノ外其ノ土地及看板料ヲ計數ノ中
ニ置カサルヘカラスルカ如シ

(二)第二ニハ政府ノ經綸及國人ノ自覺ノ当否ニ依ッテ将来ノ
如何ナル新価値ヲ生スヘキカヲ真摯冷靜ニ稽察スルコト
ヲ要ス帝國ノ人口ハ年々七十万民ノ増殖ヲ告ケツツアル
ノ秋ニ充リ「ザバイカル」以東、沿海州及「サガレン」
ニ亘ル広大ナル地域カ北樺太ヲ領有スル事ニ依ッテ帝國
ノ為ニ如何ナル影響如何ナル關係ヲ開展シ来ルヘキ乎單

去ッテ悔ヲ万世ニ遺スナキヤ是レ最モ深ク思慮ヲ運フヘ
キ切実微妙ノ考察点タルヲ信ス昔時ニ在ッテハ不經濟的
ニシテ經濟ナルハ戰勝ニヨリテ新版圖ヲ得ルニアリト云
ヘリ現時昔日ト異ナリ軍略戰ヲ措キテ經濟戰時代ナリ此
秋ニ於テ新版圖ヲ領得スルノ武器ハ輾禍作福ノ偉略ニ存
ス偉略ノ実行ニ方ツテハ時機ト方策ト併セ具セサルヘカ
ラス乃チ此間ニ尼港掉尾ノ善後策アラン其策タル文治即
チ一大武備タラン乎

大正十二年五月十五日

子爵 後藤 新平 未定稿

註 今回某々等以下ノ記述ハ五月十日付「ヨッフエ」覺書(既出
但シ此ノ部分ハ掲載ヲ省略セリ)中ニ於テ「ヨッフエ」ハ三月
初旬ヨリ數回ニ互リ政府及政友會ト密接ナル關係アリト称ス
ル森猛熊ナル人物ト接触セル処同人ヨリ提示アリタル協定草
案ハ長春會議ノ際ノ日本案ト殆ト同ジク、日本外務省ヨリ出
テタルモノナルコトヲ推知シ得タルコト並ニソノ接近ハ「ヨ
ッフエ」ノ肚ヲ探ラン目的ニ出タルモノニ過ギズトナシ、日
本外務省ヲ批難セルコトヲ指ス

二六七 五月二十二日

加藤首相ヨリ
松平欧米局長宛

五 日露国交回復交渉關係 二六七

ニ殖産工業上ニ於ケル利権ノ開發ヲ限度トセス或ハ移植
民政策上ヨリ或ハ對世界的地位上ヨリ或ハ國防の見地ヨ
リ更ニ深遠ナル計慮ヲ下ササルヘカラス将来ノ平和ハ如
何ニシテモ必然軍事の廟算ヲ閑却スルヲ容サス否是對外
關係ノ主題ナリ目下「カモフラージュ」ニモセヨ世界列
國軍縮ヲ高調シ当面露國共產開放ヲ唱フ我先ツ之ニ和シ
地ノ利ヲ占メ單ニ經濟的ニ偏重シタルモノノ如ク和平ニ
熱中シテ可ナリ此間大々的經綸アリ内ニ堂々の陣容ヲ
存セサルヘカラス

(三)第三ニ留意スヘキハ殊ニ緊要ナル問題アリ若シ試ミニ戰
争ニ依ッテ其目的ヲ達セント欲セハ果シテ幾十億ノ國費
ヲ費消シテ戰勝ヲ得ルニ非サレハ之ヲ獲得スル能ハサル
ノ一事ナリ又仮リニ我常ニ勝算アリ此ノ種ノ手段ヲ辞セ
ストスルモ今後ニ於テ果シテ適當ナル機會来リ得ヘキヤ
否、言フ迄モナク今後戰爭ニ依ル領土擴張若クハ征略ノ
策ハ既ニ時代ノ容認スル所ニアラス時代錯誤ヲ免レス又
之ヲ平和的ニ授受セント欲スルモ今日ヲ措キテ再ヒ機會
アルヘキヲ知ラス露國ノ國情並列國トノ關係ニ照ラシ此
ノ際之ヲ經濟的ニ解決セサル限り千載一遇ノ好機空シク

後藤子爵ヨリ日ソ交渉ニ對スル政府方針照會

アリタルニ付對案作成方指示ノ件

本日午後三時後藤子ト會見別紙三種ノ書類ヲ接手セリ
内多クハ昨日内覽ニ供セシモノト同様ナリ

後藤子曰ク

「ココマデ余ト「ヨ」ト下交渉セシ上ハ今後ハ政府ノ決
心如何ニ依リ政府ノ為スヘキ事ニ属ス依テ何分御決定ノ
上ハ其ノ御決心ヲ聞キタシ其ノ上ニテ「ヨ」ニ返事スヘシ
但シ不取敢余ノ意見ハ是迄貴下ト往復セシ書類ト共ニ首
相ニ手交シ置ケリト申込ミ置クヘシ尚1ノ内ノHeading
丈(理由ヲ除キ)ハ内話スル積リナリ」

余曰ク

「本問題ハ大問題ナルガ故ニ外務ヲシテ充分研究セシメ
場合ニ依リテハ閣議ノ決定ヲ經サルベカラザルガ故ニ御
返事スルニハ少クモ數日ヲ要スヘシ云々」

右ノ次第故御研究ノ上對案ヲ作成サレタシ

五月二十二日夕

友三郎

松平君

二六八 五月二十三日 後藤新平(ヨッフエ) 会谈要旨

日露国交回復交渉ニ関連スル諸問題ニ付意見交換ノ件

(五月二十三日築地精養軒「ホテル」ニ於テ)

後藤子爵ハ昨二十二日加藤首相ト会見ノ要旨ヲ伝ヘ「ヨッフエ」氏療養ノ目的ヲ以テ来遊セラレタル以来自然ノ成行キカ日露会商ノ下話迄伸展シ来リタルノミナラス派生ノ事件タル漁業問題カ円満ニ解決スルニ至リタルハ一ニ露国政府ノ寛大ナル態度ト「ヨッフエ」氏ノ懇篤ナル斡旋ノ齎ナリトシテ感謝ノ意ヲ表シタルニ対シ「ヨッフエ」大使ハ其ハ寧ロ貴下ノ御尽力ノ結果ニ外ナラスシテ小生ヨリ同様感謝ノ意ヲ表スル次第ナリ但此処ニ一事伺ヒ度キコトアリ即チ貴下ハ向後事件ヲ政府当局ノ手ニ委シ本件ヨリ退カルル御主旨ナルヤ否ヤ是ナリ

後藤子爵ハ

本件ハ漸次進捗シ最早此上ハ政府当局ノ手ニテ公式ニ商議ヲ進ムヘキヤ否ヤヲ決スヘキ順序トナリタルヲ以テ官規上之ヲ当局者ノ手ニ委ヌルマテニシテ日露親善關係ノ促進ニ

脱退セラルルノ報到ラハ忽チニシテ反感ヲ惹起スルニ至ルヘシ仮令予備的交渉ノ中止トマテ行カサルモ子爵ノ脱退ノ報タケニテ意外ナル事變ヲ惹起スルナキヲ保セスト

後藤子爵ハ之ニ対シ

昨二十二日浅井総理大臣秘書官ノ新聞記者ニ説明シタル通り自分ハ本件ヨリ手ヲ退クノ意ニ非ス唯事此処ニ至リテハ之ヨリ以上話ヲ進ムルハ政府ノ職務ニ属スルコトナルヲ以テ之ヲ当局者ノ手ニ委ネタルマテニ過キス

「ヨッフエ」大使ハ

外務省当局者ニ非サル者カ外交ノ下相談ノ任ニ当ルコトハ決シテ稀レナル事例ニ非ス若シ外務省ニシテ下相談ニ参加スル必要アラバ宜シク後藤子爵ノ指揮ノ下ニ外務ノ外交事務官ヲシテ付属セシムルモ亦可ナラスヤ抑先般来後藤子爵ヲ介シテノ日本政府ノ希望ニ対シ労働政府ニ於テ好意的ニ応諾ノ態度ヲ執リタル所以ハ一ニヨク露国ヲ解シ露国ニ好意ヲ有セラルル後藤子爵ニ対スル好意ニ外ナラス彼ノ加賀美事務官ノ如キ同氏ガ国事ノ牒報ニ連坐シタル確証アリタルニ拘ハラス其ノ釈放ノ如キ余ニ於テ容易ニ其ノ目的ヲ達シ得ラルルモ若シ後藤子爵ノ脱退ニヨル露国輿論ニ変化ヲ

就キテハ依然努力スル決心ナリト答ヘラル
「ヨッフエ」大使ハ重ネテ

本件ハ事極メテ重大ナリ蓋シ露国ニ於テハ日本ト其ノ情勢ヲ異ニシ報道ノ当否ハ暫ク措クモ露国国民間ニ於テハ元ハ日本ノ軍閥、今ハ反動派ヲ以テ露国ニ敵対スルモノナリト思惟シ後藤子爵ノ率イル運動ヲ以テ露国ニ好意アルモノト認メ居レリ

今若シ後藤子爵カ本件ヨリ公然脱退シ単ニ非公式ニ親善關係ニ努力スルニ止マル旨ノ報道ニシテ露国ニ達センカ是露国ニ反对スル派ノ勝利ナリト解釈セラルヘシ政府当局ニ対シテハ余ヨリ暗号電報ニテ其事由ヲ説明シ得ヘキモ露国ノ民衆ニ対シテハ余ノ力ヲ以テシテハ其ノ誤解ヲ解クニ由ナカラン而シテ其結果ハ意外ナル不祥ナル反動的気分ヲ勃発セシムルニ至ラン現時「チタ」政府ノ日本人ニ対スル経済的利権ノ譲渡ノ如キ余ヲ以テ見レハ或ハ其ノ過キタルナキヤヲ思ハシムルモノアル位ニシテ御互ニ解決シタル漁業問題ノ如キハ僅カニ一部分ニシテ日本人ノ西伯利亚ニ於ケル森林鉱山ニ対スル利権運動ノ如キ露国ニ於テ好意的ニ之ヲ迎ヘツツアル有様ナルモ若シ一朝後藤子爵ニシテ本件ヨリ

呈スルコトアラハ余ニ於テ如何トモ為シ難カルヘシ今日既ニ種々ノ葛藤アルニ今更新規ノ不祥事ヲ惹起センガ如キハ甚タ遺憾ナリト云フヘシ

後藤子爵ハ之ニ対シテ

貴意ノアル所ハ之ヲ了承セルヲ以テ其ノ旨総理大臣ニ御伝ヘスヘシト答ヘ此間答ヲ打切りタリ

此処ニ於テ「ヨッフエ」大使ハ後藤子爵ニ若干ノ質問ヲ試ミタリ

第一、後藤子爵ノ所謂国際義務履行問題ハ承認問題ヨリ之ヲ引キ放シ将来ノ国際的ノ解決ニ保留スルトノ主義ハ国際義務ノ履行ヲ以テ承認問題ノ前提トシ又ハ予備交渉ノ条件トスル意ナラハ露国ニ於テ絶對ニ承認シ難キモ若シ露国ハ国際義務ノ履行ニ関シテハ将来国際會議ノ際日本ヲ他ノ連合諸国ヨリモ不利益ノ地位ニ置カサルヘキ義務ヲ負担スルタケニテ満足セハ「ヨッフエ」大使ハ「国際義務ニ関シテ日本ニ最惠国約款ヲ与フルノ意アリト付言シタリ」露国ニ於テ承認シ得ヘシ

後藤子爵ハ之ニ対シ
国際義務ノ問題ハ日露両国ニ取リテノ暗礁タルノミナラス

連合諸国トノ関係モアレハ之ヲ将来ノ国際會議ノ決議ニ一任シ承認問題ト相触レシメサルノ主旨ナリト答ヘラレタリ「ヨッフエ」大使ハ参考ノ為一言スヘシトテ

元来本問ハ「ゼノア」會議ノ当時仏國ヲ除ク総テノ連合諸国ニ於テ国際義務ノ履行問題ハ問題中戰時債務ハ之ヲ撤去スルモ異議ナシ唯戰前ノ債務ノ履行及革命ノ措置ニ由ル個人損害ノ保証ヲ承認スルトノ意向ナリシナリ現ニ「ロイドジョーデ」ノ宿所ニ於ケル連合諸国代表者ノ會合ノ際「ロイドジョーデ」ハ戰時債務ハ之ヲ除外スヘシト述ヘタルニ日本代表者ハ何等異議ヲ挿マサリシナリ而シテ日本ノ債權三億ハ軍需品ノ代金ニ過キササルナリ

次ニ尼港事件ハ露國ノ權力範圍外日本ノ軍事占領区域内ノ出来事ニシテ露國政府ニ有形無形ノ責任ナキハ勿論ナリ露國政府カ犯人ヲ死刑ニ処シタルヲ以テ日本國民ヲ満足セシメタルモノト信ス然レトモ日本ニ於テ本件ヲ宣伝ニ利用シタルヲ以テ政府ノ面目上露國ニ責任ヲ負ハシメサルヘカラストスレハ日本軍隊ノ非行ト相殺スル意味ニテ之カ責任ヲ負担スヘシ露國カ日本軍隊ノ非行ヲ現実ニ証明シ得サル限り露國ノミニ尼港事件ノ責任ヲ負フト云フ形式ニテハ露國ノ

貴説ノ通リト答ヘラレタリ

「ヨッフエ」大使ハ終リニ臨ンテ

露國政府ハ日本及日本人ニ對シ新条約締結ノ際決シテ旧条約ニ於ケルヨリモ其位地ヲ不利ナラシムルコトナキ旨ヲ確言セラレタリ

以上ノ會談ヲ終ヘタル後「ヨッフエ」大使ハ次ノ依頼ヲ後藤子爵ニ致シタリ

(一) 査証官ノ件

露國ハ日本軍撤退未タ漸ク半歳ナルニ過キササルヲ以テ旧時ノ如ク日本ノ漁場地域ニ税関ヲ設置スルコト能ハス是ニ於テ浦塩及金^金月^月ニ於テ査証スルコトニ決シタルヲ後藤子爵ヲ經テ日本ニ於テ査証スベク日本政府ヨリ申込マレタルニツキ便宜ノ処置トシテ査証官ヲ派遣スルニ至リタルモノナリ然ルニ船舶証明書健康証明書ハ当地ニ於テ発給スルモ出帆ノ際名簿通りノ人ヲ乗載スルヤ積荷中禁制品タル焼酎ナキヤ等形式ナカラ一応ノ検査ヲナスコト必要ナリ露國ハ査証官ノ派出ニヨリ税関ノ検査ヲ廃止スルコト能ハス日本ノ税関ニ於テ検査スルモ其ハ輸出ノ検査ニ止マリ輸入ノ検査ニアラス査証官ノ検査ノ際日本ノ税関ニモ立合ハシムルハ差

面目ヲ維持シ難シ
後藤子爵ハ之ニ對シ

本件ハ貴説ノ如ク現実ノ賠償金支払ナク相互帳消シシテ相互ノ面目ヲ全フセントスル主旨ナリ

「ヨッフエ」大使ハ

撤兵カ日本政府ノ自由意思ニテ行ハルルコトハ勿論ナルモ何等カノ形式ニ於テ——總理大臣又ハ外務大臣ノ声明ナリ覚書ナリ——其ノ時期ヲ約束セラルルコト露國側ニ取リテ予備交渉ノ条件ナリ余カ先般無条件ノ語ヲ使用シタル主意ハ曾テ政府某方面ノ意向ナリトシテ承認ノ条件トシテ「ポウツマス」条約ノ漁業權ノ尊重ヲ挙げラレタル例モアリタレハ撤兵ノ条件トシテ何カ新条件ニテモ提出スルコトナキカト懸念シテ特ニ撤兵ハ無条件ニテ行ハルルモノナリヤト反問シタル次第ナリ

「ヨッフエ」大使ハ更ニ

承認ハ余ノ提案通り交渉ノ開始ノ際事實上ノ承認ヲ以テ始マリ外交官交換ノ条項ノ挿入ニ因リ之ヲ正式承認ト解シテ終結スルノ意ナリヤト問ヘリ
後藤子爵ハ

支ナカルヘシ就テハ函館ニ派遣スル兩査証官ニ對スル身分証明書ニ對スル余ノ署名ノ真正ナルコトヲ日本官憲ニ於テ証明セラルルコト並ニ函館ノ当該官庁ニ對シ前陳ノ事情ニヨリ船舶及乗組員ノ点検ヲ許可スル旨ノ証明書ヲ下付セラルルヤウ御配慮アラソコトヲ請フ

(二) 書記官ノ件

昨今日本人ノ面談ヲ求メ又ハ書面ニテ問合セヲナスモノ著シク増加シ来リ且政府トノ暗号通信ノ頻繁トナリタル結果二人ノ書記官ニテハ夜ヲ日ニ次クモ是足ラサルヲ以テ余ハ北京ヨリ若年ノ書記官ト暗号係ノ女子ヲ呼寄せタルニ付兩人ニ對スル入國ノ査証ヲ与フルヤウ御配慮願ヒタシ

二六九 五月二十六日

ヨッフエヨリ
後藤新平宛

後藤子爵ノ好意ニ對シ謝意表明並ニ日本軍艦

ノ露國領海侵犯ニ付抗議ノ件

「アドルフ・ヨッフエ」氏ハ後藤子爵カ北京ノ査証(註曰、此度北京ヨリ呼寄せタル「ヨッフエ」氏付「クリーエ」一名、秘書一名並ニ暗号電報取扱者一名ニ對スル日本入國査証ノ意)ノ問題並ニ函館行官吏(註曰、函館駐在露國漁

業査証官ノ意ノ問題ヲ速ニ解決センカ爲深甚ナル御厚情ヲ以テトラレタル勞ニ対シ最モ誠実ナル感謝ノ意ヲ表スルモノナリ

サリ乍ラ「ヨッフエ」氏ハ昨年坐礁シタル日本ノ一駆逐艦引揚ノ目的ヲ以テ日本カ予メ露国政府ニ国際法上ノ慣例ニ基ク何等ノ照会ヲ爲スコトモナク露国ノ領海―「カムチャツカ」―ニ三隻ノ駆逐艦並ニ一隻ノ運送船ヲ派遣シタル結果重大ナル紛糾ノ生シ得ヘキヲ予期セサルヘカラストノ事ヲ貴下ニ通告セサルヘカラサルヲ甚タ遺憾トス

二七〇 五月二十九日

後藤新平ヨリ
ヨッフエ宛

日本軍艦ノ露国領海侵犯抗議ニ対スル日本海

軍省当局ノ弁明通報ノ件

今回日本海軍艦艇ノ露領沿岸寄港ニ関シ政府当局ヘ問合せタル処右ハ最近数年間斯種ノ事柄ニ付テハ露国官憲ヘ予報ヲ爲サスシテ執リ行ヒ来レル例蹤モ有之且ツ震災地方ニ於ケル居留日本人民ノ状況視察上至急ヲ要スル事情等ノ爲出動セシメタル次第ニシテ他ニ何等理由無之趣ニ御座候

能ハサルコトアリ得ヘク此種具体的問題ニ付テハ各箇ノ場合ニ就キ和衷審議スルヲ要ス

第二条件ニ対シテハ事実上ノ承認ナラハ格別法律上ノ承認ヲ得ムトスルニハ少クトモ(イ)尼港事件ノ解決(ロ)国際義務ノ履行等必要ニシテ前記事項ニ付確實ナル了解ヲ得ルニ於テハ勞農政府ニ法律上ノ承認ヲ与フルコトヲ考量スルモ差支ナカルヘシ尚「ラパロ」条約ノ如ク双方ノ要求全部ノ抛棄ハ日露關係ニ適用スヘキ理由及基礎ナシ

第三条件ニ対シテハ薩哈噠州駐兵ハ沿海州ヘノ出兵ト全然其ノ起源及性質ヲ異ニシ尼港事件解決ノ爲ノ保障占領ナルヲ以テ同事件ノ解決ヲ見サレハ撤兵スルコト能ハサルハ勿論ナルニ依リ成ルヘク速ニ之ヲ解決ニ関シ確實ナル了解ヲ得以テ撤兵ノ期日ヲ決定スルコト然ルヘシ

ト謂フニ在ルヲ以テ前記「ヨッフエ」氏ノ条件ト未タ相異スル所アルノミナラス尼港事件解決ノ条件及国際義務ノ履行ニ付テモ「ヨッフエ」氏ノ提議ハ満足ノモノト認ムルヲ得ス然レトモ帝国政府ハ日露両国ノ親善ヲ望ミ両国ノ間ニ蟠ル諸懸案ヲ速ニ解決シ修交通商關係ヲ確立スルコト日露双方ノ爲ニ望マシト信スルニ付此際露国政府ニ於テモ同様

二七一 六月二日 閣議決定

日露兩國ノ親善、修交通商關係確立ノ爲兩國政府当局間ニ予備的折衝ヲ行フコトヲ決定ノ件

一、帝國政府ハ後藤子爵ヨリ今日迄同子ト「ヨッフエ」氏トノ間ニ行ハレタル私的会谈ニ関シ詳細通報ニ接シタリ一、「ヨッフエ」氏ハ交渉開始ノ基礎条件トシテ

対等平等

正式条約ノ締結(正式承認ヲ含ム)

撤兵時期ノ明示

ヲ主張シ居ルモ帝國政府ノ右ニ対スル見解ハ曾テ後藤子ノ質問ニ対シテ爲シタル如ク第一条件ニ対シテハ同条件カ單ニ主義トシテ日露兩國対等ノ立場ニ於テ商議スヘシトノ意味ナラハ別ニ差支ナキモ之ニ依リ我方ノ有スル旧條約上ノ既得權其他正當ノ權利ヲモ抛棄セシメムトスルノ意ヲ包含セルニ於テハ到底承諾スルヲ得ス又且下兩國ノ国情及法制著シク相異スル關係上全然相互の形式ヲ採ルニ於テハ我方ハ實質上露國側ニ比シ不利ナル結果ヲ生スルコトナシトセス從テ此ノ如キ場合ニハ必スシモ一律ノ文句ヲ用フルコト

希望スルニ於テハ右意見ノ差異アルニ拘ラス兩國政府当局ノ間ニ予備的の見行ヒ各種ノ重要問題ニ関シ互ニ友誼的精神ヲ以テ腹藏ナキ意見ノ交換ヲ行ヒ正式交渉ニ入ルコトヲ得ヘキ基礎ヲ発見スルコトニ努力スルコトヲ辭セサルヘシ

二七二 六月八日

後藤新平
ヨッフエ
会谈要旨

日本政府ハヨッフエ氏ト非公式交渉ヲ開始セント欲スル旨ノ加藤總理大臣ヨリヨッフエ氏ヘノ申入ニ関スル件

正第二十七号

(六月八日築地精養軒ニ於テ) 後藤子爵ハ加藤總理大臣ヨリ次ノ趣旨ヲ貴下ニ伝ヘ貴下ノ御返答ヲ承ル様依頼セラレタリ

一、政府ハ貴下ト非公式交渉ヲ開始セント欲スルモ從來貴下カ貴國政府ノ予備条件トシテ通告セラレタル三ヶ条並ニ余カ自己ノ私案トシテ政府ニ提示シタルモノヲ始メ從來貴下ト余トノ間ノ私的会谈ハ一切是ヲ撤去シ所謂白紙主義ニテ更ニ外務省当局官吏ヲシテ貴下ト交

渉ヲ開始セシメントス

二、貴下ハ是迄余ノ仲介ニヨリテ日本政府ニ知ラレタルニ過キサルヲ以テ今回非公式交渉ヲ開始スルニ就テハ貴国政府ヨリ日本政府ニ向ッテ貴下ヲ極東全權トシテ非公式交渉ニ当ラシムル旨通牒アリタキコト

三、貴下ノ病状ニ顧ミ日本政府ハ精養軒ニ於テ交渉ヲ開始スルコトニ異議ナシ

「ヨッフエ」氏ハ是ニ対シ後藤子爵ノ仲介ノ勞ヲ感謝シタル後右総理大臣ノ提案ニ対シテハ異議アリ余ト貴下トノ会谈ハ二期ニ分レ第一期ハ純然タル私人間ノ私話ニ過キサルモ第二期殊ニ五月六日以降ハ日本政府ノ意向トシテ各種ノ条件ヲ伝達セラレ其際暗号発信権モ許容セラレタル次第ナルヲ以テ是ヲ非公式交渉ト称スルニ何ノ効力是有ラン若シ夫レ今回直チニ公式ノ交渉ヲ開始スルコトナレハ従来ノ余ト貴下トノ会谈ヲ帳消スルコト或ハ能ハサルニ非サルモ「今又外務省ノ官吏ヲ以テ更ニ非公式交渉ヲ開始セラレントスルハ其意ヲ解スルニ苦シム」

後藤子爵ハ是ニ対シ事實ハ貴説ノ如クナランモ余ハ日本政府ヲ代表スル権限モ資格モナク只総理大臣ノ諒解ヲ得テ私

ハ今回ノ交渉ニハ後藤子爵自身公式資格ニテ交渉ヲ指揮セラルコト能ハサル立場ニアリトスレハ内田外務大臣自身之レニ当ラルコトヲ至当ナリト信ス其他ハ日本ノ外務省ニ如何ナル人物アルヤヲ知ラサルヲ以テ余ヨリ何等ノ希望ヲ申出ツヘキニ非ス只余ノ病状ヨリシテ交渉ニ露語ヲ以テスルコトヲ得ハ好都合ナリトス

後藤子爵ハ日本政府側ノ交渉員ニ就テハ相当政府ニ於テ考慮セラルルコトナラン新聞紙上種々ノ推測行ハルルモ政府ハ今後ノ閣議ニ於テ人選ヲ行フコトト信ス

「ヨッフエ」氏ハ極東全權トシテノ余ヲ正式ニ勞農政府ヨリ通牒セラレタシトノ加藤総理ノ要求ハ至当ナルヲ以テ勞農政府ニ其趣ヲ伝フヘシ然レ共白紙主義ニテ交渉ヲ開始シテモ従来難關ト認メラレタル条項即チ尼港事件國際義務ノ履行ニ関スル日本政府ノ態度ニシテ新聞紙ノ報道スルカ如キモノナレハ交渉ハ直チニ決裂ノ他ナカルヘシト悲觀シ居レリ是ヲ以テ余ハ「モスクワ」政府請訓ノ際余ノ此ノ懸念ヲ抱クモノナルコトヲ後藤子爵ヲ通シテ日本政府ニ申出テタル旨ノ電報ヲ付記致シタシ

後藤子爵ハ其付記ハ一応加藤総理ノ意向ヲ確メタキニ就キ

見ノ交換ヲ為シタルニ止リ其間政府ノ意ノ在ル所ヲ付度シテ交渉開始ノ予備条件ヲ談シタルニ過キス又漁業事件ニ就テハ政府ノ依頼ヲ受ケ暗号発信権ニ就テハ政府ノ許諾ヲ伝ヘタルコトモアリサレド余ハ政府ヨリ公式ニ貴下トノ非公式交渉ヲ委任セラレタルニハ非サルヲ以テ日本ノ法制上資格ニ欠クルトコロアリ

「ヨッフエ」氏ハ是ニ対シ現代國際交渉ノ実況ニ照シテ之ヲ見ルモ現時ノ變局ヲ變理スル講和其他ノ条約協商ヲ締結スルニ就テハ其ノ事ノ重大ナルモノハ総理大臣自ラ其局ニアタリ又ハ議院ノ首領株是ニ任シ外務當局者ハ専門家トシテ是ニ関与スルニ過キス貴下ハ資格無シト云ハルルモ上院議員タルノミナラス曾テハ外務大臣タリシ経歴モアリ何等資格ニ欠クルトコロアルニ非ス又余ハ是迄幾多ノ条約締結ヲ首席全權トシテ担任シ委員中ニハ大臣格ノモノモ之レアリタリ且余ハ他国ナレハ大臣ニ相当スル人民委員タリシ事アリ凡ソ國際ノ慣例ニ依レハ大使派遣ノ際ハ予メ相手国ノ意向ヲ確メタル後任命スルモノナルカ今回ハ講和商議ノコトナレハ相手国ノ承認ヲ得ル必要ナキモ交渉ノ際ニハ双方共對等ノ階級ノモノヲ派遣スルコトナリ居レリ此故ニ余

其上ニテ打電セラレタシ余ハ今晚直チニ総理ト会見ノ筈ナレハ総理ノ意向ハ後刻御知ラセ致ス可シ

「ヨッフエ」氏ハ会見ノ場所及方法ニ就キ加藤総理ノ配慮ヲ謝シタル後今回ハ非公式交渉ノコトモアリ余ハ何分衣服ヲ着スルコト靴ヲ履クコトハ困難ナルノミナラス到底立チ上リテ数時間ノ会谈ニハ堪ヘサルヲ以テ可成ハ此儘ニテ会谈致シタク若シ此事叶ハスハ極ク近キ室ヲ日本政府ニ於テ借り受ケ余ハ日本全權入室前松葉杖ニテ該室ニ趣キ横臥ノ姿勢ニテ会谈シタシ

後藤子爵ハ「ヨッフエ」氏現在ノ室ニテモ會議室ラシク整頓スルニ於テハ差支無カル可シト信スト

「ヨッフエ」氏ハ余ハ公式ニハ加藤総理ノ提案タル白紙主義ニテ外務省ノ官吏ト交渉スルコトニハ反対ナルモ而モ加藤総理力此処迄配慮セラレタル誠意ヲ諒トス就テハ後藤子爵ニ於テ日本内ノ形勢ニ顧ミテ加藤総理ノ提案ヲ承諾スル様勸告セラルルナラハ余ニ於テ是ヲ承諾スヘシ但シ余ハ一ノ質問スヘキコトアリ貴下ハ政府交渉ノ開始後ハ全ク手ヲ引カルルトノ事ナルカ此事ハ露国民ノ心裡ニ多大ノ影響アルコトト信スルモ公式ニハ之ヲ如何トモナシ難シ只日本

政府ノ官吏トノ非公式交渉始マリタル後モ余ノ友人トシテ余ノ質問ニ答ヘラレ交渉中モ往来セラルルコトヲ御承諾相成ルヤ否ヤ是ナリ

後藤子爵ハ貴下ノ友人トシテ往来スルコトハ毫モ差支ナク又会谈ハ必スシモ交渉ニ触ルルモノトハ限ラサルヘシ

(追加)

後藤子爵ハ「ヨッフエ」氏ニ告クルニ露国承認ノ實際上ノ効果ハ日本政府ニ於テ直接間接ニ白露ノ人々ヲ援助シ例ヘハ是等ニ武器ヲ供給スルカ如キコトヲナシ能ハサル責任ヲ生ストノ貴下ノ言ハ之ヲ加藤総理ニ伝ヘタルコトアリト述ヘラレタルニ「ヨッフエ」氏ハ法律の承認ノ結果尚他ニ一ノ重要ナル事アリ即チ承認後ハ露国政府ニ於テ極東ニ其地方ノ情況ニ顧ミテ余計ニ多クノ軍隊ヲ駐屯セシムル必要ナキニ至ルコト是ナリト

「ヨッフエ」氏ハ日露ノ条約ニ対スル利害ノ輕重ニ就テハ露国ノ世界外交上ニ於ケル立場ト日本ニ対スル露国側ノ期待スル利益ノ鈔キコトニ顧ミテ露国ハ待機ノ余裕アルモ日本ハ露国ノ富源開発「アングロサクソン」諸邦ノ排日其他一般外交ノ形勢ヨリ露国トノ親善關係ニ就キ多クノ利益ヲ

居リ

一、米國ノ對露態度ノ變更トシテ同國セネター「ウィレル」ノ勞農承認說ニ対スル「ユーナイテッド・プレス」ノ共鳴論、「ペンシルバニア」勞働組合ノ同様決議、紐育ニ於ケル「ハージング」ノ演說中「日本ノ對露政策變転ハ吾人ノ考量ヲ要サリトテ予ハ之ヲ以テ我政府ノ對勞農見解ヲ變更セムトスルモノニアラザルモ後者ガ唯一ニシテ且國民ノ承認セル政府ナルニ鑑ミ早晚我多數者ガ吾人ノ態度變更ヲ主張スルニ至ルコトアルベシ」トノ電報、「ジャパン・タイムズ」紙ノ勞農承認社説乃至米國親露派セネター「スミス・ブルクアルト」一行ノ十四日莫斯科ニ入レル由ノ電報ヲ掲ゲ

二、仏國實業家記者團ノ莫斯科入及右一行ガ政府ト關係ナキモ其視察ノ結果ハ政府モ興味ヲ有スルコト並政府ハ主義上露仏通商ノ復興ヲ歡迎シテ「ポアンカレ」氏ノ下院ニ於ケル答弁及露國赤十字社代表一行ノ仏國入並同一行ノ仏國訪問ハ兩國關係復興ノ第一歩タリトノ說乃至露國「ニジニ・ゴロド」ニ於ケル本年度大市「ヤルマルカ」ニ仏國ノ出品ヲ歡迎スル等ノ記事ヲ掲ゲ

有スルモノナリ又余個人トシテハ既ニ多クノ条約ヲ結ヒ此点ニ就キ「レコード」ヲ有スル者ナルヲ以テ必スシモ取り急キテ条約ヲ締結セサル可カラサル必要アル立場ニアルモノニ非ス若シ夫レ在再延期スレハ露國側ノ讓歩アルヘシナトト宣伝スルモノアルハ遺憾千萬ナリ如斯宣伝ハ反ッテ露國側ノ讓歩ヲ不可能ナラシムルモノナリ

「ヨッフエ」氏ハ從來後藤子爵トノ問答往復文書ニテ露國ノ意向ハ尽シタルモノニシテ其内「ノー」ト云ヒタルモノヲ外務省官吏トノ交渉ニ於テ「イエス」ト云フカ如キコトハアリ得ヘカラス

二七三 六月十六日

在浦潮渡辺總領事代理ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

列國ノ對露態度ニ関スル浦潮新聞ノ記事論說

報告ノ件

第五〇二号

(六月十七日接受)

往電第四八七号ニ関シ

当地言論界ハ依然反英の報道記事ヲ掲ゲ居タルガ十六日ニ至リ漸ク英露問題モ解決ノ望アル電報ヲ掲ゲ居ル一方日露会商乃至勞農對列國關係ノ有利ナル記事論說ヲ數日来掲ゲ

三、反勞農帝政的トシテ資本ノ羈絆下ニ在ル丁抹ト露國トノ今次通商条約ノ批准ハ後者ノ對外地位ノ勝利ナリト特筆シ

四、伊國トノ關係ニ関シテハ「ムッソリニ」ノ外交演說中曩ノ露伊予備条約ガ実行上困難ヲ生ゼルニ依リ一層広汎ナル協商準備ヲ為シアリトノ声明ヲ伝ヘ且莫斯科ニ於ケル伊國代表トシテ今回親露派ノ「スフォルツァ」氏ヲ任命セルヲ報ジ

五、維納電報トシテ「ユウゴスラヴィア」外相ノ同國政府ガ既ニ事實上勞農政府ヲ承認セルコト目下ハ通商復興ニ関シ兩國間交渉中トノ声明

六、支那ハ特ニ北京ニ露支会商局ヲ設置シ「ワン」博士ヲ局長ニ任命シ且哈爾濱ニ「ワン」ノ代理「ツァイ・マヲ・シン」ヲ交渉司トシテ特派スル由等熾ニ勞農政府ノ對世界の地位向上及歐米諸國ガ如何ニモ同政府トノ通商修好ヲ欲スルノ態度ニ傾キツアルヲ吹聴シ当地赤旗紙ハ昨今兩日ニ亘リ彼ノ「ゼノア」會議中列國ノ意外トシタル「ラッパロ」条約ガ露國ノ經濟の對外地位ヲ鞏固ナラシメ今ヤ日本ヲ初メ予テ反勞農のナリシ米國ヲシテ勞農ノ承認ハ時日ノ

五 日露国交回復交渉関係 二七四 二七五

問題ナリト言フニ至ラシメ帝政国トシテ亡命白徒ノ巢窟タル丁抹ガ吾人ト締約シ底力ナキ「ファシスチ」派ニ依リ樹立セル伊太利ガ否ガ応ニモナク露国ト通商ヲ欲スルニ至リタルハ如何ニ吾人ノ経済的貫目ト國際的地位ノ鞏固ナルカヲ証スルモノナリ云々ト最得意ニ誇張セリ

註 渡辺總領事代理六月八日發第四八七号電報ヲ省略セルガ右ハ日本政府ガ後藤氏ヲ介シ交渉開始ノ準備アル旨ヲ「ヨッフエ」ニ伝ヘタルコトヲ報ジ日露接近ヲ謳歌セル浦潮新聞ノ社説ヲ報告セルモノナリ

二七四 六月二十日 在リガ(出張駐在)上田書記官ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

日ソ交渉ニ対スル当地輿論報告ノ件

第七号

(六月二十一日接受)

日本政府ハ国内ノ輿論ニ余儀ナクセラレ勞農政府ト通商談判ノ開始ハ愚カ同政府ヲ承認スルニ至ルベシトノ勞農露國側ヨリ出デタル報道ニ対シ内外人ハ一般ニ異様ノ感ヲ抱キ右輿論ヲ以テ「ヨッフエ」一派ノ宣伝ノ結果ニ外ナラザルベシトセリ猶太人機關露字新聞財政經濟部主任「ジフ」本官ニ語リテ曰ク何処ニ於テモ煽動セラレ易キ労働者ガ凶ニ乘リテ勞農政府承認乃至同政府ト通商条約締結ノ必要ヲ叫

2 川上・ヨッフエ 非公式交渉

二七六 六月九日 閣議決定

日露非公式予備交渉ヘノ日本代表トシテ川上

俊彦ヲ任命スル旨内田外務大臣ヨリチチェリ

ン外務委員ヘ通告ノ件

帝國政府ハ露西亞社会主義連邦「ソヴィエト」共和国政府ニ於テ日露會議ニ関スル非公式予備交渉ニ対スル貴方ノ代表トシテ「アドルフ・ヨッフエ」氏ヲ任命セラレタル旨本月十六日付電報ヲ以テ通報ノ趣了承セリ
帝國政府ハ右非公式交渉ニ対スル我代表トシテ目下滯京中ナル波蘭國駐節特命全權公使川上俊彦氏ヲ任命スルコトヲ通告スルノ光榮ヲ有ス

註 本通告ハ六月二十一日仏文ニテ發電セラレタリ

二七七 六月十六日 在モスクワチチェリン外務委員ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

日露非公式予備交渉ニ対スルソヴィエト政府

代表任命通告ノ件

(六月十七日接受)

五 日露国交回復交渉関係 二七六 二七七 二七八

三七〇

ブハ何等怪ムベキ事ニ非ザルモ貴國商工業者等ガ同様ニ之ガ必要ヲ叫ブハ不思議ニシテ了解ニ苦シムモ之レ畢竟彼等ガ勞農露國ノ事情ニ暗キガ為ニ外ナラズ貴國商工業者ガ勞農政府ト通商条約サヘ締結セバ日露通商行ハレ又露国内ニ自由ニ仕事出来ベシト考ヘルガ大ナル間違ナリ云々

二七五 六月二十三日 在仏國石井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

日露交渉ノ經過ニ関スル情報ヲ其都度詳細ニ

電報方稟請ノ件

第四〇二号 (六月二十四日接受)

日露交渉ニ付テハ当地新聞モ多大ノ注意ヲ払ヒ居ル次第ナルヲ以テ本邦側ニ於テ機先ヲ制シテ其ノ經過ヲ發表セザルトキハ結局歐洲ノ輿論ハ莫斯科側ノ發表ニ依リテ指導セララルコトナリ我方ニ取り不利益ナル点少ナカラザル可キニ付今回ノ交渉ニ付テハ若シ公報等遅ルル場合ニハ新聞情報ニテモ差支無キニ付当方ニテモ事件ノ經過發表シ得ル様其都度成ルベク詳細ニ電報相成様致シタシ

露西亞社会主義連邦「ソヴィエト」共和国政府ハ日本帝國政府ニ於テ露國ノ正式代表ト第三露日會議ノ予備条件ニ関シ差当リ非公式タルヘキ交渉ニ入ルコトヲ希望セラルル旨ノ報道ニ接セリ依テ本官ハ露西亞社会主義連邦「ソヴィエト」共和国人民委員會ノ名ニ於テ右予備交渉ノ為當方代表トシテ極東諸邦駐露西亞社会主義連邦「ソヴィエト」共和国特命全權代表タル全露中央執行委員會委員「アドルフ・ヨッフエ」氏ヲ任命スルコトヲ閣下ニ通告スルノ光榮ヲ有ス

註 原文(仏語)省略ス

二七八 六月十九日 閣議決定

日露非公式予備交渉ニ於テ我方ノ執ルベキ方

針ニ関スル件

帝國政府ハ日露予備交渉開始ニ関スル本年六月二日付閣議決定ニ基キ後藤子爵ヲ通シ我方意向ヲ「ヨッフエ」氏ニ傳達シタル処右ニ対シ露國側ハ外務委員「チチェリン」發帝國外務大臣宛六月十六日付電報ヲ以テ露西亞社会主義連邦「ソヴィエト」共和国人民委員會ノ名ニ於テ日露予備交渉